
天才たちの反乱

秋島キサト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天才たちの反乱

【Nコード】

N9253G

【作者名】

秋島キサト

【あらすじ】

「世界征服に興味はあるかい？」——クラスの優等生・宝優陽はわたしに言った。西暦2157年、日本。エリート中学に通い退屈を持て余すわたしに、彼は世界中を巻き込むテロを提案する……。

0：教室（前書き）

「呼声」同様、1年ほど前まで掲載されていた作品のリメイクです（リメイクばつかですみません……）。

内容も文章も稚拙で書いた本人も恥ずかしいくらいですが、お付き合ひ下されると嬉しいです。

また毎日2話ずつ更新しようと思います。

0：教室

「かつて空は青かった——」

教壇の上をゆっくり歩き回りながら、若い女教師は言った。細く高いハイヒールの踵が、コンクリートを無機質に叩く。

機械的に整頓された室内。閉鎖的な箱の中に、三十五人の少年少女。

彼女は教卓の前でふと足を止めて、黒いノートパソコンを軽く操作した。途端、生徒達各自のノートパソコンの画面が、さつと鮮やかな青に染まる。右に打たれた説明で、一五〇年前の空の写真だと分かった。靴音がゆっくりと再開する。

「——自然に、な。確かに今も空は青いが……それは何でだ？松山」

「……防太陽光人工皮膜が、上空で地球を覆っていて、それが青いからです」

わたしの三つ前の席の女子が、小さな声で答えた。

「うん。そうだな。それで、我々の知る空は、大抵の場合明るい。だが、それは時として『雨』を降らす。『雨』の仕組みは？目黒」

「……海や川から蒸発して上空にできかかった雲を、集雲飛行機が絶えず回収して、南極の集雲倉庫に保管し、週に一回時間差で各地域にそれを放出、雨を降らせます」

わたしの二つ前の席の男子が、低い声で答えた。

「その通り。だから我々は、雨とは定期的に、一定量降るものだと思っっている。いつ降るかは事前に知らされるし、その日が大概休日だ。だが、かつては違った。かつて雨とは、ある程度の予測はできたが、操作はできないものだっただ」

生徒は誰一人表情を崩さない。

「『曇り』なんて天気もあつたらしいぞ。『通常』と『雨』の間。『通常』のことをわざわざ『晴れ』と言ったり、そうそう、雷とい

うのは実際に空から落ちてきたんだぞ。それで死人も出たらしい。想像もつかないだろう？」

生徒達は黙ってノートの画面を見つめている。

「私にもつかないよ。お前達も私も、その時生きていなかったことは同じだ。きつと今の我々が昔の『天気』を体験したら、いらいらして仕様がなさそうだな。朝通常だったのに夕方雨ときたものだ。

……だが、それは時として物語を生み出す。なあ、一つ聞くが、水戸」

「はい」

「通常の日以外を歩いていたら、急に雨が降ってきた。仕方なくその辺の建物の軒下で雨をしのいでいると、同じく雨をしのぎに来た女の子と出会った。話しているうちに仲良くなって、互いのメールアドレスを交換しようという話になった。……こんな物語をどう思う？」

「……どうも思いません。敢えて言うなら、とても危ない、です」
教師は立ち止まった。

「なぜ？」

わたしの一つ前の席の男子が、鋭い声で答える。

「相手の身元が分からないからです。そんな人に自分の個人情報をおつさり引き渡すなんて、不用心にも程があります」

教師はすつきりとした顎に形のいい指を当て、ふうん、と少し眉根を寄せた。

「……まあ、今ならそう考えるのが普通だな。だが昔は平気でそういうこともした。そこから新しい人間関係が生まれることもあったんだ。……さて、人間関係といえば森崎。お前は今学校にいるが――」

――
教壇の真ん中で、教師はこっちを見る。

「実際のところ、勉強という観点だけから見れば、学校はもう必要ない。自宅でパソコンから学習サイトにアクセスすれば、何ら問題なく勉強できる。にもかかわらず、お前達が学校へ来ている訳は何

だ？」

彼女の目は至って真剣だ。わたしはそれを無表情に見つめ返し、静かな声で答えた。

「豊かな人間関係を、築くためです」

丁度その時、教室の壁から鐘の音が響いた。教師は黒いノートの画面を閉じ、赤い唇に笑みを浮かべる。

「今日の総合学はこれでおしまい。と同時に放課。また明日、生徒諸君。しっかりテスト勉強したまえ」

生徒達も一斉に、各々のノートをぱたんと閉じた。三十五台分の音が美しく重なった。

1：教師

豊かな人間関係を築くことが学校の本質だというのなら、それは既に意味を失っている。

例えば挨拶。エレベーターでクラスメートと乗り合わせたとして、お互い顔を知っていても、余程仲が良くなければ一瞥をくれて黙り込む。一瞥すればまだいい方だ、うつむいたまま見もしない生徒もいる。仕方ないのだ、そもそも教師に挨拶しても返ってこないことが多いのだから、やる気も失せる。教室に入れば皆が皆定位置についてノートパソコンとにらめっこしている、誰か入ってきたところで見向きもしない。そして誰もそれを不快に思わない。そんな場所だ。

焼け石に水だ。今さら学校が義務的に人間関係云々叫んだところで、何も変わらない。その希薄化は止められないのだ。

彼らも重々承知している、それが無駄だということを。ただ世界の悪足掻きに付き合っ、豊かな、だとか掲げているだけだ。ニュースに映るお偉方も、真面目な顔でよく馬鹿なことが言えたものだ。わたしは彼らを見るたび軽蔑と同情を同時に抱く。

人間関係。そんなことに本気で取り組むのは、頭の悪い暇な学校だけだ。少なくとも今の社会、そういうことになっている。

「森崎」

教室を出てエレベーターを待っていると、ソレスティア先生に名を呼ばれた。先生はわたしより先に退室したはずだから、なぜまだ同じ十階にいるのか少し不思議に思ったが、すぐに何か用事があったのだろうという結論に行き着いて納得した。

わたしが軽く会釈をすると、先生は苦笑に近い顔をする。

「悪かったな。さっき、あんなくだらない質問して」

学校の意義云々のことだとすぐに分かった。確かにあれは聞く価

値もない質問だったが、わたしは薄く微笑む。

「くだらないなんてとんでもない。学校の大本となる、とても大事なことですよ」

先生はちよつと笑って答えなかった。そして、わたしが待っている下り用エレベーターの右隣、上り用エレベーターのボタンを押した。そのエレベーターは十階から二十階まで行くもので、総合科教員室は十四階にあるから、恐らくそこに行くのだろう。エレベーターは今十九階から動いていない。ちなみにわたしの方は、十階から一階まで下れるのだが、今丁度九階から下り始めたところだった。タイミングが悪い。多分中等部二年の者だろう。

各フロアには登り用下り用それぞれ四台ずつエレベーターがあるが、四方の壁に設置されているため一つ一つがなかなか遠かった。下手に動くよりは大人しく待った方が得策だろうと思い、わたしは黒いシヨルダーバッグを肩に掛けて当分開かないであろう灰色のドアの前で突っ立っていた。

他の移動手段としては、エスカレーターと階段がある。両方とも一階から二十階までの各フロアを真ん中で併走するように貫いている。エスカレーターが使われるのは、一階二階上下するときやエレベーターがなかなか来ないときなど。階段はほとんど使われない。停電したときのために、とついているらしいが、未だかつてそのようなことはなかった。きっとこれからもないと思う。学校、いや、国にもその自信があるに違いない。停電が起こるなんて有り得ない。万一第一電源が切れたところで、保護された第二電源が働くのだから――階段の狭さと暗さが、そう物語っているようだった。

わたしがこれから向かうのは三階だ。階段はもちろんエスカレーターでもひどく億劫。だからわたしはいつもエレベーターを使う。「けどなあ、実際どう思う、森崎」

ややあつて、先生が再び口を開いた。わたしは首だけ動かして背の高い彼女を見上げる。

「何がですか」

「学校さ。お前は実際に、学校が豊かな人間関係を築く場として機能していると思うか？」

先生はドアの上の階数ランプをやけに鋭い目で睨み上げていた。わたしよりずっと色素の薄い、透き通った茶色の瞳。それは若々しく生氣に満ちているが、反面、その若さにそぐわぬ冷静さが重く座してもいた。長い睫毛が綺麗な曲線を描き、大きな目をいつそう際立たせる。その上に整えられた弓なりの眉は、彼女の意志の強さを象徴しているようだった。

美しい人だ。

疑いようもなく、ソレスティア・クリスは美しかった。緩く波打つ、ダークブラウンの豊かな髪。指を通せば血のにじみそうな繊細さ。鈍い空気の教室で、そればかりがいつも光を受けてつやめくのだ。顔立ちはほとんどが欧米人であるが、日本人の血も多少混じっているらしかった。きめ細かな頬には汚れ一つなく、かといって真っ白というわけでもない、近年まれに見る血色のよい肌である。するのが面倒なのか化粧は薄いが、ふくよかな唇だけが真っ赤に彩られていた。すらりとした身体にいつも白いスラックスのスーツをまとい、赤いハイヒールを履いている。その様さまから彼女の職業を想像することはとても困難だろう。しかし彼女は、真正銘中学教師なのだ。そしてわたしのクラスの担任でもある。

彼女との付き合いはわたしが中三に上がってからだ。その二年前、彼女は既にこの学校に赴任していたのだが、担任ではなかった。わたしのクラスの総合学は他の教師が受け持っていた。今年初めて担任になり、同時に初めて彼女の授業を受け、驚いた。それまでの授業と明らかに違っていたから。

彼女の質問に対しわたしは少し笑った。

「思わない、と言ったらどうしますか？」

すると彼女は目を細めてごく楽しそうに笑う。

「ああ、やっぱりお前は違うな。私の授業を疎む味気ない連中とは違う」

明るく発されたその言葉に、わたしはいつそう強く彼女の頑なさを感じた。

自覚、していたのか。自分が多くの生徒や、教師にまで疎外されていることを。

この学校の他の教師達は生徒に質問などしない。ノートパソコンに資料を送り、延々と説明を続け、時間が来ればその途中でもぶつりと切る。人間味がないなんてわたしが言うのも何だけれど、事実、彼らは灰色のロボットのようだった。説明に間違いがない代わりに余分なことは一切しゃべらない。笑いもしない。そしてそれを暗黙に受け入れ望む生徒達もまた、機械じみていた。

そんな中で彼女は異色も異色、極彩色だ。笑いながら教室に入り、与えた資料に個人的意見を交えながら説明を加え、しばしば生徒達に質問を繰り返す。それは実にくだらない、テストに出ないような質問であったり、そうかと思えば誰一人答えられないような難易度の高い質問だったりもした。脈絡がない、無駄だと言えばそうかもしれない。実際わたしはそんな生徒達の文句を何度も耳にした。授業の仕方に問題がある、そう上から小言を言われているなんて噂も聞いたことがある。しかし彼女は自分の授業法を変えようとはしなかった。

わたしはそんな彼女が嫌いではなかった。灰色よりは極彩色の方が見ていて退屈しない、実に当たり前のことだろう。灰色を好む連中の考えることはおおかた想像がつく。ただわたしはそれを理解できなかった。

それは多分わたしのポジションに関係している、と思うのだが。

先生は眉を八の字にしてみせて、ため息混じりに続けた。

「奴らは頭が固すぎていかな。こんな学校だから余裕がないんだろ。その点お前はいい。本来ならより余裕のないポジションのはずなんだがな。……特待生というのは」

最後の一言を聞いても、わたしの心はこれっぽっちも動かない。わたしは黙って階数ランプを見上げた。やっと一階まで着いて、

これから上がつてくるところだろう。ずり下がってきたバッグを肩にかけ直す。中に入っているのはノートパソコンのみだ。

先生の言葉は独り言のように止まらない。わたしが答えずとも彼女は少しも腹を立てなかった。

「本当にこの代の特待生は異色だ。誰も彼もが必死になって手に入れようとする座をあつさり手中に収め、その維持にすら全く労苦を感じさせない。全く恐ろしい奴だよ、お前も、……もう一人も」

最後の一言に、今度は図らずも心臓が震えた。

もう一人。わたしはその「もう一人」の名をひどく嫌っているのだ。

「……宝、^{たから}優陽^{ゆうひ}ですか」

それでも彼の名を口にする、先生は柔らかく口角を上げた。

「あまり会話をしたことはないが、あいつも私の授業を疎まずに聞いているように見えるよ」

「……でしようね」

納得ができる、彼ならば。わたしと同じポジションにあり、それも、わたしとよく似たタイプの彼ならば。

先生は多分、わたしが彼の名を嫌っているのを承知でそんなことを言ったのだろう。顔を見れば分かる。簡単な質問をした直後に誰一人答えられないような問題を出したときの顔。目を細めた、壁をひっかき大嫌いな飼い主を困らせて喜ぶ猫みたいな表情だ。

わたしの目の前で彼のことを話題に出す人間は少ない。だからわたしは、こういうときの反応がうまくできないのだ。

それ以外に何も言えずうつむいていると、いいタイミングで右のエレベーターが到着した。上り用、つまり先生の待っていた方だ。音を立てずに灰色のドアが開く。中には誰もいない。当然だ。上り用は下りてくるときは誰も乗せないから、いわば十階は始発である。

先生はやや残念そうに唇をとがらせ、しかしすぐに笑顔になって、わたしに手を振りながらそれに乗り込んだ。

「じゃあな、森崎。気を付けて帰れよ。テスト近いけど勉強はほどほどにな」

教室での発言とは矛盾する台詞を残して、彼女はドアを閉めた。見えているか分からないが、わたしは黙ってお辞儀をした。

そしてエレベーターが上昇し出すと同時に、肩の力が一気に抜けた。

わたしは彼女のことを嫌いではない。それは事実だ。しかし同時に、彼女のこと、とても苦手でもあった。

わたしはこれまで彼女のようなタイプの人間と交際をしたことがないのだ。もともと交際範囲の極端に狭いわたしだし、たまに会話する人間も大概一歩距離を置いてくる。誰もつつこんで話してこない。当たり障りのないことしか言わない。そういう人間は扱うのが楽だった。こつちも当たり障りのない言葉だけを選択すればいいから。しかし先生は実に、実に遠慮なく、他人の感情を左右するような発言をする。わたしはそういった場合対応に困ってしまうのだ。正も負も出せない。肯定も否定もできない。結果黙り込むしかなくなる。先生はそれを分かっている節がある、——食えない人だ。

自分の待つエレベーターの階数ランプを見上げる。三階を通り過ぎたところだった。

宝優陽の名が嫌いだ。先ほどわたしはそう言ったが、それは別に宝優陽そのものが嫌いだということではない。

ではどういふことかという、そこにはまた、「特待生」というわたしと彼のポジションが関わってくるのだ。本来ならわたしに何の意味も与えない、その空虚なポジションが。

彼が関わったときに限り、非常に煩わしく重いもののように感じられる。

わたしは目を伏せ、大きな大きなため息をついた。

——面倒な話だ。

2：特待生

わたしのことを天才と言う人がいる。かなり、たくさん。

わたしはその呼び方に何の興味もないし、意義も見出せないが、客観的に見ればわたしはそうであるらかった。「この学校に特待生として通っている」——それは天才と呼ぶには十分すぎるステータスらしい。

ここ、世界立国際大学日本支部附属中学校。

国際機関が世界に七つ建てた「世界立大学」のうちの一つ、日本支部の附属中学校だ。

世界立大学とは簡単に言えば、エリート中のエリート達が通う大学である。幼稚園から大学までエスカレーター式なのだ、が——。最後まで残るのはごく一部。百人入って十五人残る、割合としてはそんなところだ。というのも、ここでは、級が一つ上がることに生徒をふるいに掛けるからだ。テストである。これに合格しなければ、留年の機会も与えられず即刻退学。これまでエリート街道を走ってきた子供達が、地元の学校やワンランク下の私立国立に落ちていくわけだ。

普通の学校では、進級時のテストで落ちる人なんてほとんどいない。けどここは違う。ここはまさに、弱肉強食の世界だ。合格点があるのではない、上位十分の九人までが合格するのだ。つまり、毎年十分の一が必ず、落ちる。そうして少しずつ減らしていった、幼稚園に入園した三百三十三人が、大学四年時には五十人になる。そこまで来れば俗にいう勝ち組。卒業後はほぼ全員が大学院へ進む。

その激戦のさらに激戦が、特待生である。その条件は厳しい。落第者を決めると違って、順位ではなく点数で決めるからだ。毎年度の初めに特待生テストがあり、多くの生徒が特待生を狙って受けるのだが、まずそこで合格する者がほとんど出ない。大抵の場合が

ゼロだ。わたしは幼稚園の入園試験を受けるとき、どうせだから特待生テストも受けてみなさいと母に言われて受けた。ほとんどの入園希望者が受けていたのだが、受かったのは、わたしだけだった。それ以来わたしはこの中学三年生まで、定期テストで全ての科目において九十点以下を取ったことがなかった（幼稚園で既に定期テストがある）。それが特待生で居続けるための条件。一度でも、一科目でも九十一点に満たなければ、それまで支給されていた授業料、施設費、教材費、交通費等々、全てストップされてしまう。九十一点なんて、点を聞くだけなら簡単なことのように思えるかもしれない。けれど特待制度を設けて以来、幼稚園から大学まで通して特待生でいられた生徒はまだ一人もないと言う。わたしのように、中学まで続けてこられただけで天才扱いというわけだ。

そういうわけで、世界立の生徒は常に戦っていると言われている。外との戦いではない、学校内での戦いなのだ。そんな戦いの中に、一般の公立私立の生徒が入る余地などないに等しい。一般の学校から編入するには、原則としてその学年の学年末テストと一緒に受け、十分の九の中に入らなければならない。一般の生ぬるい授業を受けてきた生徒が、いくら学習サイトに通っても、専用の教育プログラムをインストールしても、頭がついていけるはずがない。——というのが、常識的な意見。

ところが、いつだって例外はあるのだ。それが、彼。彼、宝優陽だった。

合成樹脂の床をゴム底の靴が歩く音がゆっくりと近づいてきて、わたしは身をこわばらせた。そして思い立ったようにランプを見上げて、階数を確認する。五階を過ぎたところだった。足音が背後に迫ってくる。

そしてその視界の端、わたしより背の高い人影が入った。わたしは視線を下ろしながら、さりげなくその横顔を確認する。そして少なからず動揺した。先生が彼の名を出したときより、ずっと動揺し

た。

だってそこにいたのは本人だったから。

噂をすればなんとやら、古いことわざは馬鹿にできない。平静を装いつつ、わたしは黙って元のように灰色のドアを見つめた。わたしと宝はクラスメートではあるが、親しげに言葉を交わすような間柄ではない。というより、これまで一言も口を利いたことがなかった。利く必要がなかったからだ。そしてできればこの先もそうでありたかった。わたし達が口など利いたら、それはきつとたちまち噂になってしまう。

「ねえ」

それなのに彼は堂々とわたしに話しかけた。

わたしは意外さと厭わしさから声を出さなかった。ちらつと目を向けるだけだ。彼は特に気にする様子もなく、下りエレベーターの階数ランプを見上げたまま淡々と続けた。

「さつき、僕の名前を先生との会話に出しただろう」

わたしももう一度ランプを見上げる。十階だった。

スツとドアが左にスライドして開く。上り用と同様、中は空だった。わたしは彼の顔を見ずに乗り込みながら、低いトーンでようやく答えた。

「立ち聞き？ 案外趣味が悪いのね」

「人聞きの悪い。エレベーターに向かったらたまたま君らの会話が聞こえたんで、今出ていったら気まずいだろうと思い待ってたただだよ」

「そう」

わたしに続いて彼も乗り込み、ドアのそばのボタンを押して閉める。そのドアが閉まりきったとき、わたしは本能的に身体を固くした。教室よりももっと閉鎖的な空間に、彼と二人だけで閉じこめられたのだ。囲うのは鉄ばかり。壁はクリーム色をしていたが、寄りかかるとひやりとした。わたしは一・五メートル四方の空間の隅、できるだけ彼から離れたところに立った。丁度対角線になる位置だ。

階数ボタンが近くになく、仕方なく「三階を押して」と彼に頼んだ。彼は素直に三を押し、続いて一を押した。

「一階に住んでいるの？」

「うん。この近くの一軒家なんだ」

「へえ」

わたしは少しだけ驚いた。まだこの辺りに一軒家があったなんて、初耳だ。大部分の人間は高層マンションに住み、店も公共施設も高層ビルの中にある。ビル同士が空中道路で連結し、歩行者も車両もそこも通る。もちろん一階に住む人はいるけれど、それは大体「マンションの一部」であり、「一軒家」に住む人は——いやそもそも一軒家自体が、あまり存在しなかった。大層古いだろう。

「築七十年だって」

わたしの思考を読んだかのように彼が言った。反対側の壁に寄り掛かり、静かに微笑んでいる。わたしはそのとき初めて、「宝優陽」の全身をまじまじと見た。わたしは普段あまり人の顔を意識しないから、彼が随分端整な顔立ちをしていることに初めて気づいた。

彼は多少日本人離れた容姿をしていた。欧米人の血が流れているのかもしれない。瞳の色素は薄く、透明感のある茶色だ。ソレスティア先生のものとも少し似ている。男子にしては睫毛が長く、肌の美しさも相まって女性的な雰囲気を出していた。髪はさらさらした焦げ茶色。きつと光を浴びれば金色に変わる。わたしの純日本人の真つ黒な髪とは根本的に成分が違う気さえた。身長は一七〇センチ程度だが、まだ十五歳、これからもっと伸びるだろう。そうなれば今よりもっと映えるに違いない。街を歩けば嫌でも目に付く、そんなルックス。——なのに。

どうしても一つだけ、解せない部分があった。

眼鏡だ。

「……古いのね」

わたしは二つのものに対して言った。家が古い。一つはもちろんそれ。そしてもう一つは、多分彼自身はそれについて言われたと気

付いていない。――眼鏡。彼が掛けている、黒縁の野暮ったい眼鏡。正直な話時代遅れだ。眼鏡なんて、それこそ七十年前には廃れている。ずっと昔ブームになったこともあったようだが、今や視力が下がれば皆コンタクトレンズを着用する。昔のそれより遙かに精密で一ヶ月は付けっぱなしでも安全。それをわざわざ、掛けたりはずしたり磨いたり、運動するにも邪魔だし、煩わしいし、良いこと無しの眼鏡を好んで着ける奴なんて、余程の酔狂か訳ありだ。

彼がそのどちらであるかは知らないが、せつかくの端麗な容姿がその眼鏡のせいで全て台無しになっていた。

「古いよ。今度見に来るといい」

気付いていないらしく、彼は微笑したまま言った。わたしも口元に笑みを作り、適当に頷く。

「そうするわ」

そのうちに、エレベーターが八階で止まった。誰かが乗るのだろう。扉の向こうから、女子の話し声が聞こえてくる。わたしはさつと笑みを消し、まるで今まで会話もなかったかのような空気を作ろうと努めた。本当なら覆面でもつけて顔を隠したいくらいだ。

ドアが音もなく右にスライドし、視界が開ける。女子が二人、談笑しながらエレベーターに乗り込もうとしてきた。鞆を抱えているから、これから帰るのだろう。宝が少し身を引いて、二人乗れるだけのスペースを作った。

そのとき初めて、二人はわたし達が乗っていることに気付いたらしい。笑いながら何気なく目を向けて、そして二人とも硬直する。

あからさまにわたし達を見て凍りついた。

「……乗るの？」

宝が柔らかい口調で尋ねる。二人は我に返ったようにびくつと肩をすくめ、あわてて笑顔を繕った。

「い、い、いえ、いいですっ!」

「そう?じゃあ閉めるよ」

「ど、ど、どうぞどうぞ!」

宝はにつこり笑って、閉ボタンを押した。おどおどした女子達の姿がさつと見えなくなる。何事もなかったかのようにエレベーターが再び動き出すと、宝がまた壁により掛かって言った。

「……君は、」

「……？」

「自分が特待生であることについて、どう思う？」

わたしは静かに彼の顔を見る。眼鏡に白い照明が反射して、目が見えなかった。

「……どう、って」

彼の口からそんな質問が出たので、わたしはいささか困惑した。

宝優陽、彼がわたしと同じ特待生であることはこの人間なら例外なく知っている。彼は中学一年生から中途入学な上に、いきなり誰もが羨む特待生の座をかつさらったのだ。

特待生というのは、学費云々よりもその名前に意味がある。それはつまり、常に好成績を保ち続けた者だけに与えられる、生徒達にとっての最高の地位なのだ。それをどこの馬の骨とも知れぬ男子が獲得した。そのことは幼稚園からの在學生にとっては多大なショックであり、一気に学校中に知れ渡った。そこで被害を被ったのが、このわたし。

わたしが特待生であるということもまた周知の事実で、他の生徒達は常にわたしを敬遠していた。わたしはそれでいい気になっていたつもりはないが、どうやら、そう見ている輩も少なくはなかったらしい。宝が中途入学してきたとき、わたしが怒り狂っているとか二人は険悪だとかそんな噂が流れていた。生徒はもちろん教師さえも、好奇の目でわたし達を見た。だから三年生になって宝と同じクラスになったとき——正直憂鬱だった。学校側が何を考えてわたし達と一緒にしたのは知らないが、収まりかけていた生徒達の好奇心は再燃してしまったのだ。さっきの子達だって、多分二年生だろうけれど、わたし達二人を知っていたから乗らなかった。

だからわたしは宝とあまり関わりたくないのだ。自分の名と彼の

名と一緒に出るだけでうんざりする。わたし達はお互い何とも思っていないのに（少なくともわたしは）、周りが勝手に騒ぎ立てる。迷惑極まりないのだ。

そんな彼と今こうしてエレベーターに乗っているという状況は、甚だいとわしいものでもあり、また、ひどく新鮮だった。

わたしは少し彼の質問を考えて、首を振る。

「……何も思わないわ。お金さえ浮けば、あとは興味がないもの」
宝はそれを聞いてただ笑った。彼が自分の意見を語る気がなさそうだったので、わたしは質問を変えて返してみる。

「あなたはどうしてこの学校に来たの？」

問われて彼は小首を傾げた。

「だってほら、わざわざ途中入学するなんて、よっぽど何かになりたいとか思わなければ普通じゃないでしょう。国立病院の医者とか、国際機関の重役とか……ソレスティア先生みたいに、世界立の教師とか」

「……ああ」

なるほど、と彼はそのとき初めてそういうことに気付いたような顔をした。随分一般的なことを訊いたつもりだったが、彼はあまりそういったことに関心がないようだった。肩をすくめて屈託なく笑う。

「母さんが冗談で記念に受けてみたらーって言うから受けてみたら、特待生も合格したから、そっちの方が安いってことで入っただけだよ」

わたしは宝の言葉を聞いて苦笑した。

「全ての在校生を敵に回すような発言ね」

「事実なんだ、仕方ないよ」

そのうち五階に止まった。気の強そうな男子が一人待っていたけれど、乗らないから閉めてしまった。

「ソレスティア先生も……」

閉まるドアをぼんやり眺めながら、わたしは呟く。彼は突然掌が

った先生の名に少し意外そうな顔をした。

「世界立卒だったかしら？」

世界立の教員になるのは、下手な医者になるより余程難しいと聞く。世界立か、またはそれに準ずるレベルの大学を卒業していないと、とてもじゃないけれどなれるものではない。ましてや、総合学——全ての教科をミックスした、最も多くの知識を必要とする教師など。

「ああ、そうみたいだよ。アメリカのね」

宝がさらりと答えたことに、わたしは驚きを隠せなかった。先生が日系アメリカ人であること、世界立卒であることは知っていたが、どこの出身かは知らなかったのだ。ずっとアメリカにいたのか、それとも幼い頃から日本で育ったのかも分からない。分かるのは日本語も英語もよどみなく話せることくらいだった。

「よく知ってるわね」

「……結構有名な話だよ？」

「……ああ、そういえばそうね」

とつさに無知をごまかした後、すぐに自己嫌悪に襲われて下を向く。彼はそんなわたしを見てあきれ混じりにくすりと笑った。

「君は他人に関心がなさ過ぎるね。僕の顔だって、きっと今日までちゃんと見たことがなかったんだろう」

わたしは黙って彼を睨み上げながら、その行為が図星から来るものだと自覚していた。彼はただにこにこと笑っている。今日は妙な日だ。一日にこんなに他人と話すのは久しぶりだし、その上、話した相手がどっちも食えない人間とは。

居心地悪くうつむくと、丁度エレベーターが止まった。階数表示ランプが三を示している。しめた、わたしは思わずそんなことを思ってしまった。わたしの住んでいる階だ。

「じゃあわたし、降りるから……」

一応笑顔を作りながら、早足に彼の前を通り過ぎる。彼は相変わらずにこにこ笑いながら、

「うん。また明日」

などと、近年まれに聞く言葉を言った。そのとき既にわたしはエレベーターの中にはおらず、背中で彼の声を聞いていた。

背後でスーツとドアの閉まる音がする。幸いなことに、エレベーター付近には誰もいなかった。三階は特別教室のフロアだ。人は少なく、いたとして皆四隅の出口から外へ出ていくだけだった。

喉に詰まっていた息を一気に吐き出す。数十秒ぶりにまともに呼吸をした気がした。

3：家

ガラス越しに見た空は雲一つなく、べったりとした水色をしている。わたし達はそれが作り物で、その向こうが本当は灰色であることを知っていた。空とはそういうものだ。五時を過ぎると徐々に暗くなり始め、七時には真っ暗になる。どこもそうだ。昔は「太陽」と地球の自転の関係で「時差」というものがあつたらしいが、今はない。今現在わたしの時計で四時ならば、イギリスだろうがブラジルだろうがどこだって四時。一斉に夜が訪れ、一斉に明ける。実に単純な、分かりやすいシステムだ。

見上げると、上層の空中道路の合間から集雲飛行機が見えた。それ自体がタンクになっていている巨大な四角いボディ。空の光を受けて銀色に鈍く光る。後部にラッパ型の集雲口があり、目に見えない「雲」を次々と回収しているらしかった。あれを明々後日ここに放出するのだろうか。そしてその日は「雨」となり、学校は休み。

わたしは目を落として、コンクリートでできた三階の空中道路に踏み出した。二車線の車道を、鋭く先の細まった自動車やそれに比べれば小さな自転車が周りに目もくれず走っていく。ポニーテールにしたわたしの黒髪が不自然な風に乗ってなびく。道路の上は防弾ガラスで覆われていて、滅多なことがなければ割れない（さすがに二十階から三階まで大型トラックが落ちてきたら割れるが、大体その前にどこかにぶつかって落ちてこない）。宙を貫通するかまぼこ型のトンネルみたいなものだ。所々天井に空気清浄機が設けられていて、絶えず淀んだ空気を洗っていた。それが無いのは一階、つまり地面のみ。地面は天井がないが、上層の空中道路自体が重なって天井のようになっていて。雨が降ってもあまり濡れない。だから、雨の日は別段交通に不便はないのだ。休みなのは定期的に丁度いいからというただそれだけの理由。

歩道の脇に取って付けたような花壇が延々と続いていて、赤や橙

の花が一年中咲いている。プラスチックのホースが等間隔に土から生えていて、毎日決まった時間に水をやるのだ。通行人の服が濡れてはいけなからと、朝の早い時間だったと思う。わたしはそれを見たことがないが、人工土から生える花はいつも不自然にぴんと立っていた。その一つ一つがクラスメートの顔に見えて、わたしには滑稽だった。

道の途中がいくつも枝分かれして、それぞれがそびえ立つビルに伸びていく。丁度どの学校も下校時間で、いろいろな制服の生徒が歩道を埋め尽くしていた。無表情に一人道を急ぐ生徒がほとんどだが、二、三人固まって力無い笑いを浮かべながらだらだら歩く生徒もいる。この辺りには比較的レベルの高い学校が集まっているのだが、それでもやはり、落ちこぼれというのは存在するのだろう。わたしの学校にはいない、そういうのは毎年消えるから。その点では世界立は賢明と言えは賢明だろう。

わたしが気だるげな女子の二人組を早足で追い越すと、背中にとげとげしい視線を感じた。さすがにわたしのことを特待生だと知っているわけではないだろうが、彼らの世界立生に向ける目は世界立生がわたしに向ける目と変わらなかった。ねたみ、ひがみ、理由のない蔑み。大体この制服もいけない、ワインレッドのブレザーなんて目立ちすぎる。白いYシャツに黒いリボンというのも異質だ。下は深緑を基調としたチェックのプリーツスカート。足首までの茶色いショートブーツに、黒のニーソックスだ。驚いたことに、これら全てが学校指定なのである。男子の制服もそうだ。男子は緑のブレザーにやはり黒のネクタイ、そして黒のスラックス。靴下など見えもしないのに学校指定なのだ。「世界立生としての自覚を持ち、規律ある服装をする」——全く、どこまで自己主張が強いのかとわたしさえあきれてしまう。

わたしは慣れ親しんだ彼女らの視線を無視して、駐輪場に向かった。わたしは自宅から自転車を通っている。ずっとそうだった。幼稚園と小学校はそれぞれ違う建物だったけれど、この近辺にあるの

で、家からの距離は大体同じだ。小二まで母の自転車で送り迎えしてもらい、小三から一人で来るようになった。普通ならそんなもの使わず歩いて通える地元の学校に行くものなのに、わたしはなぜこんなところまで通っているのだろう。駐輪場の入り口で生徒カードをかざしながら、これまで何度も浮かべた疑問を再び思った。

機械音がして、無骨な鉄のドアが開く。学校から少し離れた、道の奥まったところにあるので、犯罪対策が重要らしい。入学時生徒全員に配られる生徒カードか、世界立の教員であることを証明する教員カードをキーにかざさなければドアは開かない。中は常時照明が照っていて外以上に明るく、ずらりと並んだ生徒達の自転車をてかてかと光らせていた。わたしはその中の、中等部三年A組の列へまっすぐ進む。どれもこれも似たような自転車だが、後部に番号の書かれたシールが貼ってあるので迷うことはない。二十三番。軍隊のように整列した中に自分のものを見つけ、左右のハンドルの真ん中にある指紋照会キーに親指を当てた。一秒経たずにロックが外れて、車体がぶるんと小さく震える。わたしは列を乱すようにそれを引き出してまたがり、その場から走り出す。

どちらかというと、この「自転車」は昔の「バイク」に近い。バイクよりはもつと軽いけれど、昔の自転車ほど疲れるものでもない。基本的には機械仕掛けで、多少のバランス感覚は必要だが、ごく必要はない。ものによっては二人乗りまで公式に可能。速さは歩きから自転車まで選択可能。ただし、自動車レベルは十八歳から。

わたしはいつも徒歩の三倍程度の速さで乗っているから、それほど速くはない。家まで二十分くらいかかる。自動車の邪魔にならないよう車道の端を走って、いくつもの角を曲がった。途中、同じように自転車に乗った生徒を何人が追い越す。そのたび背中にあの視線を感じるのだが、もういちいち気にしてなどいなかった。気にしていたらきつと、わたしはとうに発狂、よくて鬱状態だ。実際過去の特待生で、内からも外からも嫉妬を受けて精神を病んでしまった人がいたらしい。ばかばかしい、わたしは絶対にそんなことにはな

らない。

やがて、都心からやや離れた閑静な住宅街に入る。この辺りは店も公共施設も少なく、本当に人が寝泊まりするためだけに存在するような空間だ。やはり学校帰りの生徒がちらほらいたが、皆死んだように無言で、亡霊のような足取りでそれぞれのマンションに吸い込まれていく。わたしも彼らに混じって、大量にあるマンションのうちの一つ、より質素なものに吸い込まれていった。狭い通路を歩いた一番奥に、わたしの家がある。

「ただいま……」

ドアを開けて言うが、返事はなかった。廊下の奥にドアがあり、その中がリビングだ。母は大抵そこにいて、窓際のソファに腰掛けテレビを観ている。そして今も、かすかに漏れてくるアナウンサーの声から、そうであることが分かった。

ドアを開けると、案の定、母がソファに深く腰掛け虚ろな目でテレビを観ていた。壁にはめ込まれた液晶画面の中で、アナウンサーの男がこちらにノートパソコンを向けて何かしゃべっている。わたしが手前にある食卓の椅子を引いて座ると、母はやっと娘に気付いた。張りのない、たるんだ顔をこちらに向ける。

「あら瞳、帰ってたの」

「……うん」

わたしが頷くと気だるげなため息をついて目を戻す。

「帰ってきたらただいまくらい言いなさい。びっくりするでしょうが」

「……うん」

口答えをする気にもならなかった。すればまた余分な時間とエネルギーを喰うに決まっている。わたしは鞆を下ろし、テーブルの上にあるポットから茶を入れた。立ち上る湯気で頬が湿るが、ゆるむことはない。できれば部屋で飲みたいのだが、母はわたしが部屋に飲食物を持ち込むことを禁じていた。帰ってくると喉が渴くので、仕方なくリビングで茶をすする。その間するような会話もなく、わ

たしは黙ってニュースを眺めていた。インターネットを使った犯罪のニュースのようだった。

『……ご自宅のパソコンのハッキングを防ぐためには、最新の対策ソフトが不可欠です。怠らずに購入・インストールしてください。今年の被害総数は昨年の数をやや上回っており――』

「怖いわねえ。あんたのノート、大丈夫？」

母が他人事のようにぼやく。わたしは特に何も答えなかったが、母も特に気にしていないようだった。

『先日、埼玉県のあるコンビニのセキュリティコンピュータがハッキングされ、売上金約五千万円が強奪された事件ですが、本日午前十一時頃警察が犯人グループを捕まえました。犯人は――』

わたしは今初めてその事件を知った。似たような事件は毎日至る所で起きているのだ、いちいちチェックなどしてられない。余程大規模なものでない限り、覚えている必要はないだろう。

『――さて、ハッキング強盗といえば三年前の世界立美術館事件ですが……。この事件の犯人は、依然として見つかっていません』

「これ、あんたの学校の近くよね？」

また母が言つて、今度はわたしも頷いた。しかし母は別段その答えに関心はないようだった。

世界立美術館は、その名前からある程度予想できる通り、世界立中学の近くにある。世界立というだけあって、世界中の名美術品が比較的多く集まっている。もちろんそれらは全て本物で、一般庶民には到底手の届かない値段が付く。それが三年前、一式、盗まれた。

実に鮮やかな手口だったという。事前に警報もロックも全て内部コンピュータから解除し、あとは夜中に犯人達が侵入して手際よく品を持ち去るだけ。美術館は十階にあるのだが、そこに到るまでに通る道やエレベーターの防犯カメラも何も映してはいなかった。半径二キロ以内にある全てのカメラが作動停止になっていたらしい。犯人達は何の痕跡も残さなかった。美術館は荒らされた形跡もなく、

翌日には警報もロックも防犯カメラも全て元通りになっており、美術品だけが忽然と消えた、そんな印象だったそうだ。

犯人は複数いると考えられているが、彼らの行方どころか盗品の行方も分かっていない。警察は三年間ずっと追っていると言うが、国民の間では既に伝説化していた。むしろ捕まえて欲しくない、そういう輩さえ現れた。

かくいうわたしもそのうちの一人だ。

その芸術的なまでの鮮やかさ。一晩で美術館周辺のカメラを全て停止させ、誰にも気付かれずにロックをはずすなんて、並大抵のハッカーではない。そのくせ事は全て穏やかに済ませたのだ。なかったのは全ての美術品のみ。美術品がなくなったところで、一体誰が困るという？せいぜい管理会社の先が危ぶまれる程度である。わたしは美術に全く理解を示せないし、わたしだけでない、国民の九割九分がそうだろう。ぐちゃぐちゃした丸だの曲線だのを描いて葛藤だ嘆きだと言われても、わたし達にとっては丸や曲線でしかないのだ。残りの一分だけが理解できる、そんなものは必要ない。ならばむしろ、九割九分が喜ぶ完全犯罪を伝説化した方が美しいではないか。

わたしはカップに残った茶を一気に飲み干した。麻痺するような熱が喉を流れていく。カラになったそれをキッチンの洗浄機に入れ、わたしは鞆を持って自分の部屋に行った。リビングの隣にあり、直接行けるのだ。鞆をベッドの上に放り投げてドアを閉めると、ニユースの音が小さくなった。

ここ数年、わたしはずっとこんな生活を繰り返している。

この家に母と二人きりになって十数年。正しい時間は覚えていない。父がいつ北海道に「単身赴任」して、どんな顔をしていたのかも覚えていない。ただ母が働きもせずこうして不自由なく暮らせているということは、ちゃんと稼ぎは入れているのだろう。わたしの知らぬ間に、父と母の間で何らかの取り決めが成されていたのかも知れない。だから母はあんなにだらだらと安心していられるのだ。

しかしわたしはもう二度と父と会うことはない。幼い頃のうつすらとした予感が、近頃は確信へと変わっていた。

わたしはこのまま母と二人で大学院を出るまで暮らし、それから世界立の教師なり国際機関の職員なりになって独り立ちするのだろう。その後のことは想像できない。結婚をしたいとは思っていない。独りで毎日膨大な仕事をこなし、老いて、死んでいくのだろうか。

考えると憂鬱になる。わたしは黒いリボンを緩めて、ため息をついた。

4：クローン

しばしば分裂することがある。

わたしの視界は一つ。指先の感触も一つ。耳から入る音も、自分の発する声も一つ。それなのに脳が二つある。一つの視界と一つの感触と一つの音と一つの声、それを共有するもう一つの意識が、もう一人のわたしがいるのだ。そして彼女は動かない。わたしが誰と話をしても、先生に動揺させられても、彼女は決して動じない。揺れ動くわたしを遠くからただ冷たい目で眺めている。彼女は確かにわたしであるのに、わたしをひどく蔑んでいた。そしてわたしは彼女の前に在る自分をひどく恥じるのだ。

わたしはそれを「分裂」と呼んでいた。なぜその現象が起こるのかは分からない。ただそのときわたしは確実に、精神が半分に分かれていると感じた。空虚なのだ。心臓の真ん中に風穴が開いてしまったみたいに、すかさずかしている。それはよく他人との会話中や、ぼんやりと思考を巡らすときに起きた。わたしが顔を動かせば動かすほど、表情を作れば作るほど、考えれば考えるほど、彼女の目は冷たく鈍く光っている。石像のように沈黙して、眉一つ動かさずに、真後ろでわたしを見据えているのだ。

わたしが二人いる。わたしと全く同じ、わたしが。

「全く同じ人間などこの世にいない」

教壇のソレスティア先生が鋭く言い放った。その声がわたし達を一つに戻し、心臓に開いた風穴をふさいだ。ようやく空虚が消えたのだ。わたしは誰にも気付かれないように深く息を吐いて、改めて教室を見回した。いつも通りの光景。人形のように並んだ生徒達が狭い机に置いたノートパソコンを見つめ黙っている。ソレスティア先生はノートを置いた教卓に両手をつき、その生徒達の顔を一つ一つ順番に見つめていた。

その視線がわたしの元まで届き、たまたま顔を上げていたわたし

は彼女と目が合った。先生はふつと微笑し、ぐるりと教室中を見回して続ける。

「……というのが、一応の常識。だが現実には不可能ではない。その方法は？むなかた宗像」

「クローン、です」

わたしの後ろの席の男子が単調に答えた。先生は頷いて、教卓のノートを操作する。

「そうだ。クローン技術は百年以上前から家畜や農産物に幅広く応用されている。絶滅危惧種の保護にもな。まあそれは所詮応急処置にすぎんが。絶滅危惧種は地球で生きられないから滅んでいくんだ、地球を改善しない限り根本的な解決にはならん。皆分かっていることとは思うが。——ああ論点がずれた。で、私達が常日頃食べている肉や野菜の半分以上はクローンだ。百年以上前から改良に改良を重ね、現在ほぼ問題なくクローンを作製、摂取できる。遺伝子の突然変異も九十九パーセント見られない。そこで諸君に質問しよう」

各生徒のノートの画面に、クローン技術の歴史、世界初のクローン羊を写した古い写真、現在の牧場の様子などが等間隔にスライドされる。二匹の羊の写真が二枚、左右に比較する形で映し出された。左がクローン羊で、右が普通の羊だそうだ。正直、クローンも普通のも変わらないように見えた。羊なんて群れてしまえば一個の塊だ、同じ遺伝子も何もない。飼い主は一頭一頭見分けがつくというのだろうか。

不意にスライドが止まり、ただ一枚の写真が画面の中央に映し出される。妙齡の欧米人の女性が一人、生まれたての赤子を抱いて微笑んでいた。目元にはくろのある女性だ。

わたしはその女性を見たことがあった。わたしだけでない、他の生徒も、他の学校の生徒も、必ず知っている顔だ。そしてそれ故に、「教科書でさんざん見た顔」としか認識されなくなっている。先生はうんざりした顔の生徒達に薄く笑い、やけにはっきりした口調でこう投げかけた。

「なぜ、ヒトのクローンを作ってはいけないのか？」

その問いかけも、「さんざんテストで出た問題」。

「……この女性はアデレード・ライト。約三十年前、世界で初めて公式発表されたヒトクローンの素である、科学者だ」

聞き飽きた名だった。歴史やら倫理やらで彼女を取り上げない学校はない。それほど彼女のしたことは重要で、かつ、「最もしてはいけないこと」だったのだ。

三十年前。先生もわたし達もまだ生まれてきていないが、わたし達の親世代なら誰でもリアルタイムで知っている事件。

「抱えているのは体外受精後胎内で育った彼女のクローン。名前はアデライン」

同じ人間なのに違う名前を付けるとは妙な話である。わたしは少しだけノートの画面に顔を近づけ、赤子の顔をじつと見た。目元にほくろがあった。

「生後二年五ヶ月まで問題なく成長するも、原因不明の発熱により急死。絶望したライト氏は研究資料を知り合いの科学者に託し自殺。アデライン誕生時からヒトクローンは大きな問題になっていたが、この二人の死をもつていよいよ本格的に禁止される。——さて」

ぱつと写真が消えて画面が暗くなる。

「ヒトクローンの問題点とはいったい何だろうな？山口」

「……『倫理上の問題』です」

隣の列、一番前の席の男子が淡々と答える。先生は期待通りと言わんばかりににやあと笑ってすかさず言った。

「倫理上。うん、倫理上ね。便利な言葉だ。……じゃあその『倫理上の問題』というのは具体的にどんなことだ？」

思いも寄らぬ所を突かれた彼は、「え」と言っただけで黙り込んでしまった。

——出たよ。他の生徒達は声を出さずに異口同音に呟く。いつものやり口だ。簡単な問題を出した後に誰も答えられないような問題を出す。テストではそこまで深くつっこまれないから、皆「倫理上」

としか覚えていないのに。

本気なのか演技なのか、先生は至極残念そうに眉を下げた。

「なんだ。分らないのか。じゃあもういいぞ。誰か分かる奴いないか？」

元々静かだった教室がさらにしんと静まりかえる。諦められた彼が唇を噛んでうつむいた。仕方がない、運が悪かったのだ。わたしはそう思いつつも、全く同情を感じていなかった。テストに出ることしか覚えられない頭を恨むことだ。そんな気持ちもあったから。

「いないのか？先生は悲しいぞ」

先生は肩をすくめて大袈裟に首を振った。そういう態度が生徒達の反感を買うのだ、とわたしは内心苦笑する。彼女はふざけているようにしか見えないのだ。わざと難しい問題を出して、生徒達が困るのを楽しんでいる。そうとらえる奴がほとんどだろう。しかしわたしは、彼女はひょっとしたら本当に悲しんでいるのかもしれないと思っていた。テストに繋がることばかりを必死に覚え、灰色の授業を好む生徒達を、嘆いているのかもしれないと。

けれど先生に嘆かれたところで、わたしには手を挙げて発言する気などなかった。しても何の得にもならない、また他の連中の嫉妬を買うだけだ。目立つのは自分のポジションだけで十分過ぎる。それに、

「はい」

確実に正解を言うであろう男子が手を挙げたのだし。

わたしはゆつくりと、視界の左で動いた彼に焦点を合わせる。他の奴らはわたしよりずっと早く、彼が手を挙げた瞬間から血走った目でそこを睨んでいた。先生もゆるりと彼を見て、嬉しそうに目を細めた。

「ああ。宝。言ってみろ」

教室の空気が変に緊張する。宝が手を挙げて発言するのは珍しいことだった。彼も恐らくわたしと同じで、普段の授業で目立つことはないと思っている節がある。大体いつも発言するのは、必死に

成績を稼ごうとしたり自分の能力を誇示しようとしたりする、わたし達よりワンランク下の生徒。わたし達はそのどちらもする必要がないので、授業中は大人しいものだ。

しかし宝は今背筋を伸ばし、よく通る声で質問に答えていた。

「まず寿命です。ライト博士のクローンのように突然死する可能性がありますし、技術が発達したとはいえ、細胞一個一個を寸分違わずコピーしてヒトを作り出すことは難しい。細胞に不備があれば寿命が通常より短くなる可能性は否めません。そして、社会的問題。

同じ顔の人間が何人もいれば社会が混乱することぐらい、三歳の子供でも分かります。それに、例えば、優秀な人間だけを大量にコピーして、彼らが社会を支配してしまったらどうでしょう？同じ性質の塊を砕くことは容易ではありません。同様に、軍事は。また、人権は。コピーである彼らに、『素』の人間と同等の人権がちゃんと与えられるのか。そういった点が、社会において未だ解決されていないと思います」

よくもまあ噛みもせず間もあけずらすらそんなことが言えたものだ。わたしでさえ素直に感嘆する。先生は柔らかく微笑み、満足げに頷いた。

「その通りだ。よくまとまっていた。ありがとう」

室内の妙な緊張感が和らぐ。その代わりに、嫉妬を押し殺した知ったかぶりの空気が充満し始めていた。言わなかったけど、そんなのは自分も分かっていたことだ。そうやって余裕を装おうとするクラスメート達に、わたしはあきれるより他なかった。

そんな空気が押し寄せてきても宝はちよつと笑って、何も映っていないノートに目を戻した。先生も彼から目を外し、陰湿な空気の教室を見渡す。

「……だが実際、ヒトクローンを作りたがっている科学者は多い。自分なら作れる、自分なら失敗しない、そう思ってる奴がごまんといるんだ。もともとああいふ連中は好奇心の塊だからな。作りたくて作りたくてうずうずしている。……いや」

先生はふと、思い立ったように言葉を止めた。そしてとても遠くを見るような目で、教室の後ろの壁を見つめる。壁。いいや、多分もっと遠いところだろう。壁を通り抜けて、建物そのものを通り抜けて、空に突き出た場所。きつと彼女にしか見えないものが映っている。

そしてひとしきりそれを見ると、また元のように目を戻し、にやつと笑った。

「もう作ってるかもしれんぞ」

その言葉は何だか意味深で、けれど、何の意味も持たないようにも思えた。

クローン人間を作ったただの作ってないだのという噂は、実際百年以上も前から世に出ていた。初の公式発表をしたのがライト博士であっただけのことだ。先生の言うとおり、今既にどこかで作られている可能性は十分にある。

ではなぜ公式発表しないのか？

決まっている。自分と、生まれてきたクローン体の幸福のためだ。

わたしは科学者ではないから、その心理は分からない。しかし発表後の世間の非難や取材の殺到、それに伴うクローン体へのストレスを考えれば、発表しない方が賢明だろう。わたしは頼杖をついて、ぼんやりと先ほどの写真を思い出した。まだ自分の出生の秘密も知らず、無垢に眠る赤ん坊。晴れやかに微笑むライト博士。赤ん坊は彼女のクローン。全く同じ顔の、全く同じ性質の、違う人間。もしそのような人間が、わたしの目の前に現れたらどうするだろうか。惑う？そうかもしれない。けれどきつと、その後わたしは平然と日常を続けるだろう。自分と同じ形質であれ、自分の神経が通っていない以上、その人間は赤の他人なのだから。

怖いのは、自分と同じ神経が通っているのに自分ではないもう一人の自分。

一つになっていたわたしが再び分裂し始め、後頭部に冷たい視線

を感じる。わたしは考えるのをやめて、できるだけ先生の話に集中するようにした。

放課後エレベーターを待っていると、また宝がやって来た。わたし達二人が並ぶと、それだけで他の誰も寄り付かなくなる。遠巻きな視線ばかりが背中に集中した。

「さっきの解答、見事だったわ。さすがね」

わたしが階数ランプを眺めながら言うと、彼は苦笑した。

「君だっでどうせ分かってたんだろ。どうして言わないんだい」

「さあ、分かってなかったんじゃないかしら」

わたしは彼に目を向けて微笑する。

「言わなかったら分かってなかったも同じよ」

「その台詞、他のクラスメートに聞かせてやりたいね」

そうねと相槌を打つとエレベーターが開いた。またわたしが先に乗り込み、宝がドア側に立つ。彼が一階のボタンを押したので三階のボタンを押すよう頼むと、彼は言うとおりにせず微笑んだ。

「今日うちに来ないか」

ドアが閉まってエレベーターが下降を始める。ドア付近には誰もいなかったと思うが、今の台詞を聞かれていたらと思うと眉をひそめずにはいられなかった。

「……どうして？」

「昨日、今度見に来るといって言ったらそうするって」

「……ああ」

半ば忘れかけていた自分の発言を持ち出され、やや当惑する。そういえば昨日そんなことを言った気もする。彼の家が一軒家で、大層古いとかなんとか。

それにしたって随分急な話だ。こういうときに限ってエレベーターは止まらず、もう八階を過ぎていた。

「あなたの都合は……大丈夫なの？親とかは」

「大丈夫だから誘ってるんだよ。まあ別に無理にとは言わないけど」

彼の笑顔は、わたしが拒絶しても崩れないように思えた。気が向いたから誘ってみたんだけど忙しいなら来なくてもいいよ、そう言いたいのだろう。しかしわたしは全く忙しくなかった。あと一週間で定期テストがあるが、勉強は毎日の復習で事足りているし、どこかへ出かける予定もやりたいこともない。はつきり言うと、わたしは暇なのだ。ひどく退屈している。

それならば、学校帰りに歴史的建造物の見学という観点からクラスメートの家に行くのは悪いことではないように思えた。

「……そうね」

しかし。

もし誰かにわたしが彼の家に入るところを見られたら、どんな噂が立つか分かったものではない。

事実、昨日わたしと彼と一緒にエレベーターに乗っていたという噂は既に学校中に広まっていた。乗っているところを二人の女子や気の強そうな男子に見られただけでなく、十階で待っているところも見られていたらしい。今朝駐輪場から校舎へ向かう途中、三年生の女子がそのことを話しているのを聞いた。やっぱり付き合ってるんじゃない、とかなんとか。

冗談じゃない。

わたしはエレベーターの階数表示を見た。既に五階を過ぎている。彼は黙ってにこにこ笑っていた。三階のボタンは押していない。

エレベーターは滞りなく四階を過ぎ、そして、三階も止まらずに通り返した。

わたしは短く息を吐いた。これから三階に戻ろうとしたら、いったん降りて上りエレベーターに乗り換えなきゃならない。上層に住んでいる生徒は下層に住んでいる生徒よりも多い、上りエレベーターは下りに比べて待つ時間が長い。これから一階で待つのは億劫だ。

「……行くわ。どうせ暇だし」

彼は何かとても安心したように笑った。そしてなぜだか「ありがとう」と言った。

わたしはそのとき、その真意をまだ知らなかったのだ。

5：宝家

屋根は紺色、壁は白。灰白色のブロック塀にぐるりと囲まれた庭とその建物。塀の外、向かって右側に車一台分のスペースがある。わたしの胸くらいまでの高さの門、そこから玄関まで丸い飛び石、ドアの左側にすぐ大きな窓があり、突っかけが無造作に転がっている。その手前に薄型の自転車が一台止めてあった。鈍く光る藍色のボディ。僕のだ、と宝は言った。その真上、二階にも窓がある。古いと聞いていたが、思ったよりずっと綺麗だった。

飛び石から落ちて地面を踏むと、靴の裏が変にでこぼこしていた。よく見るとそこは土できていて、緑の雑草まで生えていた。

「草なんか生えていても何も良いことがないよ。昔は季節感を出すことができたんだろうけど、今は季節なんか無い」

一年中一定した気温と湿度で、常に低い不快指数の中で生きるわたし達には、もっともな言葉だった。

宝が親指の指紋をかざして玄関の鍵を開けるのを見て、わたしは少し興ざめした。セキュリティは現代の家のそれと変わらないらしい。わたしの様子に気付いて、彼は苦笑する。

「中途半端だろう。でもこのくらいはしておかないと落ち着かなくてね。入るかい」

わざわざここまで来て中を見ずに帰ることも無かるう。わたしは頷き、宝に続いて家に入った。

玄関は広くも狭くもないといったところで、靴の数は少なかった。男物のスニーカーが二足と、女物のサンダルが一足。左手には木目調の小さな下駄箱があり、他愛のないガラスの置物などがちまちまと置いてあった。

「ご家族は？」

「両親は仕事。兄弟は無し。祖父母も無し。いつも帰ってきたら一人だよ」

我が家には平生テレビばかり観てぼうつとしてゐる母親がいて、共働きというのは随分立派なことのように思えた。

目の前に階段があり、その左に廊下が延びていた。階段は半螺旋状になっているようで、一番上は見えない。そびえるビルの群れの真ん中にぽつんと建っているせい、高い位置に付いた窓からは光はほとんど差し込んでいなかった。その薄暗い階段を、電気も点けずに宝が上る。わたしも壁と手すりに手をつきながら、恐る恐るついていった。表面はフローリングで、わたしは靴下のままだし、滑って落ちるのではないかとさえ思ってしまう。わたしは階段に慣れていなかった。普段使うのはエレベーターかエスカレーターばかりだ。ごくたまに階段を使うときもあるが、こんなに一段一段が高いものは初めて上る。

その上わたしは、暗がりを歩くということにも慣れていなかった。普段その必要がないからだ。だってそうだろう。建物の中は常時電気がついていて、外だって、夜になれば眩しいくらいの街灯がつく。仮にそれがなくても、わたしは夜出歩くような趣味を持っていなかった。停電を体験したこともない、前述したとおり、国も世界も電気には特別気を配っているのだから。例えば世界中で一斉に停電が起こったとしても、南極にある国際蓄電所がそれまでためてきた電力を供給してくれる。

わたし達はそうやって、一生電力の恩恵をこうむって生きていくのだろう。電気のない世界なんて考えられない。光を浴びて生きるのが当たり前なのだ。

だから、今こうして暗がりを歩いていると、足下がざわざわした。一步一步確実に床の感触を確かめないと、宙に浮いているような錯覚を覚える。掌をいっばいに開いて左右の壁に触れないと、自分の位置が分からない。もはやここは建物の中ではないのだ。闇だ。無限に広がる暗闇。今足がついていても、次の一步を踏めるか分からない。沼のような闇から手が伸びてきて、わたしの足首をつかんでしまつかもしれない。生々しい掌の感触を、自分の足に感じた気が

してぞつとした。

「どうしたの？」

不意に上から声が降ってきて意識が戻ってくる。見上げると、宝が二階から不思議そうにこっちを見下ろしていた。そうだ、ここは家の中だったのだ。そしてわたしは階段にいる。階段の、左にカーブするところで、立ち止まっていた。

わたしはばつが悪くなり、やけ気味に残りの段を上った。その間中宝がずっと見ていたから、もう闇の中だという妄想は起こらなかった。上ろうと思えば案外簡単に上れるものである。

「何でもないわ。ねえ、どうして電気を点けないの？」

至極真つ当なことを訊いたつもりだったけれど、宝は予想外にきょとんとした。しかしすぐにああ、と呟いて、今さら階段の電気を点ける。フローリングが眩しいほどに光り、わたしは思わず目を細めた。

「電気代が無駄だから。それに、いざというとき慣れておいた方が有利だろ？」

「いざというとき？」

やつと隣に並んだわたしに向かって、彼はにやつと笑う。

「発電所が壊れたときとかさ」

わたしが上り終えたので、彼は早々に電気を消してしまった。視界がまた薄暗くなり、泡のような濁りが生じる。

「有り得ないわ」

吐き捨てるようにわたしが言うと、彼は笑っただけだった。

二階の廊下は狭く短く、三つの部屋の入り口が一度に見渡せた。し字形の壁の一面には二枚のドア、もう一面には一枚のドア。全て閉まっていたが、彼は二枚のドアの方へ向かい、そのうちの一枚に玄関のと同じように指紋をかざして鍵を開けた。わたしは首を傾げる。

「随分用心深いのね。見られたくないものもあるの？」

「そりゃあ年頃の男子だしね。一つや二つあるさ」

彼は冗談めかして言ったが、わたしには彼がそういったものを隠している様子を、どうにも想像できなかった。

さすがに彼らしく整頓された部屋だ。入り口から見て右奥、四角い窓の傍にシンプルなスチールの勉強机があり、教材ディスクが整然と並んでいる。左の壁際に黒いパイプベッドが置いてあって、起床後手が加えられていないと見える布団がめくれ上がっていた。床はフローリングでカーペットも何もない。白い壁にはカレンダーと世界地図、日本地図が貼ってあった。いかにも秀才、という感じだ。

しかし、わたしは後ろ手にドアを閉めながら、自分のすぐ左に妙なものが置いてあることに気付いた。

「……宝、これ……？」

「ん？ああ」

宝は机の脇に鞆を置いてから、それに近づいた。冷たいフローリングにべたりと座り、その黒い箱に手を載せる。

「パソコンだよ。こんなに大きいのは初めて見たかい？」

わたしは答えず、彼の隣に両膝をつき、身を乗り出してそれを凝視した。

それは確かにパソコンだった。歴史の資料で見たことがある。今はノート型が普及してほとんど使われなくなった、デスクトップという形のものだ。小さな折り畳みテーブルの上に、薄型のディスプレイと直方体の本体、それにキーボードとマウスが載っている。わたしが持っているノートの一・五倍はある液晶画面。黒いキーボードは一つ一つのキーが無駄に大きい。さらにその横のマウス、こんなものが現存するとは驚きだ。ノートの普及に伴って消えたものと思っていたが。そしてそれら全てを統括するのは、ディスプレイの横にでんと立てられた直方体の黒い箱。スイッチ、CDドライブ、全てがこれについている、本体。

どれもこれも、写真でしか見たことのないものだった。生きているうちに目にするなんて——しかもこんなところで——思いもしな

かった。

「……古い」

わたしは思わず深いため息をつく。

「古いわ。あなたの周り、部分的に時間が止まっているみたい。この家も、その眼鏡も、このパソコンも」

そう言わずにはいらなかったのだ。こんな所にずっと住んで、眼鏡なんてずっと着けていたら、時代の感覚がなくなってしまいそう。自分ばかりが時を止めていて、街はどんどん進化していく。取り残される、そうは思わないのだろうか。彼はわたしの言葉に、眼鏡の蔓に触れながら苦笑した。

「家は親のものだから僕にどうこうできるものじゃない。眼鏡は、まあ、僕の趣味みたいなものだけど。……それに、パソコンは……こっちの方がいいんだ。改造しやすくて」

「改造……？」

わたしは眉をひそめて、このとても古い型のパソコンを見る。これのどこにどう手を加えて改造すればいいのか、わたしには見当もつかなかった。いや、そもそもわたしには今使っているパソコンを改造する必要性が見当たらない。学校で使う分には十分だ。

しかし彼は微笑んで、人差し指で本体のスイッチを入れた。

「うん。改造。僕くらいパソコンを使い込んでいると、普通のノートなんかじゃとても役不足になってくるんだ。例えば——」

画面が真っ青に染まり、そこに小さなアイコンがずらつと並び始める。宝はマウスを使ってそのうちの一つをダブルクリックした。「アメリカの政治データをハッキングして、大量に引き落とすときなんかだね」

わたしはそのとき、こんな宝の笑顔を初めて見た。眼鏡の奥の目を三日月のように細め、口の端を最大限まで引き伸ばし、最大限まで引き上げた、——狡猾な笑顔。

不意に画面から青が消える。振り返るとそこには一つの文書ファイルが開かれていた。タイトルは。

「…… American…… Defense…… Budget……
？」

——アメリカ防衛予算。

わたしはキーボードを叩き、画面を下にスクロールさせた。英文がずらずらと、時折見出しと思しき太字や表やグラフを交えながら、果てしなく続いている。ざっと見た感じでは専門用語が多いようだが、問題ない、わたしなら読める。

しばらくスクロールすると、太字で書かれたつい昨日の日付が現れた。わたしはそこで手を止め、文の最初から要点だけをつまんで読んでいく。そこには、一般市民には公開されていないような最新の情報が事細かに記されていた。新兵器の導入、それに掛ける予算、自衛軍の施設費、見込まれる兵の数——。こんなの、日本のニュースにはもちろん、アメリカの公式ニュースサイトにだって出ていない。

「ちょっと……これどういう……」

言いながら振り返ると、突然、宝がぐいとわたしの右腕を引っ張った。バランスが崩れ、とっさに左手を床につこうとするが、その前に彼の身体に抱きとめられる。気がつくとその顔がわたしの顔の真横にあった。

顔面から血の気が引く。何かとてもよくないことの前触れのように思えた。

「……森崎さん」

それはとても、とても優しい、甘い声だった。耳元で彼が囁いて、わたしは身をこわばらせる。こわばらせた、しかし、動けないのだ。右腕がつかまれているからだけではいい。彼の声が麻酔となって、わたしの身体を麻痺させていた。

彼はふつと笑って、唇をさらに耳に寄せる。そして心臓をとろかすような甘美な響きで、こう言った。

「世界征服に興味はあるかい？」

6：部屋

「ただいま……」

一段と投げやりに言うと、当然返事は返ってこなかった。リビングからいつもよりも大きなテレビの音が聞こえる。足を引きずりながらまっすぐ進むと、わたしの姿を見つけた母がソファアの上でぎゃんぎゃん喚いた。

「あ！ちよつとあんた知ってる？大変なのよ今アメリカが」
「知ってる」

わたしは短く遮ってそのまま自室へ向かう。母は物足りない様子で、ほとんど独り言のように騒ぎ続けた。

「いったいどういうことなのかしら、あのアメリカの刑務所が全部開いた上に電力が停止してしまうなんて！」

わたしは答えず、自室のドアを閉めた。それでも壁一枚隔てて母の喚き声とニュースの混乱が飛び込んでくる。わたしは重たい鞆をその場に下ろし、制服のままベッドの上に倒れ込んだ。

どうということも何もない。

目を閉じて、ついさっきまでのことを思い返す。まぶたの裏に鮮明に描かれる、あの光景。

——百パーセントあいつのせいで、半分はわたしのせいでもあるのだ——。

「夢を見るのは中二まですて」

麻酔の切れたわたしは、彼の両肩を力一杯押しつけた。後ろに引きながら立ち上がり、座ったままの彼を見下ろす。彼は変わらぬ表情でわたしを見上げていた。

「世界征服？幼稚園児みたいね。いえ、世界立の幼稚園児ならそんなことも言わないでしょうよ。ましてや優等生のあなたが……何を考えているの？」

勉強のしすぎで頭のねじが二、三本はずれてしまったのだろうか。いや、彼がそんなに勉強をしているようには見えない。彼はわたしと同じタイプ、最低限の勉強さえしていれば何一つ問題ないに違いないのだ。そう、わたしと同じく。

だからこそ、理解できない。

早口に罵られても彼は眉一つ動かさなかった。ただ意味ありげな微笑を浮かべ、わたしと向かい合う形で立ち上がる。

「征服——うん、こう言うと言弊があるかな。正しくは『世界の破壊』だ」

「破壊……？」

「うんざりしないかこの世の中！」

彼は突然声を張り上げて両手を広げた。びっくりと身をすくめるもわたしはその場から動かず彼の顔を見上げる。彼は笑っていた。頬の筋肉をゆがめて、口の端を邪悪に引きつらせて。眼鏡の向こうの茶色の瞳はわたしの姿を映してはおらず、それどころかこの部屋のどこをも映してはいなかった。凪いだ海を突然襲った嵐のように、彼の顔はすっかり入れ替わっていた。

それは世界立中学の優等生の顔ではなかった。

「莫大な時間を犠牲にしながら必死に勉強して、いい大学いい仕事、だけど結局辿り着くのは虚無ばかり。その途中で気付くんだ、人間には限界がある、世の中には天才と凡才がいる、自分はそのどちらなのか。凡才と気づき絶望し、自分の上に行く連中をねたみながらも、大抵の奴らは自殺するわけにもいかなからとりあえず惰性で生きている！型にはまった毎日の中で、自分の存在意義を自問するたび憂鬱になる。そして何となくまた夜が明ける……そんな奴らばっかりだ！あまりにくだらない、そう思わないか？」

わたしは黙って聞いていた。最後の問いかけにも答えず、ようやくわたしに向けられた目をじっと見返した。

「皆気付いている。自分の住む社会が、人間という存在が、人間の作り出した文明が、歴史が、この世の中的一切合切が、まるつきり

無駄だということに！できれば全てを壊してしまいたい、そうさえ思っている！だけど連中には力がない。世界を破壊するなんて絵空事だ、今までどんなテロリストでも成功しなかった。……でも僕にはできる。僕はその方法を見つけたんだ。僕は他の奴らとは違う、他の奴らにはできなくても僕ならできる。——だから僕が！」

最後にひときわ大きく、気の狂ったような声が響く。それは甲高く壁にぶつかって、一瞬で砕け散ったかと思うと部屋に静寂を運んだ。

刹那、彼は呼吸を止める。ジ——と、古いパソコンの音がわたしたちの間を細く走っていった。やがて広げられた両手がゆっくりと下るされ、穏やかな色の目がわたしを映して微笑む。

「……僕が全てを壊してしまおうと、そう思ったただけだよ」
嵐は通り過ぎたらしい。彼の顔は完全に、元の凧いだ海に戻っていた。

一方のわたしは、分裂しかかっていた。

動かない。宝優陽の変貌に少なからず面食らっているはずなのに、「彼女」は動かないのだ。とても重々しく、冷静に、「わたし」と同じ目で彼を見つめている。しかも、先にしかかかっていると云ったとおり、今回は完全に分裂していない。二つの脳がつながって真ん中がくびれ、意識を半分共有しているような感覚だ。共有、いや、混じり合っている。混じり合っている？それも違う。——流れ込んでくる。いつも背後でわたしを冷たく見据えている「彼女」が。

——「彼女」が「わたし」を侵食している？

いいや、それも違う。しかしいつもと勝手が違うのは確かだ、恐らく——

「わたし」の半分が「彼女」に同調しているのだ。
表側で感情を司るはずの「わたし」が、彼女と同じ無表情になっている。宝優陽の突拍子もない発言に、動揺していない。

それは多分、彼の言葉がすんなりと「わたし」に馴染むものだったから。

「……方法は」

そして現れたのは、冷静な「わたし」と「彼女」だった。驚愕は徐々に薄れ、突き放すような冷静さのみが残る。

「どうやるっていうの？」

それでもそんなことを訊いたのは何を意図してたのだろう。

馬鹿らしい、冷静にそう一蹴して、早々にこの部屋を去ればよかったのに。他の奴らにできないけど僕にはできる？ 思い上がるのもほどほどにしないと後々恥ずかしくなること請け合いだ。そんな方法があるなら、とつくの昔に誰かがやっている。――表面、わたしは彼を馬鹿にしていた。彼の発言を信じていなかった。わたしはこの上なく冷静で、賢かったのだ。

しかしそのふたの下にくすぶる好奇心に、自分で気付いていた。

宝もきつとそれに気付いていて、つけ込んだのだろう。彼は全てが計画通りと言わんばかりに目を細め、楽しそうに笑った。

「聞きたい？……戻れなくなるよ」

わたしは目をそらし、ため息をついてみせた。できる限り不愉快そうに。

「自分から振っておいてそれはないでしょう。説明して」

彼は素直に頷いて、またわたしの腕を引きながら座った。先ほどと違う優しげな力に、わたしも逆らわずに座る。相変わらずアメリカ防衛予算を映したままのディスプレイが、体に悪そうな光を浴びせてきた。

「一言で言うと、電気をなくすんだ」

さらりとほざかれた言葉に、わたしは腹の底から大きなため息をついた。

「……何そのため息」

「あまりにも遠大だからよ。あなた世界にいくつ発電所があると思ってるの？」

うんざりした目を向けても、彼はなだめるように両手を上げて微

苦笑するだけだ。線の細い、女性的な雰囲気の少年。やっぱりさっきの言葉は嘘だったんじゃないかと思えてくる。

「まあとりあえず聞いてくれよ。疑いながらも構わない、後で全部証明してみせるから。……仮に電気がこの世から無くなったとして、世界はどうなるかな？」

まるで先生みたいな口調だ。少しだけ不快に思いながらも、わたしはすぐに答えた。

「混乱するわ。当然でしょう？まず空を管理しているのが電気なんだから、朝が来なくなる。集雲倉庫も働かなくなるから、雨も降るわね。建物の中もまっくら。皆停電したときのことなんて一度も考えたことがないから、携帯ライトだってすぐに出せないでしょう。冷蔵庫も動かないから食べ物も腐る。もちろん水なんか出ない。保存食があっても見つけれなければ意味がない。電気で開閉していたドアは開かなくなるから、閉じこめられる人も出るわね。そうなると、窓ガラスを破ってまで出ようとする人も現れるんじゃないかしら。そのうちの多くは落ちて死ぬでしょうね。それから、今までさんざん明るいところで生活していた人は、暗いだけでもきつと発狂しそうよ」

自分の周りの人間達、そして自分自身が暗闇に落ちたことを想像して得た答えだ。この家の階段でふらついたわたしが、果たして明かりのない世界で生きられるのだろうか。多分わたしはその場にならずにまっただけで死ぬ。例えばそれが自分の部屋なら、そのまま餓死を選ぶだろう。

さすがだね、と宝は嬉しそうに頷いた。わたしは褒められてもちっともいい気がしなかった。

「……でも皆が皆そんなに愚かだとは限らないわ。そのうち冷静な人がちらほら現れて、暗闇の中でライトを探してきて、復興に励むかもしれない。時間はかかるだろうけど、電気だって直るかもよ。」

……世界を壊すと言うには、少し不完全じゃない？」

宝はにやりと笑った。想定範囲内とばかりに。

「ああ、期待以上だ、思考が速い。僕もそこは弱いと思っている。
……そこで、だ」

彼はまたマウスを動かして、アメリカ防衛予算を画面から消した。代わりに映し出されたのは、広い建物の見取り図。廊下の左右に、小部屋が沢山ついている形だ。各部屋ごとに番号が振ってある。見たところ一部屋一部屋が非常に狭い。そのファイルのタイトルは。
「電気を消す直前に、刑務所を開放する」

The Prison in California——カリフォルニア刑務所。

「刑の重さは問わない、とにかく全て開くんだ。で、まずは刑務所の電気のみ落とす。鍵が開いたまま電気が切れたら、出入りし放題だ。そうすると受刑者の中には逃げ出す奴も出るだろう。刑務所なんか元々暗いんだから、彼らはそこまで暗闇を怖がらない。逃げる方に必死さ。そして受刑者達が脱走したというニュースが世界中に流れ、その矢先国全体が停電。大混乱だ。さらに鬱憤のたまった受刑者達が大暴れしてくれるといい」

「……そんなこと、」

論理は分かる。犯罪者達が街へ飛び出してくるだけでも市民は震え上がるだろう。近頃は過失よりも故意の犯罪、特に無差別の殺人・傷害が増えているのだから。停電の混乱を助長するには十分だ。――がしかし。

「できるわけないでしょう。例えさっきの防衛予算がハッキングで落としたものとしても、アメリカの刑務所を開放することなんて、――

言い終えないうちに彼が素早くキーボードを叩き始め、口をつぐむことを余儀なくされた。画面に次々と新しいウィンドウが現れ、宝が何か入力するたびに消えていく。そんな風に見えたけれど、実際は次々にページが替わっていただけかもしれない。彼はそれを隠そうともしなかった。わたしには何をしているのか分からないと言っ、確固たる自信があるのだろう。実際、分からなかった。わたし

が口を利く間もなく、最後に強くエンターキーを叩いて彼の手が止まる。

「……これでOK。君のノートを起動して、ニュースでも見てみなよ。多分そのくらいが丁度いい頃だ」

「……何が丁度いいのよ？」

「いいから」

わたしは訝りながらも、言われるままにノートの電源を入れた。OSのマークが画面中央で踊り、起動を開始する。ニュースが観られる状態になるまで、およそ二十秒。大人しく待っているのは癪だ。

「……何をしたの」

「さあ？」

彼はいたずらっぽく肩をすくめた。その様はまるで無邪気な少年だ。わたしはノートにパスワードを打ち込みながらため息をついた。一日にこんなにため息をついたのは初めてだ。

「あなたがこんな人だなんて、わたし、思わなかったわ」

「当然だ。思われていたら困る」

やはり学校で見せる態度は全て作り物であつたのだろう。普段彼が他人とどのような会話をしていたかはよく知らないが、にこにこ笑いながら当たり障りのないことばかり言う様が、容易に想像できた。わたしと同じだ。

「……出たわよ」

起動完了後、画面いっぱいをニュース番組にしてボリウムを上げる。画面の中央で、清楚な格好をした女性アナウンサーが淡々と原稿を読み上げていた。内容は、大阪で幼稚園児が誘拐されて殺されたとか、そんなの。

「これがどうかしたの？」

わたしが振り返ると、彼はやや唇をとがらせて首を傾げた。

「まだ日本には来てないのかな。アメリカのニュースにしてみても聞き取れるだろ？」

「当然ね」

言われたとおりにチャンネルを回す。米国のニュースはよく観るので、何番かは覚えていた。日本人アナウンサーの代わりに、金髪の女性アナウンサーが画面中央に現れる。見慣れた顔だ。育ちの良さそうな、上品で落ち着いた人。だからこのとき、わたしは一目でその異様さに気付いた。

彼女は切羽詰まった顔で、ぐちゃぐちゃに握り締めた原稿を凝視していた。とてもテレビに映すべき顔ではないのだが、リアルタイムなのでカメラを回すより他ないのだろう。それに、原稿を握り締めているということはこれからニュースを読み上げることだ。

わたしが眉をひそめると、宝は嬉しそうに目を細める。わたし達の感情は反比例しているようだ。わたしは黙って、アナウンサーのしゃべり出した英語に耳を傾けた。早口な上に舌がもつれて、ネイティブでないわたしには聞き取りにくいことこの上なかったが、大方次のようなことを言っていた。

『速報です、速報です！カリフォルニアの重犯罪刑務所が停電した上全てのドアのロックが解除され、服役囚約五千人が脱走しようと暴動を起こしています……！停電等の原因は一切分かっておりません、刑務所長は何も気付かなかったと……ああ続いて速報です、今度はフロリダ州の刑務所が同じ状態に……』

「……」

わたしはぎこちない動きで、横から画面を覗き込んでいる宝の顔を見た。彼はにつこり笑って、ぽんとわたしの肩に手を置く。

「どう？」

「……」

わたしはまた画面に目を戻す。下部に表示されたテロップで、各州の刑務所が次々に被害に遭っていることが分かった。州の名前しか出てこないのは、全て書ききれないからだろう。きっと開いた刑務所の数が多すぎるのだ。

「……あなたが、」

声がうまく出ずにかすれる。唾を飲み込んで喉の渴きを潤そうとしたけれど、効果がなかった。

「……全部？」

彼は顎に指を当て、少し考えてから平然と頷いた。

「うん。まあそうなるかな。前に連鎖的に開放するように設定しておいたんだ、ちよつといじらせてもらつてね」

「ちよつと」！ その「ちよつと」が、一般人にとってどれほど途方のない作業であつたかは想像に難くない。きっと彼はそれを、この狭い部屋で、コーヒー片手にやってのけたのだ。さっきみたいに目で追えないほどの速さでキーボードを叩いて、次々に映り替わるディスプレイを平然と眺めて――考えただけで眩暈がした。

「あなたの能力は……、分かつたわ」

ノートを脇にどけ、彼に向き直る。背後から錯乱気味のアナウンサーの声が絶えず聞こえていた。

「……でもやつぱり、これで世界が壊れるとは思えない。絶対どこかに混乱を免れた人がいて、その人は世界を再建するわ……。電気が無くなつたら、どこに誰がいるかなんてとても分からないでしょう。それをあなた一人で……」

わたしはできるだけ客観的に見てものを言つたつもりだった。わたしの言つたことは正論だつただろう。しかし宝は、わたしの意に反してきょとんとしていた。わたしが階段の電気を指摘したときのように。

わたしが眉をひそめると、彼はあー、とようやく理解したかのように頷いて、それからちよつとあきれたように笑つた。

「君何か勘違いしてないか。僕の目的は『世界の破壊』であつて、『人類滅亡』じゃないんだよ」

「……え？」

一度大きく息を吐いて、改まつた調子で語り出す。

「いいかい？僕は世界が一度壊れさえすれば、それで満足なんだ。

生き残りがいようが、そいつらが世界を再建しようが、知ったことじゃない。破壊があれば再生がある。それは表裏一体で、自然の摂理だろう。……それに君、僕一人でって言ったけど、僕は一人じゃない」

「どういうこと？」

聞き返すと、彼はにやつと笑った。

「協力者がいるんだ。世界各国にね。僕と同じコンピューターのスペシャリスト達だ。僕がアメリカの電力を破壊するのを合図に、指定した国の電力を破壊する手はずになっている。僕はアメリカと日本以外手を下さないんだ。……そう、それで森崎さん、本題はここからだ」

ずい、と不意打ちで顔を近づけられ、わたしは思わず床に手をついて身を引いた。彼はやっぱりそれを気にした様子もなく、わたしが戸惑っていることに気遣いもせず、眼鏡のレンズをを光らせこう言った。

「僕のパートナーになって欲しい」

7：相棒

「……え？」

パートナー、と聞いて、結婚相手のことかなどと場違いなことを考えたわたしはどうかしていたのだろう。

違う、分かっている。さっきからあまりにも非現実的なことばかりが続くから、わたしはわざと馬鹿なことを考えて一時的にでも現実に戻りたいだけなのだ。

パートナー？

「どういうこと……」

「言葉のままだよ。僕と行動をともにする相棒になって欲しいと言っているんだ」

「行動を……？」

「そう」

彼はすつと腕を伸ばし、床に置かれたわたしのノートの画面を指さした。アナウンサーが六枚はあると見える原稿を手には汗を垂らしながら必死に口を動かしている。

「分かるだろう。僕はアメリカのあらゆる刑務所を開放した。この後どうするんだっけ？……さっきも言ったとおり、アメリカの電力を壊すんだよ。それを合図に、続く国がどんどん暗闇に落ちる。……そう」

彼の瞳がわたしをとらえる。腕をつかまれたわけでも、肩をつかまれたわけでもないのに、わたしはいつより動けなくなった。彼の瞳は、透き通ってなどいかなかった。一種の禍々しさをもってわたしの動きを封じていたのである。

その目は、全てを吸い込む穴だ。

「もう始まってるんだ」

唇の動きの一つ一つが、いやにはつきりとわたしの目に映る。

——もう、始まってるんだ。

わたしは見たのだ、その始まる瞬間を。目の前で破壊を始めるその手を。――止めなかった。知らなかったわけじゃない。彼の作戦は聞いていたのに。

「いじめは見ていた人も加担者です」

いつの時代の教師達も、皆一様にこんなことを言う。なんて陳腐な言葉、なんて理不尽な言葉、誰だって我が身が可愛いのは当たり前なのに、正義を振りかざして勝手なことを言わないで。

それなのになぜ今こんなに、わたしの心は縛られる？

「……一つだけ教えて……」

こぼれた声が苦痛を帯びる。嫌悪感を感じると同時に、一部の「わたし」が安堵していた。その安堵が何なのかは分からない。まだ自分に人間らしさが残っていたことへの安堵か。

わたしは感情を押し殺して、取り繕った無表情を宝に向けた。

「どうしてわたしを選んだの？」

それを聞くと、宝は少し皮肉っぽく笑った。

「それは僕が君のことを好きだからとか、そういった甘ったるい類の答えを期待しているのかな？」

「……違うわ。馬鹿にしないで」

実のところどうだったかは分からないけれど。そこは言わずに眉間にしわを寄せると、彼は肩をすくめた。

「冗談だよ。真面目に答えるでしょう。……まず第一にその頭脳」

彼は突然右の人差し指を立て、わたしの頭をまっすぐ指した。

「幼稚園から十二年間、難なく特待を保ってきたなんて、並大抵の脳じゃない。それに普段の君の余裕から察するに、あまりがつついて勉強していないね。天才型だ。僕と行動をとる以上、僕の言うことを迅速に理解し、僕に言われなくても応用の利いた判断と行動ができないといけない。賢ければ賢いほどいいんだ。……次に運動能力」

わたしは彼の言葉を黙って受け入れた。

「定期テストには体育の実技テストもあるね。それにおいても、君

は常にトップの成績を収めてきた。足の遅いパートナーは邪魔なだけだから……」

「要するに」

遮っていても、彼は嫌な顔一つしない。

「……自分と同じレベルでないと駄目ってこと？」

それなら確かに、身近にいたわたしを選ぶのも分かる。宝は頷いたが、その直後に首を振った。

「でもそれだけじゃない。僕はそんな数値的な部分ではなくて、もっと、性格面で君を気に入ったんだ」

「……性格面で？」

「そう。無関心ささ」

思いがけないところを挙げられて、わたしは思わず目を丸めた。彼はそれがおかしかったのか、くつくつと笑いながら続ける。

「君のその、他人に無関心なところ。誰が何をしてどうなっても、自分には全く影響がないという態度。僕はそこがとても気に入った。だって世界を壊すのに他人の心配をしているようじゃ駄目だろう」

彼はいつたい、どこでわたしのその性格に気付いたのだろうか。そういえば初めてエレベーターで乗り合わせたときもこう言った。

君は他人に関心がなさ過ぎるね。——と。

わたしの知らないところで、彼は実によくわたしを観察していたのだ。

「……と、以上の点を全て兼ねそろえていたのが、君だったというわけさ。納得したかい？」

わたしはうつむき、無言で頷いた。宝はふつと笑ってわたしの顔を覗き込む。

「これだけの人材は滅多にいない。身近にいたのは幸運だ。だから」

「少し」

強い調子で、なるべく鋭く、彼の言葉を遮った。彼はぴくりと動きを止めたが、わたしの顔を覗き込んだままだ。わたしは今自分が

どんな表情をしているのか分からない。だけど、とにかく彼には見られたくなくて顔を逸らした。

「……少し、考えさせて……」

もつと、もつと冷静に考えないと。

それが、今冷静になつて考えられる精一杯だった。

宝は今度は少なからず驚いたようで、顔を離すと束の間沈黙した。しかしやがてふつと息を吐くと、眼鏡の奥の目を細めて、あの狡猾な笑みを浮かべる。

「いいよ。……ただし、明日の朝までだ」

「明日？」

わたしは思わずがばりと顔を上げた。明日の朝？これから家に帰つて、夕食を食べて、風呂に入つて寝て、明日の朝？いくら何でも早すぎる。目で訴えると、彼は肩をすくめて首を振った。

「仕方ないだろう。もう始まっている。始まっているんだよ。それ以上待つていたら間に合わないし、それに、君が他言しないとも限らない」

「そんな……」

「明日の朝。明日の朝僕の家に来なければ」

不意に肩を強くつかまれ、体がすくむ。彼の瞳がまた、妙に真っ黒く、宇宙にばかりと空いた穴のように、わたしの姿を吸い込もうとしている。それでいてわたしは目をそらせないのだ。

彼の口元から、笑みは完全に消えていた。

「——君の命の保証はできない。『破壊』の中で死ぬか、特定の誰かに殺されるかも、ね」

わたしは動けなかった。ただ、穴を見つめながら妙な感覚に囚われていた。

目の前のこいつが、いつの間にかわたしの生死を完全に掌握してしまった。

確かにここまでついてきたのはわたしだ、作戦の説明を求めたのもわたしだ。つまりこの状況は全てわたしの行動に起因する。とな

ると彼の行動を理不尽だと責め立てることはできない。——なんという窮屈さ！今まで世間の波に乗って適当に流されてきたわたしを彼が捕まえてしまった、そして唐突に生きるか死ぬかの選択を迫ってくる。恐らくわたしの人生初の、自分で考えなければならぬ選択だ。

初めてわたしの思考が問われるとき。

流れから連れ出されたわたしは、今初めて地面に足をついた。

「……それってほとんど、脅しじゃない……」

わたしは自分の頬がゆるんでいることに気付いた。もっと不愉快そうに、荒々しく言うべき台詞を。本来腹を立てて吐くべき言葉を、あきれ笑いを含んだ声で言ってしまった。

腹の底に湧くのは、怒りではない。

宝の目が瞬きした瞬間茶色に戻る。につこりと甘い笑みを浮かべて、わたしの肩から手を離れた。

「うん。そうかもね」

まるで他人事のように。

彼は自分のパソコンに向き直って、画面に表示されていたファイルを全て消した。それから画面右下のデジタル時計に目を向けて、ディスプレイを消しながら言う。

「もう五時だ。君はそろそろ帰りなよ。お母さんも心配するだろう」

きつとそんなことはないと思いながらもわたしは頷き、ノートを畳んで鞆にしまった。宝が見送りのために先に部屋を出る。続いてわたしも出ると、廊下も階段もさっきより暗くなっていた。今度こそ本当に真っ暗だ。しかしわたしは、気丈にもこう言った。

「電気はつけなくていいわ」

それを聞くと、宝は声を出して笑った。そうして本当に電気をつけず、先にとんとんと下りていってしまう。わたしは上ったときの幅、高さなどを思い出しながら、壁に手をついて下った。目が徐々に暗闇になれてくる。うつすらと浮かぶ階段の輪郭を頼りに、足の

裏をしっかりとつけて一段一段そうつと進んだ。ようやく一番下に両足について大きく息を吐くと、宝はまた笑った。

「ああそうだ、帰ってからニュースを見るといいよ。さっきより面白くなっているはずだから」

門を挟んで彼はそんなことを言った。わたしは頷いて、まだ駐輪場に置きっぱなしの自転車に向かって走った。外は暗くなり始める時間帯。地上を歩いている人は少なく、世界立生はもちろんいない。わたしが彼の家から出るところは、多分誰にも見られていないだろう。それでもわたしは鞆を抱えてアスファルトの上を走った。どれだけ速く走れるか、なるべく全力でひたすら走った。

8：記憶

目を開けると天井に光が見えた。

疲れていた。久々に全力疾走して身体が、あまりにも唐突に壮大な野望を聞かされて精神が、同時に疲れていた。四肢から力が抜け、柔らかい布団の上にめり込んでいる。もう一度まぶたを閉じると、ふっと意識を手放しそうになった。しばらくこうしてベッドの上でうつぶせになっていたが、そもいかない。腕に無理矢理力を入れて起きあがると、ドアの前に放置していた鞆からノートを取り出した。

ニュースを観なくてはい。

リビングに出ればすぐに観られるのだが、母の甲高い早口を聞きながら落ち着きなく観るのもよくないだろう。きっと母は勝手にいろいろなことを言ってきた、そのくせ返事は求めないのだ。

それに、ニュースを観たとき、自分がどんな反応をするか分からない。

ベッドの上で画面を開き、電源を入れる。首を絞めているリボンをはずすといくらか呼吸が楽になった。そのままブレザーのボタンもはずし、Yシャツのボタンも第二まではずした。

宝の家でテレビのまま電源を切ったので、起動後すぐにテレビ画面になる。しかしそこには何も映っていないかった。白黒の砂嵐がディスプレイを絶え間なく荒らすのみだ。切ったときは確かにアメリカのニュースを映していたのに。

まさか。

一種の予感を感じつつ、わたしは日本のニュース番組にチャンネルを切り替えた。リビングで見ているのと同じものだ。ディスプレイにはいつもの女子アナの姿はなく、代わりに薄闇が埋め尽くしていた。

「……？」

それはぼんやりとかすんだ闇だった。手前に黄色っぽい光があつて、その奥に何かの輪郭が詰め込まれている。輪郭の中でも、小さな赤い光が所々揺れている。音量を上げると、耳障りなノイズだけがスピーカーから聞こえてきた。映像は少しずつ移動し、新しい輪郭や光が映し出されていく。

何なのか、分からなかった。テレビ局がおかしくなってしまったのではないかと思った。

そうではないと悟ったのは、ディスプレイの右上に小さな四角が出てきて、そこにいつも通りの女子アナの顔が現れたときだった。『日本の救助ジェットがアメリカ上空に到着しましたが、着地点もありません。それに……アメリカに続いてイギリス、中国、ロシアと次々に同じ状態になっては、救助が間に合いません！原因は相変わらず不明です、調査のしようも……あ、ただ今入りました情報です、南アメリカ大陸はブラジルも——』

それでようやく、わたしはそれがアメリカの航空映像だと気付いたのだ。

輪郭はよく見たらビルの群れであった。近くで揺れている光は、火だ。空中道路を覆うガラスの筒に満ちて、その中を隠している。恐らく車同士がぶつかったのだろう。もう六時を回っていて辺りは暗いし、信号も止まってしまつては大混乱だ。普段火が出ればスプリンクラーが作動するのだが、当然それも動かない。道路にいた人間はきつと助からないだろう。

面白く、ね。

別れ際宝が言った言葉を思い出す。確かに滅多にお目にかかれない光景だ、世界中から次々に光が失われていき、普段すました顔で原稿を読み上げるアナウンサーがこれだけ取り乱している。宵闇の中赤く燃え上がる筒はいつそ美しくもあり、美術館から盗まれた芸術品よりもずっと貴重なものに思えた。そして何より、原因不明だと叫ばれる中、原因を知りつつ黙って帰宅したこのわたし！壁の向こうで騒ぐ母だって、まさか自分の娘が当事者であるとは思つまい。

わたし自身さえ、あまり実感がないのだから。

あの有無を言わさぬ穴のような目。

上空からの映像がクロースアップされる。ビルの連なった窓が割れて、人々が次々と落ちていった。表情はよく見えないが、叫んでいるように思えた。電気が消えて部屋の中に閉じこめられ、錯乱したのだろう。赤ん坊を抱いた若い母親や、つかみあいの末に落ちたような格好の兄弟が、ゴミのようにぼろぼろと落ちていく。時々、画面に映っていないもっと上の窓からも人が落ちてきた。

「……『命の保証はできない』ね……」

呟くと、胸の底に何とも言い難いくすぐたさが湧き起こる。おかしいものだ。生まれて初めてというくらい横暴に遭いながら、わたしは何一つ不愉快に思わない。端から見ればさぞ不思議なことだろう。わたしは恐らく「何でもできて」「プライドが高く」、「人から指図されるのが大嫌い」な人間なのだろうから。

しかしわたしはそのどれにも当てはまらない。自覚していた。

わたしの中身は虚だ。

わたしの記憶は、世界立幼稚園に入園したところから始まっている。それ以前何をしていたのかはよく覚えていない。気付いたときには特待生で、親戚も隣近所の住民も、皆わたしをちやほやとてはやした。母はそのうち、わたしと成績をイコールで結びつけるようになった。成績がいいからわたしはいい子、成績がいいからわたしは自慢の子、——彼女が見ているのはわたしではなく成績だったのだ。昔から今まで、ずっと。

他人はわたしを敬遠し、誰もわたしに指図するようなことはなかったし、わたしの意見なら誰でも聞いた。教師でさえも、顔の裏にわたしに媚びへつらうような態度が隠れている。機嫌を損ねては成績が落ちるとでも思っていたのだろう。成績が落ちれば自分の腕が疑われる。結局はエゴなのだ。

他人とわたしとの間には、薄い透明な膜がある。そう悟るのも遅くはなかった。

誰もわたしの中に入ってこない。

ソレスティア先生のように比較的ずけずけものを言う人間もいたが、年齢差のせいだろうか、彼女との間には膜があった。わたしは彼女の前で作った笑顔を浮かべ、感情のこもらない声で話し、決して触れようとしない。時折分裂さえもした。何も意識することなく、ありのままに話すということがなかったのだ。

それを考えると、宝優陽は、初めてわたしが感情を持って会話をした人間だったのかもしれない。

エレベーターの中でわたしは無表情だった。宝家の古さに感嘆し、階段の暗さに身をこわばらせ、彼のパソコンを見て驚き、彼の野望にあきれ、それら全ては自然とわたしの顔に表れていたはずだ。さらには分裂していた「わたし」がやがて一体化した。全くわたしの無意識のうちに。

宝はわたしを包む「膜」を破いたのだ。それはむしろ、新鮮で心地の良いものだった。

母親でさえ入ってこなかった膜の中。クラスメート達が触れようとしなかった膜の中。ソレスティア先生をも拒んだ膜、それを突き破った、生まれて初めての人間。

——生まれて初めて。

「……初めて……？」

呟いた瞬間に、一点の染みのような違和感が胸に広がる。

脳が底からえぐられるような違和感。普段滅多に働かない脳が、強く活性化して遠い記憶を喚起しているのだ。太い、先のとがった針を突き刺されるような痛みが大脑を襲う。わたしは額を押さえてベッドの上にうずくまった。

何か、忘れている。

大切な何かを、忘れてしまっている気がする。それがいつで、どこで、何だったのかは明確に思い出せない。ただわたしの脳裏に、フラッシュバックのようにおぼろげな映像がひらめくのだ。

橙色の空。透き通るくせつ毛。わたしより少しだけ低い視線。や

けに無表情なその顔が、淡々とした口調で吐いた言葉。

おまえ俺に——……るぜ。

記憶はそこでもやとなり、消えた。

「……」

頭の真ん中にもう一つ心臓が埋め込まれているかのように、頭部の血管が激しく脈打つ。わたしはその場に背中から倒れ込み、右腕で目を覆った。——思い出せなかった。一瞬ひらめくだけの、刹那の光のような映像の記憶。そこにいた人物の顔もかすんで見えない。

輪郭すらもぼやけているのに、妙に気がかりで落ち着かない。

ノートから女子アナの切羽詰まった声が聞こえてくる。さらに別の国々の名が連ねられ、相変わらず原因不明だと説明していた。彼の計画は順調らしい。

わたしは硬く目を瞑り、遠い記憶を振り切った。——今はそんな小さなことを気にかけている場合ではないのだ。

リビングから野次馬めいた悲鳴、ニュースから騒音。問題は、わたしがその騒音の犠牲者の一人になるか否か。

明日の朝。

明日の朝が、大袈裟でなくわたしの人生の分かれ道。

9：朝

「行ってきます」

いつもと変わらぬ調子で言うと、どういう訳か、今日に限って母が玄関まで見送りに出て来た。わたしが一瞥もくれずに出ていこうとすると、ぎこちない手つきで肩をつかんでくる。こんなときでさえも動きが鈍い。

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ。折角見送りに来たのに」
「……。何？」

折角、とは随分押し付けがましいことだ。普段は出ていったことにも気付かないくせに。

わたしは早くここを出たかったので急かすように母を睨んだ。母はそれを知ってか知らずか、舌をもたつかせながらたどたどしく口を開く。

「だってほら、昨日あんなことがあった、でしょ。いつ日本もあんな風になるかと思うと心配で心配で……」

「……ああ」

「こんな日に登校させる学校も学校よね、いったい何を考えてるんだか……」

「それだけ？」

冷たく言い放つと、彼女は口をつぐんだ。二秒待っても何も言わないので、わたしは背を向けてドアの鍵を開ける。

「……行ってきます」

「ああ待つて瞳！」

わたしはいい加減いらしていた。早く出ないといけないのに、こんなときに限って積極的に反応を求めないで欲しい。再び振り返ると、母は目いっぱい涙を浮かべて身体を縮こまらせていた。瞬間、ソファーにでろりと寄りかかった普段の彼女が脳裏に描かれ、目の前の彼女と比べて吹き出しそうになる。人間とは実に変化に富

んだ生き物だ。

彼女はわたしとさして身長差もないのに、小動物のような目でわたしを見上げて言った。

「……気を付けてね」

その言葉に、わたしは我が耳を疑った。

まるで母親のようなことを言う。

わたしはとうとう笑ってしまった。久々に家の中で見せた笑顔だが、大層汚い笑顔だった。

「大丈夫よ。行つてきます」

母はその笑顔をどう受け取ったのだろうか。この醜さを美しく変換して、母を安心させるための娘の気遣いとも取っただろうか？ それもいいかもしれない。どうせこれが最後だ。

今度こそドアを開け、マンションの通路に出る。閉める直前、わたしは自分の母の顔を見た。青ざめて、涙ぐんで、随分情けないものだった。

後ろ手に閉めきると、ドアに自動ロックがかかる。その音がわたし達の別れの合図だった。

これでもう、わたしがこの家に入ることはない。

通路には誰もおらず、普段より閑散としていた。天井の電灯は弱々しく、見慣れない薄暗さだ。それでも宝の家の階段に比べれば随分明るい。この明るさに慣れてしまった人間は、この先生きてはいないだろう。

ドアに背をもたれさせ、顔をうつむける。ドアの向こうにはまだ母の気配があった。

残念でした、お母様。

くっ、と暗い笑いが口から漏れる。

あなたの大事な成績表は、もう戻っては来ませんよ――。

フェンスに近づいて空を見上げる。休日でもないのに暗かった。

「それはそうだって集雲飛行機は各国が協力して電力を出し合っ

て動いているんだから。今電力を提供しているのなんて日本だけだろう、ここは辛うじて降っていないけど、他の国は土砂降りだよ」

宝がもつともなことを言うとなわたしはそうねと言うより他なくなる。しかしわたしは黙っていた。今はこの、朝だというのにまともに見えない階段を上るのに集中しなければならぬ。昨日上ったときの感覚を思い出しながら、一段一段、確実に踏みしめて……。軽い足取りで前を上る宝が、そんなわたしの顔を見てあきれたため息をついた。

「もういい加減慣れて欲しいんだけど」

「……昨日よりはずっと速くなったわ」

「まあね……」

わたしからしてみれば、彼との間に一段しか差がないだけでも快挙なのだ。次に上るときは、きつともう少し余裕を持てるに違いない。

次に上るときが来るかどうかは知らないが。

「……ご両親はもう？」

「職場に行った。二人ともいつも僕が起きる頃にはいない」

階段を上り終えたわたしは腕時計を見た。午前八時二十八分。学校の始業時間は八時半だから、普段なら皆席に着いている頃だろう。もつとも、今日は誰一人学校にはいないだろうが。

「お母さんに嘘をついてきたわ」

開け放たれた宝の部屋に入る。昨日と変わらない光景。入り口左の古いパソコンは沈黙していた。

「学校があるって。よく確認もせずに信じ込んだじゃった」

「信用されているんだね」

宝は笑いながら冗談めかして言った。彼はわたしの初めて見る格好をしている。なんの変哲もない長袖のシャツに動きやすそうなズボン。お洒落とはいえないが彼らしい、地味な私服だ。わたしと違って学校に行くという嘘をつく必要の無かった彼は、制服よりも動きやすい服装を選んだのだろう。

「お父さんは？」

「単身赴任で北海道。さすがに面倒でしょう、ここから北海道まで毎日通うなんて」

「ああ、なるほどね」

大した関心もなさそうに頷いて、机の脇のスクールバッグを取る。いつもの鞆なのだが、明らかに要領オーバーではち切れそうだった。

「……これからどうするの？」

彼は鞆をわたしの前に下ろして自らもしゃがみ込み、ファスナーを開けて中身を探った。

「ここを出す」

「出る？」

「ああはいこれ」

中身の詰まった大きな巾着をぽんと手渡され、その重さに面食らう。口を開いて中を覗くと、携帯ライトやら保存食やらがびつちりと詰まっていた。まるで避難セットだ。彼は自分の鞆を閉めながら続ける。

「もう日本以外の全ての国から電気が失われたんだ。こんな一斉に事故が起こるなんて、どんな馬鹿でも思わない。……もう世界はこれがテロだと気付いているだろう。となると、一つだけ無事に残っている日本が怪しまれて当然なのさ」

「……そこまで絞り込まれたらいつここがばれるか分からないから、早めに逃げておこうってこと？」

「まあそんなところかな」

この巾着はそのための必要最低限というわけか。用心深いことだ。

「……あなた案外自信ないの？」

「ん？」

「ハッキングよ。よく考えたら……覗くのは簡単かもしれないけど、痕跡を残さないのって結構難しいんじゃない？」

昨日はよく考えていなかったが、その可能性は十二分にある。この用心深さが逆にわたしを不安にさせていた。今まではその、ハッキングされたコンピューター自体が動かなかったから（その国の電気が止まったため）ばれていなかっただけで、実はあっさり逆探知されてしまうようなものだったりはいしないのか？だからこんな早急に家を出ようと——と、わたしが目で訴えていると、彼は眼鏡をくいつと上げて鼻で笑った。

「まさか。僕のハッキングは完璧で鉄壁で天才的だ。今の警察に、ましてや混乱しきっている日本警察なんぞに、ここが逆探知されるとは到底思えないね」

憎たらしいほど自信満々だった。自己陶醉の域にすら達している。

クラスの連中や教師どもがこれを見たらどう反応することだろう。教室での宝はこんな自信の片鱗も見せず、ただ静かに微笑しているだけの穏やかな少年だったのに。わたしはというと、この一晩で彼の本性を驚くほどすんなりと受け入れていた。むしろ今までが胡散臭すぎたのだ。

宝はお似合いのあくどい笑みを浮かべていたが、にわかに顔を曇らせた。

「……心配しているのは警察じゃない」

「え？」

その声がいつになく神妙だったので、わたしは思わず聞き返す。彼は目を伏せてじつと手元を睨み、口を真一文字に引き結んでいた。長い睫毛が茶色の瞳に暗い影を落としている。憂いを含んだ、人形のような表情。頬は青白く、どこか苦しそうにも見えた。

「心配なのは……」

続く言葉に耳をそばだてる。彼の言葉はまるで独り言のようで、わたしが積極的に聞き取らないと耳に入ってこない気がした。

彼の唇がわずかに震える。ためらうように目が泳ぎ、また唇を閉ざし、また震えるように開く。束の間そんなことを繰り返していた

が、やがて意を決したように顔を上げ、まっすぐわたしの目を見つめた。

「そ、」

しかしその口が開かれたまさにそのとき、間の抜けた音が張りつめた空気に穴を開けた。

10：逃亡

玄関のチャイムだった。古くから伝わる、ピンポンという間延びした音。わたしの家のと変わらない。

「誰か来た」

そのせいでわたしは反射的に立ち上がりかけた。しかしそれより先に宝が立ち上がり、ぐつとわたしの肩を押してその場にとどめる。

「僕が出る。君はここにいて、物音を立てないで」

素早く囁かれたしは頷いた。宝が静かにドアを開け、靴下のまま階段を下りていく。部屋のドアはオートロックにはなっていないらしく、閉ざされても鍵はかけられなかった。ドアの外はすぐ階段だが、余程の大きさでない限り、物音は聞こえないだろう。わたしはそつとドアに耳を張り付け、全神経をそこに集中させた。階段の真正面が玄関だ、来客の声も聞こえなくはない。

「はい」

宝の声がくぐもって聞こえる。インターホンは使わず、直接玄関に出たようだ。わたしは不審に思っ眉をひそめた。あまりにも不用心じゃないか？こんな時間に訪ねてくる人間なんて、疑わしいことこの上ないのに。——とりあえずドアはまだ開けていないらしい。

間をおかず、ドアの向こうの人物は涼やかに答えた。

「私だ。ソレスティア・クリスだよ」

心臓の音が急激に速くなる。

先生？

脈のせいでドアが震えてしまうのではないかと、そんな馬鹿なことまで考えた。なるべく細く、深く呼吸をして、自分を落ち着かせようと試みる。ドアに貼り付けた掌がじりと汗ばんで、わずかな震えにも滑り落ちてしまう。——何をそんなにうるたえる必要が

ある、予想外な来客だったから、少し気が動転しているだけだ。

「……これは先生。どうしたんですか？ わざわざ。今日は学校休みでしょう」

「ん、まあ色々あってな。とりあえず開けてくれ」

二人とも見事にいつも通りの口調だった。これから世間話でもしますか。そんな調子だ。

「……分かりました。今開けます」

怪しまれないためにか、宝はすぐに答えた。ガチャンと鍵の開く音がして、ゆつくりとドアが開かれる。先生の声が、さっきよりは明瞭に聞こえてきた。

「やあすまんないきなり押し掛けて。ちょっと訊きたいことがあるんだ」

「構いませんよ。訊きたいこと？ なんですか？」

宝はあくまで穏やかだ。

「うん。実は今朝、ある生徒の母親から電話があつてな」

母親、という言葉に、落ち着きかけていた心拍数が再び上昇する。そしてあの小動物のような情けない母親の姿が瞬時に思い描かれた。別に母親って言ったって、わたしの母親以外にも母親は沢山いるわけだし、とにかくわたしが焦ることはない。自身に言い聞かせながらも、自分の呼吸がうるさいと感じる。

「へえ。誰のですか？」

「誰のだと思う？」

先生は笑いを含んだ声で聞き返した。宝の機械的な苦笑が目に見えかぶ。

「分かりませんよ。相変わらず意地が悪いですね、先生は」

「ふふ、すまんすまん。私の悪い癖だ。ちゃんと答えよう。——森崎だよ。森崎瞳」

全身の動脈が激しく脈打って膨張して身体がやけにこわばって、わたしは一瞬にして動けなくなった。

そして湧き起こるのは、混乱と恐怖と怨嗟の声。なぜ——なぜ数

ある母親の中で、よりによってこのわたしの母が先生に電話なぞかけてしまったのだろう！

「彼女、今日学校があるといって制服を着て出ていったそうだ。それで不審に思った母親が私に電話をしたというわけさ。今日学校がないことは、私がクラス全員に確かにメールした。ちゃんと送信履歴にも残っていたしな。私はあわてて学校に行ってみたが入り口は全て閉まっていた。今日は私ですら入れてくれなかったよ。……当然森崎が入れるはずもない」

わたしはそつとドアを離れた。足音を立てぬよう、四つん這いで宝の鞆とわたしの鞆が置いてあるところまで戻る。

「……へえ。それでどうして僕のところに来たんですか？全く関係がないように思われますけど」

「ところがそうもいかないんだ。昨日、お前と森崎が一緒に歩いているところを見たという生徒がいてな。珍しいことがあったもんだ。犬猿の仲と噂されるお前達が仲良く下校なんて。これは何かが起こる前兆かもな。……例えばそう、世界の破滅……」

宝に与えられた巾着の口を閉め、自分のスクールバッグに詰め込む。元々ノートが一台入っていて、明らかに巾着の入るスペースはなかったが、無理矢理に口を閉めた。ファスナーがジ、ジ、ジと音を立てるたび、わたしは訳もなく後ろを振り返って誰もいないことを確認した。心臓が口から飛び出そうだ。

宝の声はどこまでも穏やかだ。

「ご冗談を……。先生、昨日からの世界の電力喪失について言っているんですか？」

「うん、あれは驚いたな。アメリカを筆頭にどんどん壊れていくんだもの。……まるでアメリカの破壊が合図であるかのように」

宝の鞆も一緒に肩に掛けて立ち上がる。彼の鞆の方が若干重く、わたしのと合わせるとかなりの重さになった。

「明らかに人為的なものだ。日本の電気だけ残しているところを見ると、犯人は日本にいと見て間違いなさそうだが……」 いったいど

この誰なんだろうな？」

「……先生」

窓に近づく。そつと外を覗いてみると、真下に宝の自転車があり、門まで続く飛び石も見えた。二人の姿は見えない。

「話がずれていますよ。戻しましょう。……結論から言つと、森崎さんはここにはいません」

「ずれている？」

先生のくつという笑い声が、窓の向こうから聞こえた。

「ずれてなどいないさ、宝。ずれてなどいない。我々は最初から、一つの事について話しているんだ」

彼女の声は笑いながらも妙に冷ややかだ。

「靴」

その一言で、足下に嫌な予感が集中する。苦々しく自分の足を見てみると、やはり当然のように靴下のみであった。

「宝。お前の親類に世界立生や世界立卒はいない。——なぜ女子用の世界立生専用革靴がそこにあるんだ？」

わたしは玄関に平然と靴を放置してきた自分の愚かさを悔いた。

悔っていた。先生が来るとは思っていなかったけれど、先生が来る可能性はゼロではなかったのに。

宝は下手な言い訳もせずに沈黙していた。先生も彼にしゃべらす気はないらしく、続けざまに言う。

「私をなめるなよ宝。知ってるんだ。全部知っている。お前の両親がこの時間には既にないないことも、お前に兄弟がいないうことも、お前の部屋に古いパソコンがあることも、——お前が昨日それを使つて、」

わたしは素早く窓の鍵に手を掛ける。幸い古いフック型のもので、指紋照合などはいらなかった。

「アメリカを闇に追い込んだこともな」

物音を立てるな。宝はわたしにそう言った。しかしわたしはもう、そんな命令を守る気にはなれなかった。

力任せに窓をスライドさせる。反対側のサッシに当たってガアンと鈍い音がして、その直後に、何か重い、硬いものが階下で音を立てた。生ぬるい外界の空気がわたしの肺を冷たく満たす。先生の無表情な声が、一帯の空気を支配した。

「諦める。お前がやったことは分かっている」

わたしは窓枠に足をかけた。

「瞳！」

銃声が響くのと宝が叫ぶのはほぼ同時だった。わたしはその声に確信を持って、自分の身体を窓の外に投げる。二階とはいえそれなりの高さだし、今持っている荷物の重量を考えると、着地に失敗すれば捻挫や打撲では済まないだろう。しかしわたしは、それは有り得ないという妙な自信を持っていた。果たしてそれは正解だった。

勢いづき始めた身体が細い腕に抱きとめられる。決して受け身のとれる体勢でなかったわたしを、宝は素早く自転車の後部座席に乗せ、自分はすかさず運転席にまたがった。同時に指紋キーをはずし、地面を蹴って助走を付ける。一連の動作には五秒もかからず、わたしはただ自転車の震動に身をすくめることしかできなかった。

「つかまって。荷物、特に僕の方を死守して」

宝が前を向いたまま早口に言う。わたしは答える代わりに、彼の腰に腕を回してしっかりとつかまった。

そして自転車が走り出して初めて、玄関の前にソレステイア先生の姿を認めたのだ。彼女はいつも学校に来るときと変わらない格好で、白いスラックスのスーツをモデルのように着こなしていた。ただ、いつもと違うのは。

その手に硝煙の立ち上る拳銃を握り締めていることだった。

それがあまりにも似つかわしくて、背筋がぞくつとする。彼女は走り出した自転車を前に一步も動かなかった。突然のことにどうしていいか分からず動けなかったんじゃない、動かなかったのだ。背筋をまっすぐに伸ばして、わたし達の方を向いている。動けなくな

ったのはむしろ、わたしの方だ。

色素の薄い目。いつも生気に満ちていたその目は、氷のように無感情にわたし達を見据えていた。

わたしの肺を冷やしたのは、間違いなく彼女だったのだ。わたしは既に凍りつき、呼吸さえも止まっていた。――先生ではない。そこに立っているのは、先生ではない。

自転車が右折して、飛び石の上を強引に走る。車体が激しく上下し、同時に身体が座席から跳ねて、わたしはとっさに宝の背中に頬を押しつけ固く目をつぶった。わたしはまだいい、前を向いていなくてもいいのだから。しかしすぐに、自転車の後ろの金属部分に何か小さくて硬いものがギインと強く当たって、思わず目を開けてしまう。宝の舌打ちが背中からわたしの耳へ伝わってきた。先生が銃を撃ったのだろう。

それでも自転車は止まらず、閉まっていた門に力任せに突撃して強引に突破する。かんぬきはかかっていなかったらしく、派手な音の割にはあっさりとしたわたし達を見送ってくれた。

門を出ると、車体が傾いて大きく左折する。自転車はますますスピードを上げて、閑静な住宅街を疾風のごとく走り抜けていく。わたしは鋭く細い風に頬を切られながら、二つの鞆を気遣う余裕もなく再び固く目を閉じた。

先生は追ってこなかった。

「――発信器を付けた。追え。無駄だとは思うがな」

「始まってしまいましたね……」

女は流暢な英語で呟き、窓辺に立っている男の元へ歩み寄った。

男は窓の外を見下ろしたまま、辛そうに頷く。

「ああ……だが我々に止める権利はない。あの子のことを考えると……」

壁は一面ガラス張りで、下界が一望できた。目の前に他の建物は

見えず、一番高いものでも一階分は下だ。どの窓もびっちり閉められていて、人の姿は見えない。空中道路にすら、今日はほとんど車がなかった。

未だ明るい国。世界で唯一光の残された国。
「止められるのは彼女だけだ」

11：地下

暗い。それだけでわたしは尋常になく不安定になる。地に足がつかない。形のない闇がわたしの周りに漂って、わたしの位置を定めてくれない。自分は既に地の底まで落ちているのではないか。そんな可能性さえ捨てきれない。

全くと言っていいほど、光が見えなかった。ここがどの程度の広さの場所で、宝がどこにいるのかも目では分からない。ただ背中にひやりとした壁があり、わたしはそれにもたれかかって座っている。それだけが肌で認識できた。

「……とりあえずここなら安全だ。追っ手は来ないだろう」

宝の落ち着いた声と足音で、彼が今自分の向かい側にいることが分かった。そう近くもないが、決して遠くもない。音の反響具合からすると、十畳程度の四角い部屋だろうか。天井も高くない。

空間を把握したことで、錯乱しかけていたわたしの心は平生の波を取り戻し始めていた。

「……どうということ……」

わたしはしかしまだ落ち着かない荒い息に乗せて声を発した。宝がその場に座る気配を見せる。

「ああだから僕らが自転車を乗り捨てたから。多分発信器が付けられていたんだろうけど、今頃どこかで壊れてると思うよ」

「そうじゃないわ」

見当違いな答えに思わず声を荒らげる。——いや。頭では分かっている、今の応答が間違っではないことくらい。しかし。

わたしは頭を抱えて、自転車の上ですっと詰まっていた言葉を吐きだした。

「どうして先生が……！」

彼女の行動は、わたしに予想以上の動揺を与えていたのだ。

醜い教師達の中で、一番好ましい人だった。わたしに媚びへつら

うことなく、思ったように振る舞い、生徒や同僚に疎まれても自分のスタイルを貫いていた。退屈な授業内容を彩る彼女の遠慮のない物言いには随分楽しませてもらったし、わたしが分裂する割合も比較的低かった。深く関わることのない他人の一人。——そうではあったが、身の回りのくだらない人間達に比べれば、かなり価値のある人間だと、思っていたのに。

宝は少し黙っていた。彼からわたしは見えているのだろうか？——見えていなければいい。こんなに動揺しているわたしを、声を聞かれるだけでも厭わしいのに、目で見られるなんてとても情けないことだ。「わたし」の中に既に「彼女」の姿はなく、脳は全身で揺れ動いていた。

彼は何度か短く息を吐いたり、小さくうなったりして逡巡したようだが、やがて大きなため息をついて小さく話し始めた。

「……アメリカに、」

わたしは顔を上げる。ぼんやりとだが、宝の身体の輪郭が見えた。

「……秘密調査部隊というのがある」

また随分と大仰な名前が出てきて、わたしは思わず口元をゆがめた。

「何の映画の話？」

「映画じゃない。事実なんだ。彼女のことを知りたければ黙って聞いてくれ」

厳しい口調で諭されて、口をつぐむ。彼はわたしが何も言わないのを確認すると、また浅く息を吐いて続けた。

「……秘密って言うくらいだから一般には知らされていない。僕だから知っていることだ。大統領直属の調査機関で、五、六人の部隊が三隊ある。……ソレスティア・クリスは、その一隊の隊長を担う女だ」

「……何それ」

あまりに作り物のような話で、馬鹿みtainな言葉しか出てこない。

前髪に手を突っ込み、爪を立ててぐしゃぐしゃと掻きむしった。

「冗談じゃないのね」

「誰がこんなところで気の利いた冗談を言うんだい」

「つまり先生は、俗に言う裏の人間ってこと？」

「まあ、平たく言うところなる」

「つまり先生は、最初から教師なんかじゃなかったってこと……？」

「……まあ、事実を言うところなる」

わたしは大きなため息を吐いて、両足を地面に投げ出した。それは靴を履いておらず、妙な軽さが気持ち悪い。靴下は黒く、膝から下が闇に溶け込んで見えなかった。腿の辺りの皮膚だけがぼんやりと浮き上がって見える。——繋がらない。先生の見えていなかった部分と見えている部分が。

元が教師でないのなら、なるほどあの性格にも納得できよう。しかし、秘密と言うにはあまりにも堂々としすぎていたように思える。——いや。そもそもなぜ秘密がこんなところで教師などしているのだ？

「先生の目的は？」

投げ出した足をまた縮めて、つま先に触れる。

「大統領直属の調査員が、暇を持て余しているとは思えないわね。」

……教師になりすましていたのも、何かの調査の一環ってこと？」

やや間があつて、まあねと短い返事が返ってくる。あまりその先を言いたくなさそうだったが、わたしは疑問を押さえられなかった。

「何の調査……？」

「それは……」

彼は口ごもった。さつきから随分と歯切れの悪いことだ。わたしは眉間にしわを寄せ、煮え切らない態度の彼に早口に言った。

「敵のことを知るのには重要なことだと思うの」

敵。——自分で口走った言葉にはっとする。わたしは今、自ら先

生を対立するポジションに置いた。まだ何も聞いてはいないのに。

彼はわたしの発言に意外そうな空気を示し、それからやつぱり逡巡した様子を見せたが、やがて諦めたように口を開いた。

「……三年前の世界立美術館事件」

予想外の言葉に眉をひそめる。その事件と言えば、既に迷宮入り扱いされている代物ではないか。

「それと教師がどう関係あるの？学校から近いから？」

「違う。だったら世界立の教師なんかより、もっと簡単で有効な手段があったはずだ。……彼女が世界立中学に来たのは、ある少年を調査するため」

彼の言葉は気だるげで、心底しゃべるのが億劫だと訴えているようだった。

「知ってる？あの事件、世間じゃ迷宮入りだ手も足も出ないとか言われてるけど、一応犯人候補くらいは拳がってたんだよ。……ただし、日本警察じゃなくアメリカの調査部隊が独自の方法で調べただけ」

先生の顔が頭に浮かぶ。硝煙の立つ拳銃を握り、微動だにしないかった冷たい目。——思い出すだけで背筋が凍る。独自の方法、というのは訊かないでおこう。

「その候補者の一人がその少年。どうして候補に拳がったのか、詳しく言うと長くなるんだけど……多分美術館の管理コンピュータにハッキングしたパソコンを逆探知しようとしたとき、途中経過で犯人のパソコンの種類がかなり限定されたんだと思う。結局最後までは探知しきれなかったから、犯人は捕まらなかったんだけど……」

「その種類ってまさか」

わたしはすぐさま黒い箱を思い出した。キーボードとディスプレイが離れた古い型のパソコン。

「ああ。僕のパソコンと同じ種類だ」

眩暈がした。確かに彼ならやりかねないが、確かに彼はわたしと同じ年なのだ。三年前といえばまだ十二歳。小学生だ。

「何回かうちに調査が来た。美術館の件では言わずにあれこれ別の理由をつけてね。両親は何も気付いてないみたいだったけど僕はすぐに分かったよ。……調査の末、僕は一応白だということになった。他にも犯人候補はいたしね。しかしまだ残った可能性に賭けて秘密裏に監視をつけることにしたらしい。その監視役が……ソレス・ティア・クリスだ」

彼はもはや先生とは口にしなかった。ひどく単調にその名を告げる。

「上で指揮を執っていた彼女は、僕と直接面識のない唯一の調査員だったからね。それに……そのとき既に僕は世界立中の入学が決まっていた。世界立の教師になるのに十分な頭脳を持っていたのも、彼女ぐらいなものだった。アメリカの世界立卒というのは事実だから」

「……あなたは最初から、先生が調査員の一人だっただけで知っていたの？」

「まあ、最初に調べたからね」

「知っていて、あんな風に平然と接していたの？」

「そうしないと怪しまれるだろう」

全く映画のような話だ！二人は互いに知っていたのだ、相手の正体は何であるかを——知っていながら仮面をかぶり、これまで素知らぬ風で「先生」と「生徒」を演じてきた。「外」を演じる人間は多々見てきたが、ここまで徹底的に演じきり探り合っている人間を、わたしは見ることがない。

「……ねえ、肝心なことは」

わたしは彼がいるであろうところを睨みつけた。うつすらとだが、彼の身体の輪郭が見える。暗闇でも慣れれば見えてくるものらしい。

「結局、美術館事件の犯人はあなただったの？」

彼と同じ種類のパソコンを使っていて、犯人候補になった人間は他にもいた。未だにあの事件が解決されていないところを見ると、

その人達も白扱いだったのだろう。その中に真犯人がいたのか、それとも本当に彼が――。

わたしは彼がまた口ごもるだろうと思っていた。しかし予想に反し、彼はあーと気の抜けた声を上げてあっさりと頷いた。

「まあ主犯はね。協力者も結構いたけど。僕がしたのは作戦作りと、家から管理コンピュータにハッキングして全てのロックと防犯措置を解除することだけ。品物を盗んだのは皆他の協力者。……ちなみに今いる地下室は、そのとき協力者達を通った地下道の途中だよ」

わたしは座ったまま部屋中を見渡した。闇に慣れた目でよく見ると、宝が座っているすぐ横に、小さなドアがあった。――よく見ると何も、わたし達はそこを通って入ってきたのだけれど。さらに右手の壁にも同じようなドアがある。ここからまた別の道へ行けるのだろう。

「昔作った地下通路が一部が残っていたみたい。入り口を美術館の近くに見つけたから、逃亡に有効利用させてもらった」

「……先生はここを知らないの？」

「知っているだろうね。でも多分中には入ってこない。彼女は出口を知っている、わざわざ迷路に入り込むより、そこで待っていた方が得策だろう」

迷路？ちつとも気付かなかった。わたしはここまで、宝に引っ張られて無我夢中で走ってきただけだ。何も見ていないし、何も考えていなかった。携帯ライトの明かりだけで迷わず走ってきた宝は、当然以前ここを歩いたことがあったのだろう。下見、などの理由で。

「……どうして」

「ん？」

「どうしてそんなことをしたの？」

責める気はない。世界の名品が盗まれようと知ったことではない。ただ、素直に不思議だった。彼が、美術館なんてところを標的にしたことが。

「あなたが美術品に興味があるなんて思えない。何か他の理由があるんでしょ」

彼はまたもや簡単に頷いた。言いたくなかったところは全部言っ
てしまったらしい。

「ああ、簡単なことだよ。それは、
パン。」

「……」

嫌な音が耳をつんざいた。

12：疾走

脳裏にさつと先生の冷たい目がよみがえる。わたしは聞いた、今の音を、彼女の存在とともに――。そのとき彼女が手に持っていたものは？――銃！

「立て！」

宝が叫ぶ。わたしは反射的に立ち上がりながら音のした方に目を向けた。宝の横のドアの向こう、つまりわたし達が通ってきた道。宝はもう一つのドアをほとんど体当たりするように開け、闇の中へ走り出した。わたしも後を追って部屋を出、叩きつけるようにドアを閉める。狭い通路にその音が響くと、続けざまに部屋の中でドアの開く音がした。――追ってきている！

「安全って言ったのはどこの誰よ！」

「予定外だ！無駄な体力を使うな！」

宝は走りながら、握っていた携帯ライトを点けた。ぱつと道が明るくなって、わたしの足下も少しは安定する。しかしわたしは靴を履いていないのだ、こんな道を――恐らく三年間誰も踏んでいないコンクリートの硬い道を、全力で走ってもスニーカーの宝にはついていけないだろう。自分の運動神経の良いことは分かっているが、状況が悪すぎる。

宝は時々振り返って、わたしがついてきているかを確認した。そしてその度、「遅い」と刺々しい声で怒鳴った。

道は基本的に直線だが、しばしば急に大きく曲がる場所があった。そして分かれ道もあった。宝は迷わず道を選ぶのだが、それを見てのことか、追ってくる足音も迷わず正解を選ぶのだ。二人横に並ぶのがやっとで、二メートルも身長があれば天井にぶつかってしまうような道だ。ハイヒールなのか何なのか、相手の高い足音はこだましながら追い討ちをかけるように迫ってくる。そして何度も角を曲がり、道を選ぶにつれて、それは大きくなってきていた。

「もう少しで部屋がある」

宝が走りながら、あまり大きくない声で言った。それでもその声は壁や天井にぶつかって、後ろに響いてしまっただろう。

「そのドアにはかんぬきがついているんだ。中からじゃないと開けられない。とにかくそこに入ってしまったえば一息はつける」

彼は息切れ一つしていなかった。その細い身体のどこにこんなスタミナがたまっているのだろう。わたしは既に、自分で自分の息が聞こえるほどに体力を消耗していた。足の裏が痛くて、それでもなんとか、その部屋まで走っていかなくては。そう思ったから、唇を噛んで足を前に出し続ける。体育の中距離走を思い出した。体力を温存せず、かといって最初からダッシュしては最後に力尽きてしまう、中途半端な距離。それを絶えず全力で走っている気分だ。

「あそこだ！」

宝がライトを突き出して、道の奥を照らした。道はそこで行き止まりだが、確かに、その壁にはドアがある。金属でできていて大分錆び付いているようだが、もうそこを開けるしか道はない。

宝が走った勢いに任せ、ドアに体当たりをした。ギィーと強く耳障りな音が鼓膜を震わせ、それは部屋の内側に聞く。宝は素早く体勢を直しながら振り返り、血相を変えてわたしに叫んだ。

「早く！」

——分かってるわよ！

叫び返してやりたかったが、もうそんな体力が残っていなかった。分かっていて。——さっきから、道に響く足音が格段に大きくなっている。しかもそれに比例して、わたしと宝との距離も少しずつ広がっていった。——足が限界だ。わたしは宝の発する光の元へ、ほぼ倒れ込むようにしてドアを通過した。

しかしそこは決して、安全ではなかった。

「……………」

結局その場に倒れたわたしの側にしゃがみながらも、宝はわたしの姿を見てはいなかった。驚愕に見開かれたその目は、わたしの後

ろを見つめている。わたしが身を起こすと同時に、背後でキィ、カタンとかんぬきの掛けられる音がした。

——閉めたのは宝じゃない、ここから一步も動いていないのだから。

そう考えた瞬間、わたしは足の痛みも忘れて思わず立ち上がった。しかし身体は正直で、振り返った瞬間に足がもつれて後ろに傾く。宝がとつさに腕を伸ばしてくれてなんとか倒れずに済んだが、わたしは礼を言うこともできなかった。見たのだ。——ドアの前に、「三人目」が立っているのを。

女性だった。しかし先生ではない。ライトの光を浴びてぼんやりと浮かび上がったその姿は、場違いなほど幻想的だった。真っ白な膝丈のワンピース、それに劣らぬほど白い肌、細い四肢。足音の原因は、繊細な作りのミュールだった。つばの広い帽子を目深にかぶり、顔は見えないが、鎖骨まで垂れた真っ直ぐな金髪が目にも痛いほど光っている。そして——その美しい容貌にそぐわないのが、やはり右手に握られた無骨な銃。

「……君は」

宝が驚きをにじませて呟いた。女性の口元がゆっくりと笑みをかたどっていく。

そして次の瞬間、細いヒールの先端がわたしの目の前に振り上げられていた。同時にわたしの身体は強く突き飛ばされ、部屋の一角に倒れ込む。宝の腕がやったのだ。宝がわたしをかばって、突き飛ばした。身体を起こすと、宝が身を逸らして彼女の踵落としを避けているのが見えた。そのまましゃがみ込んで、彼女の左足を払おうと自分の右足を回す。すると女性は左足さえも地面から離れた。宝の頭上を細い身体が飛び越え、地面に両手をついて一回転する。今、女性が部屋のより内側へ入り、宝がドア側になった。かんぬきは掛けられているが、逃げようと思えばすぐにまた逃げられる（逆走になるが）。しかし彼はドアに背を向けたまま、それをしようとはしなかった。ただ横目でちらっとわたしを見て、唇を噛んだだけだった。

た。

その仕草がわたしの心を少なからずかき乱す。

——わたしがいるから、か？

宝は鞆を下ろしてわたしによこし、徹底的に戦う姿勢を見せた。ずれた眼鏡を掛け直し、その奥で女性を睨みつける。一秒あって、女性が宝に再び蹴りを繰り出した。宝は再び避け、自身も反撃を試みるが、軽々とかわされてしまう。

わたしは部屋の隅で、その攻防をただ見つめていた。——何もできない。大体彼女が入ってきたのも、わたしが遅かったせいだ。宝一人ならとつくにかんぬきを掛けて、今頃休むなり先へ進むなりできていたはずだ。宝一人、なら。

——足手まとい、か？

頭の中をよぎった言葉に顔をしかめる。——あつてはならないことだ、わたしが足手まといになるなんて。宝はさつきから、彼女の攻撃を避けてばかり。女性は手に持った銃をしきりとちらつかせ、宝の注意力を散漫にさせる。対する宝はライト以外何も持っていない。圧倒的不利。

——あの銃さえ奪えれば。

「くっ！」

女性の踵が宝の頬をかすめる。彼は素早く身を引いて、彼女と距離を取った。彼女もそれを追いはせず、その場でずれた帽子をかぶり直す。手には相変わらず拳銃。

わたしは手早く自分の鞆を開けた。自分で持ってきたものはノートパソコンのみ。宝にもらった巾着を取り出して口を開く。携帯ライト、保存食の缶詰、缶切り、——。

女性がゆっくりと宝に歩み寄る。その右手の拳銃を、真っ直ぐ宝に向かって持ち上げながら——。

——今だ。

わたしは女性に向かってぱっとライトをつけた。唐突に照った二つ目の光に、彼女は一瞬目を見開きすぐ眩しさに顔をしかめる。そ

の瞬間を見逃さない。わたしは掌サイズの缶詰を、彼女の手に向かって思い切り投げつけた。的当てにも投力にも自信がある。宝は目を丸めて、わたしの行動を見つめていた。

女性が小さく悲鳴を上げて銃を取り落とす。

「宝！」

缶詰が床にぶつかる音に掻き消されぬよう、わたしは声を張り上げた。そう叫ぶより早く宝が銃に向かって手を伸ばす。ほぼ同時に、女性も自分の足下のそれに向かって腕を伸ばした。二人の手から銃まで、ほとんど同じ距離。

——取れ！

わたしは歯を食いしばる。唯一わたしの作った、わたしが役に立てるかもしれない瞬間。

するとそのとき、宝が強く床を蹴って銃に向かって飛びついた。

「——っ！」

女性の手が届く直前、宝が銃を抱えるように奪い取り地面で一回転した後立ち上がる。彼女はひるんだが、反射的に身を起こして後ずさった。しかしほぼ同時に額に銃口を突きつけられ、彼女の身体はびくりと固まる。宝はまっすぐに腕を伸ばして銃を握り、息を弾ませながらも不敵に笑った。

「終わりだ」

女性は一瞬驚いたようだったが、すぐにふっと笑うと両手を上げる。そして、初めてまともに声を発した。

「さすがですね」

心の底から感心したような、少しの敗北感もない、澄んだ湖を静かに揺らすような声だった。

勝った——大きな息が思わず漏れる。足手まといにならずに済んだ、と考えていいのだろうか？あとはこの人から聞くことを聞いて、その後は——。

などと考えていると、何を思ったか、宝がひょいと銃口を下げた。わたしは思わず声を出してとがめそうになるが、それより先に彼が

あきれたように笑う。

「全く……人が悪いな。オリゾン」

わたしの知らない名で呼ばれた彼女も、笑いながら両手を下ろした。そして深々とかぶっていた帽子を取り、胸に当てて美しく辞儀をする。

「お久し振りです。初めまして、サン」
イギリスの貴族のようだ、と思った。

13：会話

「まあまあこんなにぼろぼろになって可哀想に。少し待っていてくださいね、今薬を塗ってあげますから」

「追い掛け回してぼろぼろにしたのは君だろう白々しい。大体僕には何の労りもないのか」

「だってまさか靴を履いていないだなんて思わなかったんですもの。どうして履かせてあげないんですか貴方だけそんな動きやすいスニーカー履いてそっちこそ白々しい」

「それはなんか…… タイミング逃して」

「だったら私がまだ遠くにいたとき少し待つて履かせてあげたらよかったじゃないですか。そんなとき女の子を守ってあげるのが紳士というものでしょう女の子を裸足で走らすなんて男の風上にも置けないわ貴方指導者としてはいいかもしれないけど男としては最低ねこのヘタレメガネがあら失礼」

宝は淡々と暴言を吐く彼女に閉口した。正直わたしもだ。何しろ彼女は美しかった。暗闇の中、携帯ライトの黄色味を帯びた光に浮かび上がる彼女の姿は、ギリシア神話の女神を思わせる。ソレスティア先生が「動」の美しさなら、この人は「静」の美しさであろう。人形のような美だ。

その彼女が真顔で淡々とそんなことを言うものだから、わたしは驚いていた。

「あの、別に大丈夫です、自分で塗りますから」

彼女がポケットから出したチューブの蓋を開けようとしたので、あわてて足を引っ込める。靴下を脱いでみると、わたしの足は想像以上の惨状だった。両足の裏の皮が所々剥け、血が全体ににじんでいた。これほどの怪我はここ数年していなかったから、その痛みに新鮮さを覚えるほどだ。

彼女は眉を八の字にして、心の底から労るような声で言う。

「いいんですよそんな遠慮なくて。悪いのは私と、あそこで我関せずと言わんばかりに座り込んでいるヘタレメガネなんですから」
「別にそんな顔してない君はことごとく失礼だな。実際会ってみることさうだ」

「事実でしよう違うというのなら彼女を労る素振りの一つも見せてみなさい口だけ男が」

「あの、そんなことより」

二人の会話があまりに生産性のないものだったので、わたしはやあきれていた。他にもっと話すことがあるだろうに。

「……あなたのこと、ちゃんと教えてください。わたしは宝から何も聞いていません」

彼女は「まあ」と目を丸めて、それからとがめるように宝を睨みつけた。宝は頭をかいて、珍しく困った顔をする。

「直接関係ないと思ったから、黙ってたんだけど……。彼女の名前はオリゾン。イギリスの世界立大学四年生で……。イギリスの電力を落としたのは彼女だ」

彼女、オリゾンはにつこりと笑い、胸に片手を当てて礼をした。

「お粗末ながら、つとめさせて頂きました」

また恐い人が出たなあと思うと同時に、その恐い人を前にしても何とも思わない自分がまたあきれさせた。イギリスといえば、アメリカの次に落ちた国ではないか。こんな人形のような女性が、きつと宝と同じように、紅茶でもすすりながら優雅に自国を壊したのだろう。——全く人は見かけによらないものだ。

「……ということは、アメリカが落ちたときには既にイギリスにいなかったんですか？」

「ええ、そうですね。一週間ほど前に日本に来ました。サンからそろそろだと連絡を受けて……」

「……サン？」

「ああ、ヘタレメガネのことです」

確か最初にもそう呼んでいた。しかしどうにも宝の顔とサンとい

う呼び名が一致せず、説明を求めて宝の方を向く。彼は肩をすくめてすぐに答えた。

「『夕日』を英語に直してごらん」

「……イブニング・サン」

「略してみた」

わたしが訊きたいのはなぜ彼女がそう呼んでいるのかということだ。

「サンは私達に、本名を教えてはくれませんでした」

オリゾンがチューブから薬を練り出して言った。

「三年前からずっと。はい足出してください」

「いえ、結構ですって」

「この出した分無駄になさるつもりですか」

「……すみません」

わたしは渋々足を出す。彼女は細いですねーとか言いながら綺麗な指でわたしの血だらけの足に薬を塗っていった。冷たい軟膏が傷口にしみる。わたしはわずかに顔をしかめながら、話を進めた。

「三年前……？」

「美術館事件のときだね」

宝が答える。また説明を求めて顔を向けると、彼は鞆の口を開きながら続けた。

「僕はそのときから既に、今回の計画を立てていたんだ。協力者の必要性も感じていた。だから早い段階で世界中から適した人材をピックアップして、声をかけた。匿名のメールで」

「一緒に世界を壊しませんかーというようなことが簡潔に書かれていましたね」

「うん。それで返信が来れば脈あり、来なければ無し」

今のご時世、そんな危ないメールに返信するなんて、余程の馬鹿か怖いもの知らずだ。大概の人間はいたずらだと思って消去してしまっただろう。

「それで私返信したんですよね」

「うん、世界で十人に送って十人が返事をよこした」

全員が馬鹿か怖いもの知らずで驚いた。

「……よく返信しましたね」

あきれ返ったわたしの言葉に、しかし彼女は楽しそうに笑う。

「だって退屈だったんですもの。丁度その頃進級テストに合格したことが分かったから、気が抜けちゃって。面白そうな暇つぶしなら何でもやってみたい気分だったわ。……身の安全なんて顧みずに」

最後の一言が胸に引くかかる。宝が鞆の中を探りながら言った。

「僕が必要としているのはそういう人材だ。世界に、自分に、虚しさを感じ、それをどうにかするためならどんな危険も厭わない——むしろ楽しんでみせるような人間。そういった人間は、世界立に集まりやすかった。だから世界立の、特に上級生や特待生を狙って、成績や生活環境、家族構成などを調べ尽くし、最も適していると思われる十人にメールを送った。確信があったよ。彼らなら応じてくれると」

オリゾンが軟膏を塗り終えて、チューブをワンピースのポケットにしまう。そして再び出された手には今度は包帯を握っていた。見たところポケットにはそんなに物は入っていないさそうなのに、いったいどうやって収納しているのだろう。その様は一五〇年前にはやったという漫画の猫型ロボットを思い出させた。その時代の人々は、未来にはそんなものができていると本気で信じていたのだろうか。残念ながら今、そんな便利なロボットは作られていない。

「そしてその十人には、僕が日本にいて、僕のことをサンと呼ぶようにということだけを伝えた。その他の情報は一切無しだ」

「調べようがなかったですよ。私達の技術では、メール送信者の逆探知なんてとてもできなかったし」

オリゾンがわたしの足に包帯を巻きながら苦笑混じりに言う。その言葉にわたしは違和感を覚えた。

「とても、ですか？」

「ええ、とても」

「だってオリゾンさんはコンピューターのスペシャリストなんですよ？他の人達だって……」

そう言うとな彼女は少し困ったような顔をした。代わりに、鞆の中から何か取り出しながら宝が答える。

「ハッキングなどの技術は、僕が後から教え込んだ。最初はメールを返してきた奴らも、僕の言うことを信じなかったけど——」

オリゾンは器用に、慣れた手つきで素早く包帯を巻いていく。わたしの足は見る見るうちに白くなり、気のせいか痛みも和らいだ。

「美術館事件。僕の指示であれが万事うまくいったとき、誰も僕の実力を疑わなくなった」

なるほど。あの事件の目的は、はなから美術品などではなかったということか。自分の実力を証明するためだけに、宝は十人の協力者を日本に集め、指示通りに盗みを働かせた——。そして協力者達は彼の實力に確信を持ち、この世界の破壊まで、準備に協力してきたわけだ。

「だってあんなに手際よく言ったら、ねえ、楽しくなっちゃうじゃないですか。あの後ちゃんと私達には顔も見せてくれましたし。画面の中ですけど」

「実際に会ったのは今日が初めて？」

「ええ。他の協力者の中でも私が初めてでしょう。ですよ？」

包帯の仕上げをしながらオリゾンが顔を向けると、彼は頷いた。

「僕はその十人のことを調べ尽くしていた。それに対して、彼らは僕のことをほとんど知らない。僕の情報はことごとくシャットアウトされていたからね。……だから、彼らが僕を警察に突き出すなんてできないとは思っていたけれど……実際に会ってしまえばまた話は別だ。自慢じゃないけど僕はあまり力が強くないし」

確かに、その細腕では人並み以上の腕力を持っているようには見えない。

「三年の時を通して最も信用できた者に、最後の手伝いをしてもらおうと思ったんだ。そして最終的に選ばれたのが彼女と、……ここ

にはいけないけれど、もう一人のイギリス人。……まあその話はまた後でしょう」

言いながら、彼はわたしに歩み寄る。床に座っているわたしの目の前に立って、手に持っていたものをすつと差し出した。

「履いて」

靴だった。宝が履いているのと同じような、走りやすそうなスニーカー。

「そろそろ出発しよう。いつまでもここで話し込んでいるわけにもいかない」

わたしはそれを受け取ってじつと見つめた。オリゾンの手当は既に終わっている。礼を言ってから、わたしはその靴を靴下もないまま足にはめ込んだ。包帯だけで結構な厚みになっているのだ。靴を履く際足の裏があまり痛まないことに気付いて、改めてオリゾンに礼を言った。彼女は綺麗に笑って、My どういたしまして pleasure、と流暢な英語で答えた。

制服にスニーカーというのはどうにも不格好である。しかも靴下もないとなると、平生なら他人の目が気になって外など歩けないだろう。しかし今ここにいる他人は二人、しかも見た目にこだわる必要のない相手である。さらにわたしは、このスニーカーの歩きやすさに外観も気にならないほどの喜びを感じていた。

整備されていない地下道を、宝の照らすライトの光を頼りに歩く。道はやっぱり直線で、時々人工的に鋭く曲がった。角に遭遇するたび、宝が壁に背をつけて、その先に誰もいないことを確認する。安全と分かるとわたし達についてくるよう合図した。オリゾンが宝の後に続き、最後にわたしが進む。そんな行進が繰り返された。

わたし達が口を閉ざしていると、オリゾンのヒールの音だけが耳についた。彼女はまっすぐ背筋を伸ばし、地面の凹凸にも簡単に対応して歩く。元より背は高いようだが、ハセンチ以上はあるミュールの踵がさらに高く見せていた。

わたしから見れば歩きにくいことこの上ないのだが、まあわざわざ

ざ履いているくらいだからそうでもないのだろう。そう結論づけて、わたしは特に何も言わなかった。が、その音がやや気に障り始めたのか、やがて宝が苦笑混じりに言った。

「相変わらず歩きにくそうな靴だね」

オリゾン は歩調を緩めるでもなく、静かに歩こうと試みるでもなく、変わらぬペースでカツカツと彼の後に続く。

「あら失礼うるさかったですか？ 歩きにくくはありませんよ、一番慣れている靴ですから」

わたしの慣れている靴と言えば世界立の革靴だが、あいにく宝家の玄関に置いて来ざるを得なかった。

「全く……あのときも僕は仰天したものだよ、スカートにハイヒールで泥棒しようって言うんだから」

「モニターから私達のこと見てらしたんですね、いやらしい」

「いやらしいって……仕事を確認するためなんだから仕方ないだろ」

二人の話し声で、オリゾンの足音がいくらか聞こえなくなった。わたしは黙って二人についていく。

「ところでオリゾン、ワローレッドは無事仕事を終えたんだろうね？」

「ええ、もう日本にいるかと」

「そうかい」

知らない名が出てきたが、わたしは黙っていた。先ほど言っていた、もう一人の協力者だろう。もしそうなら後で合流する可能性が高い、だったらそのとき紹介してもらった方がよい。

「彼は馬鹿ですけど、言われたことはきちんとこなしますから」

「ああ。君同様、頼りにしているよ」

宝の照らす五、六メートル先に分かれ道があった。左右二本の道のうち、宝は右の道を選んだ。腕を伸ばしてできる限り奥まで照らし、地面、天井、左右の壁、隅々まで確認する。そして顎をしゃくって、わたし達についてくるよう合図した。

宝が進み、続けて、カツカツと高い足音を立ててオリゾンが進む。そしてふっと思いついたように、彼女はこちらを振り返った。

「ヒトミ、ワローレッドというのは……」

それは丁度、わたしが道に右足を踏み入れたときで、

わたしが後ろから、「四人目」の手に口を塞がれたときだった。

14：拉致

「瞳！」

宝の声が隣の道から響き、こちらには入らず今まで来た道を駆け戻っていく。わたしは口に布を当てられたまま、誰のものかも分からぬ腕に抱えられ、左の道に入っていた。

「——っ」

息を止める。当てられた瞬間思わず吸い込んでしまったが、変に甘い匂いがした。薬が含まれているのは間違いない。

その人物は明かりもつけず、わたしには何も見えない暗闇を、道がはっきり見えているかのように駆け抜けていく。抱えられたまま後方に目をやると、小さな明かりが一点見えた。そしてそこから、宝の低い声が聞き取りづらく響いてくる。

「暗闇での行動は向こうに分があるってことか……」

大体そんなことを言っていた。それでわたしは宝達が追ってこないことを悟った。踵で相手の足を蹴ったり、頭部に拳を打ち込んだりしてみるが、その人物は「てっ」とか「やめろ」とか言うばかりで、一向に足を止める気配を見せない。

いやそれはまだいいのだ——よくはないが——。何よりも問題なのは、わたしが未だに一度も呼吸していないこと。

「——っ」

元々心構えをして大きく息を吸い込んでいたわけではない。脳が酸素を使い果たし、耐え難い痺れがじわじわと頭を包み込む。喉の奥に言いようのないうずきを感じ、今すぐにでも栓を抜いてしまいたい衝動に駆られる。——でもそれは駄目だ。それはいけない。そんなことをしたらきつとわたしは、この得体の知れない薬品を吸い込んで気を失ってしまう。この人物、声から察するに男、には、色々訊かなければならないだろう。——だがこのままでは、気を失うどころか窒息死してしまう。

わたしは顔をしかめた。やむを得ない。なるべく使いたくない手だったが、相手が男だというのなら。

自分の片足を走り続ける男の片足に絡め、その位置を確認する。足はすぐに振り払われたが問題ない。

わたしはもう一方の足を、抱えられた状態のままできる限り振り上げて、男の前方からある一点めがけて思い切り振り下ろした。

「んっ」

「ぐえっ」

男は潰れた蛙みたいな声を上げて、案の定わたしを手放した。わたしは地面にどさりと投げ出され、肩を打ったが、それよりも今は息を吸うのに必死である。その場に仰向けになったまま、決して綺麗とは言えない空気を肺の奥まで吸い込んだ。そして吐き出しながら首を横に向け、男の位置を確認する。うすらぼんやりとだが輪郭が見えた。どうやら——うずくまっている。

男というのは本当にそこが弱いらしい、女には全く理解できない痛みだが。女の出産がこれを上回るようなものならば、わたしは一生子供など産まない。そんなことを心に誓っていると、男は顔を上げて怒鳴り散らした。

「いつってえな、潰れたらどうすんだよ！」

初めてまともに声を聞いたが、どうも少年のようだった。わたしと同じ年代か、少し下の。どこかで聞いたことのあるような声だが、思い出せない。

知るかとしか言いようのない台詞に、わたしも身を起こし声を荒らげた。

「そっちこそいつまで口塞いでるのよ窒息一歩手前だったわよ！それに比べたらあなたのー、えー、……が潰れるくらいどうってことないじゃない！」

「あんだと！？女にや分かんねーよマジいてーんだぞこれ下手な怪我よりずっと……ってお前薬吸ってねえの？」

少年は急に平静に戻った。わたしは整い始めた呼吸に乗せて低く

うなる。

「当たり前でしょ。そんな危なげな薬みすみす吸い込むほど馬鹿じゃないわよ」

あと一歩で吸う可能性もあったが。

彼は小さく舌打ちをして、座ったままぼりと頭を掻いた。

「んだよ、どーりで生きがいいはずだぜ……聞いてた以上にこえーオンナ」

「聞いてた？」

わたしは眉をひそめて立ち上がる。

「誰から？」

「……あー？」

彼も面倒くさそうに立ち上がった。よく見ると身長はそんなになくて、わたしより二、三センチ高い程度だった。

「関係ねーだろ。いーから黙ってついてこい」

「関係なくないわ、あなたどうせこれからわたしをその人のところに連れて行くつもりなんでしょう。わたしにも知る権利はあるはずよ、何なら今すぐ逃げ出してやる」

鞆はある。その中には携帯ライトも入っている。しようと思えば逃げられるはずだ。が、正直、この少年から逃げ切る自信はなかった。あの宝が追いかけるのをやめたのだ、わたしの足ではすぐに追いつかれてしまうだろう。学校では俊足と言われたわたしも、今はまるで鈍足のようなのだ。

彼も同じように考えたのだろう。逃げるとい言葉に焦りもせず、大きなため息をつき肩をすくめた。その仕草がどこか懐かしい。

「あーあうるせえな、女ってのはどうしてこうキィキィ喚くのかねお前といいあの人といい、大して変わんないんだな」

「……あの人？」

「……あ」

しまった。そんな感じで彼は肩をこわばらせた。

あの人、というのは恐らく、彼にわたしを連れてくるよう命じた

人物だろう。要するにボス。そして今の発言からすると、わたしと同じ女。ボス。女。敵。

一人の人物の顔が頭に浮かぶ。

「……先生？」

「あ？」

「ソレスティア・クリス……先生？」

そうだ。当たり前だ。最初から思い当たる人なんて、それくらいしかないのに。

「……『先生』ねえ……」

彼ははつと鼻で笑った。

「そんな生優しい生き物じゃねえぞ、ねーさんは」

ねーさん？先生は彼にそう呼ばれているらしい。オリゾンが宝を「サン」と呼んだときのように、顔と呼び名が一致しなかった。わたしから見れば先生は先生で、決してねーさんではないのだ。

「いい先生だったわ」

わたしが呟くと、彼はまた笑った。顔は見えないけれど、きっとひどくあきれた顔で。

「そりやだまされてんだ。お前らはねーさんの仕事の顔の一部しか知らない。あの人はアメリカ大統領直属の秘密調査部隊第一隊隊長を担う女だぜ」

人を小馬鹿にしたようなしゃべり方と声。その両方が、さっきからしきりとわたしの記憶をくすぐっている。

勘違いかと思ったが、間違いない。——わたしは昔、どこかでこの少年にあつたことがある。

「お前んとこのリーダーがねーさんのこと何て伝えたかは知らねえが、うかうかしてつとねーさんどころか——」

どこかで。どこで？赤い空。透き通るくせつ毛。わたしより少しだけ低い目線。やけに無表情なその顔が、淡々とした口調で吐いた言葉。

「おまえ俺に殺されるぜ」

記憶を覆っていた膜が破れた。

その男の子は、わたしを見るなり一言そう言った。夕方だった。

夜の闇へ移行する前の、真っ赤な時間。電球に赤セロファンを張り付けたような、人工的な透明さ。自宅の近所にある公園のベンチに、わたしは一人で座っていた。規則的に並んだ同じ形の木々が囲う空間。そう広くはなく、ベンチが二脚あるだけであとはフリースペースになっていた。土がまかれた地面。道路の途中にあって通り道になっており、入口から出口へ一本の繰り返し返された足跡が延びていた。わたしの視界の右から左へ、左から右へ。今は誰も通っていない。

わたしは学校が終わると、まっすぐ家には帰らず六時までこの公園でぼうつとするのが日課だった。六時なんて、小学三年生の子供には危ない時間かもしれない。頭のおかしい人間がやって来て、どこかへ連れ去ってしまうかもしれない。それでも家に帰るよりはましだと思っていた。家に帰ってもわたしにはすることがなかった。勉強は意味がない。してもしなくても結果は同じだと、既に証明済みだった。それでも母は勉強しろと喚く。わたしにはそれが苦痛だった。

ここにいれば色々な人を見る。夕方だから、大概は学校帰りの小中高生だが。その誰もが、もうわたしのことなど見慣れた様子で一瞥をくれて去っていく。話しかける者はなかった。わたしも愛想のいい方ではなかったし、何より世界立小学校の制服を身に付けていたのだ。誰も寄り付かない。

ところがその日、一人の男の子が小石を蹴りながら公園に入ってきた。初めて見る顔だった——わたしはこの時間帯にここを通る人間の顔を、大体覚えてしまっていた——。今時石蹴りしながら歩く子供なんて珍しいなあ、とぼんやり眺めていると、その子が足下を狂わせて小石をこっちに飛ばしてしまった。軌道は低かったのでわ

たしに危害はなかったが、変則的に転がったそれはわたしの足下で止まった。そしてそのまま捨て置くかと思いきや、男の子はわざわざわたしの方まで取りに来たのである。

同じ年くらいに見えた。栗色の柔らかそうなくせつ毛で、たれ目でつり眉だった。小石などを蹴っている割に瞳には子供らしい無邪気さなどなく、墨で塗りつぶされたみたいに真っ黒だった。襟の伸びたＴシャツに、膝のすり切れたズボン。あまり裕福でないことが一目で分かった。

わたしは小石を拾って立ち上がり、彼に渡した。彼はわたしより少し背が低くて、皮下脂肪がないのではないかと思うほど痩せ細っていた。受け取ると小さな声で礼を言った。しかしすぐに立ち去る気配を見せず、じつとわたしの目を見つめていた。——いや、睨みつけていたと言った方が良いだろうか？——ともかく彼がその末に吐いた一言が——あの台詞だったのだ。

「……どういう意味？」

わたしは一瞬呆気にとられたが、すぐに眉をひそめて尋ねた。不愉快だったのではない。ただ不思議だったのだ。何をもってわたしの将来をそうはつきり予言してしまうのか。それが知りたかった。

彼ははつと鼻で笑い、小石を足下に転がして答えた。

「そのまんまだよ。おまえ世界立のくせにそんなのも分かんねえの？」

彼の小馬鹿にした態度は、不思議なことに別段わたしの気に障らなかった。わたしは冷静に考え直して再び尋ねる。

「ごめんなさい。質問を変える。どうしてそんなことが宣言できるの？」

すると彼は肩をすくめてこう答えた。

「何となく。おまえみたいな面した奴は、そのうち俺みたいなのに殺されるんじゃないかって」

それは教科書には載っていないことだった。顔で将来を予言する。そんなことが可能なのだろうか？わたしは元々、超能力者だの占い

師だの、そういう胡散臭いものを信じていなかった。しかし——目の前のこの男の子は、そのどれでもないように思える。何の理由もない、「ただ何となく」でわたしの将来を決めつけるような発言をしたのだ。

わたしが黙り込んでいると、彼は「じゃ」と言つてふいと踵を返した。わたしはあわてて彼の袖をつかんで引き留める。

「待つて。名前は？」

今度は彼が驚いた顔をして、それから少し考え込んだ。やがて出た答えは、

「……ナオ？」

疑問形だった。

わたしはその疑問形に疑問も持たず、頷いて袖を離す。

「ナオ。またここ通る？」

ナオはへらつと笑つて肩をすくめた。

「さあ。分かんね。じゃーな」

そして再び小石を蹴り飛ばし、まっすぐ出口に向かって走つていつてしまった。わたしはその場に立ち尽くしたまま、ぼんやりとその出口を見つめていた。空の赤が徐々に弱まっていく。夜の闇が近い。

それ以来、ナオは一度もそこを通らなかった。

「……ナオ？」

「は？」

「ナオ!？」

わたしはその人物の頭と思われる箇所を両手で挟み込んだ。彼は「は!？」と素つ頓狂な悲鳴を上げたが、わたしは構わずその髪の毛をまさぐる。柔らかいくせつ毛。——間違いない!

全てを思い出したのだ、宝の他にわたしの膜を破った人物、そいつが吐いた言葉、出会ったときの一部始終を——。彼の告げた名前

を。

「ちよっ……やめろよ！何すんだよいきなり！」

彼が両手でわたしの手を頭から払いのける。わたしはまだ気が済まず、ずいと顔を近づけて彼の顔を見つめた。しかしやっぱり暗くてよく見えなかったので、素早く鞆から携帯ライトを取り出し彼の顔を照らす。黒い空間が唐突に白んで、わたし自身も思わず目をつぶらずにはいられなかった。——しかしこの機を逃してはいけなく、きつとすぐに消されてしまう——。わたしは眉間に深くしわを寄せ、ぎりぎり見えるくらいの細さで目を開けた。

しかし残念ながら、彼は腕で目をかばっていた。顔を判断するのに最も重要な部分が見えていないのだ。しかし髪は思った通りで、輪郭や口元も、六年前のあのナオに似ている。できれば腕をどけて欲しかったが、彼はあいている方の手でわたしのライトを奪って切ってしまった。

「何なんだよさつきから、おかしいぞお前」

空間が黒に戻り、また彼の姿が見えなくなる。網膜にぼんやりと像が張り付いていたがそれもやがて消えた。しかしわたしは自分でもしつこいと思うくらいに、彼に一つの名を投げ続けた。

「ナオ……ナオでしょ？あの日、公園にいた……」

「……あー？」

彼は低い声でうなつた。やや間があつて、投げやりな返事が返ってくる。

「誰だか知んねーけど、人違いだよ。俺はお前なんて初めて見たし、公園なんて知らない」

わたしは唇を噛んだ。——人違い？それもあり得るだろう。けれど、この髪は。この声は。それに——。

「嘘、だってあの言葉は」

「だーもうごちゃごちゃうつせえ！知らねえたら知らねえんだ！」

「待って話を、——……！？」

聞いて。そう言いかけたとき、急激に体が重くなる。

わたしは彼にすぎる手をだらんと体の両脇に下ろして、その場にかくりと膝をついた。頭が重い。全身の要所要所に磁石がついていて、鉄板である地面に引つ張られるような――。

「……お？今さら薬が効いてきたか？」

うつ伏せに倒れ込みながら、楽しそうな彼の声を聞く。薬――口を塞がれた瞬間に吸い込んだあの甘い匂い、あれが今になって体中に行き渡ったというのか？

息を止めたとき以上の痺れが、脳の髄から全身を支配する。まぶたが力を失って、空間の黒を閉ざしていった。

「な……、……」

呟く言葉も声にならず、舌の感覚も消えていく。冷たい地面に横たわり、わたしの意識は底なし沼に沈んでいった。

15：先生

輪郭のない橙色の光が、まぶたの裏で柔らかく揺れた。喉の奥から小さなうなり声を漏らし、身をよじる。そしてその動きにくさによろやく意識が形を取り戻した。ここは？——左半身が硬い物に絶えず触れている。長い髪が頬に触れ、ざらりと擦れた。——床、だろつか？剥き出しになった左脚が冷たかった。その足を動かしてみると、どういうわけか右脚も一緒について来た。——縛られている、足首で——。となると。両手を動かし、その位置を確認する。思った通り、両手は背中に戻され、足と同じようにきつく紐で縛られていた。

古典的な縛り方だ——要するに今のわたしは、両手両足を縛られて床に転がっている芋虫状態というわけだ。ゆっくりと重いまぶたを持ち上げると、橙色の柔らかな光で照らされた仄暗い空間が広がっていた。電気、ではないようだ。三メートルほど先に、火のついたロウソクを立てた燭台が一つ見えた。どうやら照らされているのはその周辺だけのようで、隅々まではよく見えない。

そしてその燭台の隣に、赤いハイヒールが見えた。いや、ハイヒールを履いた足が見えた。白いストラップスを履いた長い脚が、高らかに組まれていた。見覚えのあるスーツ。さらに視線を上げていけば、そこにはやはり見覚えのある顔。

「やあ。お目覚めかいお姫様」

真っ赤な唇で美しく微笑する女性。

「……先生」

ソレスティア「クリスはシンプルなパイプ椅子に悠然と腰掛け、橙色を映した目でわたしを見下ろしていた。まるで女王。椅子の脚や背もたれに豪華な装飾が施され、金色に輝くような錯覚を覚えた。対して床に転がっているわたしは、惨めな気分にもなるべきなのだろうか？しかし残念ながらそうだった気持ちは湧いてこず、わた

しはむしろこの状況を自然なものとしてすんなり受け入れてしまっていた。

「気分はどうだ」

「どちらかと言えば悪いです」

「よろしい」

ちつともよろしくないわけだが。

薬がまだ残っているせいか、頭を動かそうとするとひどく痛んだ。健全な状態なら起き上がることも可能だったかもしれないが、今の体では厳しい。大体起きあがったところで逃げられるわけもない。わたしは大人しくその場に転がっていることにした。

「ロウソクはお気に召したかな。それでも色々考えたんだぞ。真っ暗ではお前が錯乱するかもしれない、かといって必要以上に明るくして情報を与えるのは避けたい……そこでわざわざ部下に頼んで用意してもらったわけだ」

そういうどうでもいい部分に妙にこだわるところが、先生らしいといえば先生らしい。今時ロウソクなんて儀式くらいにしか使わない、その部下とやらも面倒をこうむったものだ。

部下。——その言葉で直前の記憶がよみがえる。わたしは思わず身を逸らし、精一杯首を伸ばしてまっすぐ先生の顔を見た。

「先生、ナオは……」

「ん？」

「……その、わたしをここに運んできた人は、どこへ……」

「ああ」

先生は長い指を顎に当てて、ちよつと思案する仕草を見せた。

「お前をここに運んできた後、焦って次の仕事に行ったな。そいつに俺のことは何も言うなとかそんなことを言っていた。ああ言ってしまったな、ははは」

やっぱり！彼はわたしの思ったとおりナオだったのだ、そして本人もわたしが誰なのか知っている。理由は分からないがわたしの前に姿をさらすのを避け、その上先生から情報が漏れるのまで恐れて

口止めをしていったのだ。——わたしを避けている？

敵同士だ、当然といえば当然かもしれないが——わたしは重い頭を少し持ち上げ、さらに言葉を続けた。

「先生、彼はどうしてここに……」

「森崎瞳」

鋭い声がそれを遮る。フルネームで呼ばれて、わたしは身動きができなくなった。先生は脚を組み替えて、冷たく細めた目でわたしを見下ろす。

「……状況を理解しているかな。それ以上の質問は許さん。可愛い部下の頼みだからな。……さて、今度はこっちが訊く番だ。これくらいいくつか質問をする。お前は知っている範囲内でもいいから、正直にそれに答えるんだ」

「知っている範囲内で……」

「そう。知らないことは知らないとはつきり答える。もし嘘を吐いたり、だんまりを決め込むようなことがあればそのときは……そうだな」

彼女はちらつと足下の燭台に目をやって、それから猫のようににやあと笑った。

「まあ、そこにあるロウソクで拷問しようとかそんなことは考えていないから、安心しろ」

ぞつとした。今の彼女ならやりかねない。今の彼女は、「先生」ではないのだ。

「……約束します」

自分の声がかすれていることに気付いた。口の中が渴き切っている。しかしわたしは気丈に、あくまで気丈に先生の目を見つめた。

「全ての質問に正直に答える、と。……質問をどうぞ」

先生はちよつと意外そうな顔をした後、ふふんと笑って頷いた。

「よろしい。では一つ目。……宝優陽の目的は？」

わたしは一秒考えて答える。

「『世界の破壊』です」

「ふむ。具体的には？」

わたしは一秒考えて答える。

「全世界の電力を落とします。混乱します。壊れます。『世界の破壊』が目的であって『人類滅亡』が目的ではないそうなので、生き残りがいてもいいみたいです」

「ふうん……。その動機は？」

わたしは二秒考えて答える。

「世の中にうんざりしている。行く先の虚無に気付きながらも皆情性で生きている。それは実にくだらな。この世の中的一切合切が無駄である。だから僕が壊そうと思った。……そんな感じだったと思います」

それを聞き終えるか終えないかのうちに、先生は背もたれにどかっと体重を預けて大きなため息を吐いた。

「やつぱりそんなところか。全く……。それで実行できてしまうんだからはた迷惑な奴だ」

「……分かっていたんですか？」

彼女は憂鬱そうに、ぼりぼりと後頭部を掻いた。豊かな茶髪が無造作に広がる。

「まあ、大体はな。あの手の奴が考えることなんて皆一緒なんだよ、ただ大半の奴がそれを実現できないだけだ。……それに……。優陽の場合、生まれが生まれだしな……」

最後の一言だけ、妙に小さな呟きだった。彼女はとても遠くを見るような目で――そう、わたしはこの目を見たことがある。確かあれは、宝と初めて話した次の日の、総合学の授業。ヒトクローンの説明の最中、彼女は唐突に言葉を切ってこんな目をした。

「生まれ……？」

わたしが聞き返すと、彼女はふっと目を戻し、すぐに元通りに笑った。

「二つ目の質問に行こう。……お前達の仲間は、世界に何人いる？」

わたしは即答する。

「十人です。多分」

「ふむ。その十人はそれぞれどの国にいる？」

「……聞いていません。各国に、としか」

「……。では、アメリカ以外の各国は、協力者が壊したということ
でいいのかな？」

「はい。そうなるでしょう」

答えてから、ふと疑問が湧く。先生はどうして、宝がアメリカを
壊したのだと分かったのだろうか？宝のハッキングの腕前が彼の自信
通りだとして、さらに三年前から改良を重ねているとしたら、逆探
知はまず困難だろう。先生は破壊の始まったすぐ次の朝、宝の家に
来た——どんな手を使って、そんなに早く犯人を割り出したのか。
以前から目をつけていたとはいえ、確証もなく銃を突きつけて良い
もののなか。

「質問は無しだぞ」

先を読んで彼女が制した。わたしはばつが悪く目をそらす。先生
はさもおかしそうにクツクツと笑って続けた。

「さて三つ目の質問だ。……今お前達と直接行動をとみにしている
協力者は何人いる？」

「一人——」

即答しかけて、言葉が喉に引っかかる。わたしがナオに捕まる直
前、宝とオリゾンの会話で出た名前。——ワローレッド。その人物
が、これからわたし達とともに行動するとしたら。

「——です」

言い切った。嘘ではない、先生は「今」と言ったのだから。
「本当か？」

しかし彼女の声が先ほどまでより冷ややかで、わたしは身をこわ
ばらせた。

先生はシャープな顎をわずかに持ち上げ、切るような視線でわた
しを睨め付けていた。ロウソクの炎が、彼女の顔を絶妙な角度で不

気味に照らす。

「今、迷いがあつた」

わたしは唾を呑んだ。迷いがあつたことは認めよう。が、

「本当です。一人。わたしと宝と、あと一人です」

先生はしばらくその角度を崩さずに、じつとわたしの目を見ていた。わたしもきつく唇を噛んで、できるだけ強く、でも余計な感情は入れないように、その視線を真っ向から返す。

彼女の冷たい目は痛い。教壇の上では決して見せることのなかった目。わたしはナオの言葉を思い出した。——お前らはねーさんの仕事の顔の一部しか知らない。——なるほど、今ならよく分かる。

やがて先生はふつと柔らかく目元を緩め、優しく微笑んだ。

「信じよう。可愛い教え子を疑うのは私の本意ではないしね」

よく言いますよ。わざと目でそう訴えてみると、やっぱり彼女は笑った。

「ではその一人の詳細を。分かる限りでいい」

わたしは一秒オリゾンの顔を思い浮かべ、考えながら口を開く。

「……名前はオリゾン。女性です。イギリス人。世界立大学イギリス支部四年生……。イギリスの電力を落としたのは彼女で、……わたしが分かるのはこの程度です」

「容姿は？髪の色や目の色など……あと一応性格も」

「髪は金色で長め、目は青色。……背が高くて細身、肌が白くて……」

「美人です。人形みたい。性格は……。礼儀正しいんですけど、真顔で暴言を吐きます」

「ふむ。ふふ、なかなか面白そうな女性だな。……残念だ」

ぽつり、と呟かれた最後の一言から、感情は読みとれなかった。

彼女は一瞬目を伏せて、開いたときにはまた元通りの笑みを浮かべていた。

「さて、私の質問は以上だ。……何か言いたいことはあるか？」

来た！——またとないチャンスだ、ここで首を縦に振らない手はない。わたしは少し身をよじり、再びまっすぐ先生の目を見られる

ように姿勢を正す。起き上がれないのが口惜しい。

「質問を……してもよろしいでしょうか、先生」

先生、という言葉強調して言う。彼女は面白そうに片眉を上げ、唇に指を当てて口角を上げた。

「内容によつては答えてやらんこともない。……言ってみろ」

わたしは頷く。先ほどの疑問を口にする気はない。恐らくそれは既にばれていて、彼女は答えるつもりがないだろうから。

「先生はアメリカが壊れてどのくらい経ってから犯人は宝だと目星をつけたんですか」

彼女はふんと鼻を鳴らした。

「すぐだよ。すぐ。私に捕らえられて少しもあわてなかったところを見ると、お前、私が何者であるのかと、奴を監視していたことは知っているだろう」

「……はい」

「あの事件……宝優陽は一応犯人候補ということになっていたが、わたしは十中八九奴が犯人だと睨んでいた」

先生は眉間にしわを寄せながら口元で笑うという、複雑な表情をしていた。

「決定的な証拠がなくて、捕まえることはできなかったがな。我々は逆探知して得たパソコンの機種で犯人を絞り込んだんだが、それを使っている人間は、全世界でも一桁しかいなかったよ。しかもその大半がいわゆるコレクターで、ともに扱っている奴などほとんどいなかった。……そんな中で宝優陽は最も疑わしかったというわけだ。他にも様々な要因があつたしな。頭脳面とか」

「……世界立中途入学……ですか？」

「それもある。だが私が言っているのはもっと血筋的な……」

——血筋？

何の話だ？——わたしが訝しく眉をひそめると、彼女は思いつ切り顔をしかめて、大きく首を振った。自分に嫌気がさしたかのような仕草だ。

「それはまあこつちの話だ、この際関係ない。……で、そんなわけだったから、アメリカが壊れたとき私は真っ先にあいつを疑ったね。方法は言えないが、すぐ調べてみるとやっぱりそうだった」

「……つまり、」

頭の中で時間軸が整理されていく。宝がアメリカを壊し、翌朝わたしは宝の家に行く。その間。

「……他の国が壊される前に、あなたは犯人を知っていたということですか？」

「ま、そうなるな」

「どうして止めなかったんですか？」

わたしの素直な質問に、先生は思った以上に目を大きくした。
「だってそうでしょう。先生は宝を止めることができたんです。今日の……今日？の朝みたいのに、家に押し掛けて、拳銃を突きつけてどうせ証拠はあったんでしよう、両親の前でそれを見せれば、宝だってきつと逃げられなくなります。そうすれば被害はアメリカだけで済んだかもしれないし、アメリカだってもう復旧を始めていたかもしれない」

そしてわたしは宝とともに逃亡することなく、思わぬ休日に変わらぬ退屈を覚えながら、寝転がってニュースを見ていただろう。アメリカ復旧作業の様子を無表情に眺めて。

先生はしばらく目を見開いて、ついでに口も珍しく半開きにして、唖然としていた。わたしが何かそんなに変なことを言いましたか、という目を向けると、突然オーバーに吹き出して部屋中に響き渡るような大声で笑った。ロウソクの炎が大きく揺らめいて、空間の形が変わる。

「お前……お前それじゃ、まるで止めて欲しかったみたいな言い方だぞ！」

そう言うってから先生は腹を抱えて笑い続けた。——止めて欲しかった？違う。ただ理解できないのだ。先生のような人が、敵をみすみす野放しにしていることが。——笑い声に負けぬよう、わたし

は声を張り上げた。

「だって先生はアメリカの秘密調査部隊なんですよ！」

それが聞こえたのかどうなのか、彼女の笑いは徐々に収まっていく。最後にはたった今持久走を終えたばかりのように肩を上下させ、まだ口の端に笑みを残したまま（ほとんど引きつつているようだった）目に浮いた涙をぬぐっていた。わたしは無言でその様子を見つめていた。やっと落ち着いたのか、彼女は最後に一つ大きく息を吐いて、疲れ切ったように背もたれに背を預けた。そして、まだかすかに笑みのある唇で、ぼそりと呟く。

「……アメリカなど私の知ったことではないさ」

表情とまるで裏腹な辛辣な言葉に、わたしの頬の筋肉がこわばる。

「さらに言ってしまうえば世界だってどうでもいい。崩壊なり何なり、勝手にするがいいさ」

「……先生それは、」

思わず声を上げる。横向きになったまま大きく口を動かすと、床に広がった髪の毛を唇で噛んでしまった。

「おかしいです。それならなぜ、先生はわたし達を、宝を、追うんですか。こうやってわたしを尋問するんですか。……ええ、よく考えたらおかしいことだらけです。地下道の場所が分かっていたなら、大人数で取り囲んで捕まえてしまえばいい。きっと暗闇に弱いわたしが足を引つ張りますから。それよりも前、宝の家から逃げ出すときにだって、走行中の自転車に発信器を撃ち付けた先生の腕なら、宝を撃ち落とすくらい簡単なことだったでしょう。どうしてこんなわざわざ泳がすような真似を、」

「分からないか森崎」

歌うような声で遮られる。先生は片手で顔を覆って、指の隙間からくつと笑った。

「それらは皆同じことだよ。どんな手段も、使わない理由は一つだけ」

すう、と手をどける。橙色の光の中。教壇の上ではいつだって生気に満ちていたその瞳が。

毒々しいまでに強い光で、わたしを突き刺していた。

わたしは首筋にあるはずのない痛みを感じた。細い針で突かれるような、集中的な鋭い痛み。

先生は床を震わすようなアルトで、ロウソクの炎を揺るがした。

「……私には目的がある。その目的のために、アメリカや世界は関係ない。鍵を握るのは奴、宝優陽——。私のためにも、彼にはまだ消えてもらっては困るのだよ」

16：迷子

わたしは声を出せなかった。喉が渴いている。ひどく渴いている。今言葉を発そうものならば、全て囁の鳴き声に変わってしまうだろう。パイプ椅子に傲然と構えた女王を映す目も、既に水分を失って痛んでいた。しかし——わたしは瞬きできないのだ。

ソレスティア・クリスの視線は確かにわたしを刺していた。しかし彼女が見ているのはきつとわたしではない。宝優陽だ。部隊のターゲットであり、彼女の目的を達成する鍵でもあるという、宝優陽その人なのだ。

ロウソクの炎が低くなる。一度大きくそれが揺れたとき、先生は面を付け替えたようににつこりと笑った。

「——と、そんなところだ。分かったか森崎？」

どつと汗が噴き出す。大きく二、三度頷きたいところだったが、震えたように一度顎を引くだけで精一杯だった。それでも先生は笑ったまま頷く。

「よろしい。それではお前はそろそろ——つと」

言いかけて身をすくめる。彼女は組んでいた足を解き、スラックスのポケットから携帯電話を取り出して耳に当てた。音は鳴らなかったがそれは震えていた。画面が光り、先生の頬だけを照らし出す。

「私だ。どうした。……ふん？……。……ああそうだな、一応連れてこい。気を付けろよ」

会話はものの三十秒ほどで簡潔に終わった。通話を切りながら彼女は髪をかき上げ、ちよつと面白そうにこつ言った。

「変な男がこの建物に不法侵入したんだと。今部下がここに連れてくる」

男？ではオリゾンでないことは確かだ、宝だとしたら顔ですぐばれるだろう。ではわたしには関係のない誰かか——。声を出さずに

そんなことを考えていると、先生が立ち上がったてにやっという意味ありげな笑みを浮かべた。

「さて、天使となるかな、死神となるかな？」

「せやから知らんつちゅーねんわいはノートなくして迷子になつただけなんやから！ここがどこであんたらがどなたはんかなんてこれっぽっちも聞いてへんわ！」

連れてこられた男は、天使とも死神ともつかぬ人物だった。

筋肉質の大振りな身体に、ランニングシャツとラフなズボン。白いタオルで頭を覆って、昔の工事現場にすつきり馴染むような格好をしていた。先生の部下と思われる長身の男二人が彼の両腕を各々つかんで挟み込んでいるが、暴れる彼を押さえるのに必死だ。

「ああねーさんこいつ気付いたらその辺うろうろしてて、ぐっ」

「ドアも窓も全部しまつてたしどっから入ってきたのか分かんないんすよ、げっ」

部下達もなかなか体格のいい男だったので、さすがに振り切るのは困難らしい。彼は今にも泣き出しそうな目で、椅子の前に立った先生にすぐるように喚いた。

「なあ！姐さんこいつらの親分かいな？せやったら一つ言うたつてや、わいは何もしてへんし怪しいもんも持つとらへんから、早う解放せえつて！」

彼を何よりも特異に見せたのはこの関西弁——いや、関西弁は確かに現存するのだ、西日本の人はよく使う。ただ、この男は——。

どこからどう見ても、西洋人だった。

オリゾンと同じ細い金髪、青い瞳。ややえらの張った印象を受ける顔だが彫りが深く、悪い作りではない。まだ年は若い立派な大人で、二十代半ばといったところか。——それだけに、彼の子供のような態度と表情が目についた。

先生ですら予想外だったのか、彼の様子にやや面食らっていた。それから苦笑いを浮かべ腕を組み、両脇の部下二人を交互に見やる。

「えーと……。持ち物は全て調べたか？」

「はあ、持ってた鞆とズボンのポケットを。まー確かに怪しいものは持ってなかったっすね、多少の金とゴミばっか。つまらんくらいっすよ」

「ふーん……。……ちよつとこつち連れてこい」

部下達が「うす」とそろって答え、入り口から部屋の中央へ男を引っ張ってくる。開きっぱなしのドアから廊下の光が入り込み、わたしに部屋の広さを教えてくれた。今いるところからドアまで、およそ四メートル。自由に動けさえすれば逃げられない距離ではないが、いかんせんわたしは未だ床に転がっている。

「よし。男。その娘の前にしやがめ」

男は部下達に引っ張られ、嫌々わたしの目の前にしやがんだ。三人の男が視界をずらりと塞ぐ。両脇の男達は疲れ切った顔で斜め下を向いていたが、真ん中の男は、初めて見る昆虫を観察する子供のような目でわたしの顔をしげしげと眺めていた。他人の視線には慣れていたはずだが、ここまで間近で隠しもせずじろじろ見られるとやはりばつが悪く、わたしは目を泳がせた。

「その娘に見覚えは？」

先生の声が降ってくる。男は九十度まで首を傾げると、大きく首を振った。

「知りまへんなあ。こないなべっぴんはん、いっぺん会ったら忘れるわけあらへんもん」

「……。森崎、お前は？」

「こんなけつたいな人、一度会ったら忘れるわけありません」
はつきりそう答えると、男は「けつたいて」と苦笑いした。

わたしとこの男は間違いなく初対面だ。ナオに会ったときのような懐かしさは微塵も湧いてこない。先生はわたし達を見下ろして眉を寄せていたが、一度首をひねるとまた質問を投げかけた。

「男。宝優陽という名を知っているか？」

男は先生の顔を見上げて、二、三度目をしばたたく。

「何やそれ。えらい豪勢な名前やなあ、それこそけつたいちゃうか」

「知らないか」

念を押すように訊かれ、男は唇をとがらせた。気持ちがすぐ顔に出る、本当に子供のような人物だ。

「知らんっちゅうねん。宝優陽なんて名前。……そう」

突然、男の顔が再びわたしの方を向く。そして楽しそうに、至極無邪気に楽しそうに、大きな口でにいいいと笑った。

「宝優陽なんて名前はな」

瞬間男の目が光る。そしてわたしが目を見開く間に、彼の腕の筋肉が大きく盛り上がり、両脇の部下達を同時に床に叩きつけた。硬い床に顔面からつつこまれた二人は悲鳴も上げず、血がいくらか飛び散って男の白いシャツを汚す。

「ほいつ」

男はその腕で、芋虫状態のわたしを軽々担ぎ上げた。わたしは一瞬ひるんだが抵抗する気にもならず、男の肩の上で大人しく布団干し状態になる。先生の顔が見下ろす位置にあった。彼女はこういうわけか口元に鋭い笑みを浮かべ、腰から銃を抜き出す素振りを見せた。しかし構える瞬間を見ることはなく、わたしは男に担がれたままドアの向こうに飛び出す。

細い廊下が左右に延びていて、天井の薄明るい蛍光灯で照らされている。正面の壁に窓はなかったが、左の突き当たりが全面ガラス張りになっていた。男は迷わずそちらに足を向け、大腿で走り出す。後ろから二人の男の怒号が追いかけてきた。痛みで失神はしなかったらしい、少なくとも鼻の骨は折れたと思うが、たくましいことだ。

「なんやあ、おっさんらかいな。どうせならあっちのおねえちゃんに追いかけられた方が楽しいっちゅうに」

男は心底残念そうにそんなことを言った。この期に及んでそんなことをのたまうとは、あきれたことだ。

——彼は馬鹿ですけれど……。

オリゾンの言葉が蘇る。わたしは何だか妙に納得せざるを得なかった。

ガラス張りの壁が迫ってくる。一般的なドア一枚分の幅だが縦は長い。男は減速するどころか次第に加速して、ガラスを目前にして楽しそうに叫んだ。

「つつこむでえ！」

大方予測してはいたことだが、顔面からつつこむとなると先ほどの二人を思いだしてぞっとする。大体この手の建物の窓は主に強化ガラスを使っていて、その衝撃強度は並ではなく、

「うらっ」

男がわたしを担いでいない方の肩から体当たりすると、強化ガラスは一瞬で粉々になった。

わたしはさすがに硬く目をつぶった。唇も引き結んだ。はらわたが定位置をはがれてしまうような、気持ち悪い浮遊感を覚えた。前髪も結んだ後ろ髪も、天へと向かって一気に逆立つ。四肢さえも、胴体に引っ張られているように無力だ。男の腕は相変わらずわたしの腰をしっかりと締めていたが、彼がそこにいるという確証を持てなかった。

そもそもここは何階だったのか。男が馬鹿であることは分かったが、まさか身の安全も確保できぬまま飛び出してしまっただけ馬鹿だったのか。——そんなはずはない、だって彼は――。

恐らくほんの一秒ほどだったのだろう、そんなことを考えていたのは。息の詰まる浮遊感は腹部への軽い衝撃とともに終わり、目も開けぬままわたしの身体はどこか狭い場所に放り込まれた。硬くもなく軟らかくもない場所がわたしを受け止める。布のようだった。

「全く……女の子はもっと大事に扱いなさいと、いつも言っているでしょう？」

そして、聞き覚えのある涼やかな声が、やや怒りを呈して言った。

わたしは目を開ける。暗かった。が、かの地下道よりはましだった。光源は——ヘッドライト？首を巡らして周囲を見回すと、どうも乗用車の中のようなであった。前に運転席と助手席があり、わたしのいるところは後部座席。その後ろにはトランクがあつて——。

——いや。わたしは首を伸ばして窓の外を見、その考えを改める。下に道路がなかったのだ。街の明かりが遙か下方に、蛍のように蠢いている。自動車ではない。空を飛んでいるのだ、わたし達は。

「いやーすまへんなあ。ちいつと調子に乗りすぎたわ、反省してる」

「……貴方がそう言つて反省したところを、私は見たことがあります。ワローレッド」

隣に座つた男と運転席の女性が、馴れた調子で会話する。ドアに寄り掛かつて不安定な形で座つていたわたしは、未だ縛られたままの足で床を蹴り、運転席の背もたれの脇から前を覗く。慣れた手つきでハンドルを握つたオリゾンが、わたしに顔を向け柔らかく微笑んだ。

「お帰りなさい。ヒトミ」

17：帰還

ワローレッドはわたしが頼むまでわたしの手足の紐を解こうとはしなかった。言われてようやく解くと、オリゾンが運転しながらさんざんなじった。

「貴方本当に気の利かない男ですねそんなことだからもてないんですよ全く二十六にもなつてそんな格好してるし大体その言葉遣いどうにかならぬんですか鬱陶しいんですけど」

「うつ……うつさいねんしゃあないやろ！初めて来た日本の地が大阪やったんから」

オリゾンは関西弁が嫌いなのだろうか。尋ねてみると、彼女は笑つて首を振った。

「とんでもない。日本の伝統文化の一つである言語を嫌いになるわけないじゃないですか。私が嫌なのはこの男がこの顔であつてんだかあつてないんだかも分からないような関西弁を使うことですよ」

「せやからしゃーないやろおお！」

オリゾンの自家用ジェットは、夜の一般空路をすいすい進んでいく。イギリスからはこれに乗ってきたらしい。自家用ジェットなんてそうそう買えるものではないが、彼女の運転にはそつがなく、非常に慣れていることが分かった。冗談めかして「爵位は何ですか」と言ってみると、「はあ侯爵ですけど」とさりと返された。お嬢様だった。

「それでその……オリゾンさんとワローレッドさんはどういうご関係で……」

服の返り血を見てうげええとか言っている彼を尻目に、オリゾンは淡々と答える。

「幼馴染みです。昔から近所に住んでいました。ついでに言うと世界立の先輩でもあり、今は大学院生ですね」

「そして人生の先輩や！」

「違います。で、彼は今までサンに与えられた別任務に行っていたんですけど……それについては後でまたお話ししますね、まあこれからは一緒に行動することになると思いますので、よろしく願いいたします」

わたしは背もたれの隅に頭を埋めて落胆する彼を見、人の見た目の重要性をつくづく感じた。大学院とはつまり、世界立の激戦を最後まで勝ち抜いた者だけが辿り着ける、名誉の極みではないか（一般論では）。この人からはそんな名誉も誇りも感じられない。わたしがじつと見ていると、彼はころつと明るい表情になり快活に言った。

「そついうこつちゃ。よろしくな、ええと……ヒトミちゃんゆうたか。握手！」

差し出された手に内心戸惑う。日本では握手の習慣がそんなになかったし、わたしは握手をするような相手と関わったことがなかった。ちらりと彼の顔を見ると人懐っこい笑みを浮かべており、断ることもできず、わたしは内心を悟られないよう手を握った。

「……よろしくお願いします」

そのとき運転席のバックミラーを見るとオリゾンの口元が映っており、忍び笑いをしているのが分かった。彼女はわたしの気持ちに気付いているようだ。お嬢様のくせに妙に世間ずれた人だ、汚い言葉もよく使うし――。手を離れたわたしは、バックミラーを見つめながら彼女に話しかけてみた。

「オリゾンさんも……今年卒業したら、大学院に行く予定だったんですか？」

「ええ、まあ。特にやりたいことはないんですけど、就職するのが嫌でしたので。政府の要人なんてくそ喰らえですあら失礼」

働きたくないのではない。決められた職に嫌気がさすだけだ。きつとわたしも大学四年になればそう思うだろう。

なりたくてもなれない人がいる。入りたくても入れなかった人がいる。わたし達はその中で確かに勝ち抜いた人間なのだ。才能を持

った人間なのだ。

「……どうして」

端から見れば贅沢なのだ。わがままなのだ。罰当たりなのだ。なのはどうして。

「どうしてわたし達は、他人が羨む人生を自らぶち壊そうとするんでしょうね？」

自問自答だ。そして答えは分かり切っている。

全く皮肉な話である。世界のために役立つよう教育された人間が、その世界を破壊しながら未来を閉ざしていく。正しいかと問われて頷くつもりはない。きっと正しくはないのだ。——いや、大体何をもって世界は正しいことを決める？大多数が正しくないと言っても、一人が正しいと言えばそれは正しいことなのだろう。——この世に軸はないのだ。絶対的に正しいこともなければ、絶対的に間違っていることもない。わたし達が他人に行動を批判され、理解できないと言われても、わたし達からしてみれば不思議でも何でもなく、為すべくして為すことなのだろう。

「……全くですね」

オリゾンは口元に自嘲的な笑みを浮かべて言った。ワローレッドが頭の後ろで手を組んで、口笛などを吹いている。窓から下界を見下ろすと、人類の罪である光が、いつか消される恐怖におののきながら今夜も機械的に光っていた。

宝はビジネスホテルの二十四時間経営無人コーヒーショップで平然とコーヒーを飲んでいた。わたしが自動ドアから入っていくと、片手をひらひらさせてにこにこ笑う。

「や。お帰り」

わたしは答えず、おぼつかない足取りで彼のいる四人用のテーブル席まで歩いていった。途中何度かよろけて、近くにある椅子やテーブルに手をついた。やっと彼の元に辿り着き、向かい側に座ると、彼は苦笑してコーヒーカップを置く。

「大分酔ってるみたいだね。自家用ジェットは初めてかい？」

「初めてよ……うつ」

「……水飲む？」

「頂くわ……」

宝は頷いて、少し離れたドリンクバーまで水を取りに行ってくれた。わたしはテーブルの上に上半身を倒れ込ませ、まぶたを下ろす。オリジンとワローレッドは屋上にジェットを停めにいった。わたしは酔いが尋常でなかったため、先にここに降ろされたのだ。

「はい」

カップの置かれる音が直接鼓膜を揺らし、おもむろに上半身を起こす。宝が席に戻っていて、水が用意されていた。低い声で礼を言っ
つて一口二口飲むと、齒に凍みるほど冷たくて、少しは気分もまし
になった。

「……どうしてわたしの居場所が分かったの？」

オリジンとワローレッドをあそこに送ったのは宝だという。どう
やらあの時点でわたしが捕まってから十時間以上は立っていたらし
く、さらに一時間ほどフライトしたから、既に外は闇色の時間帯だ。

宝はコーヒーカップを口に付けながら笑みを浮かべた。

「君にあげた靴。あれに発信機が付いてた。途中で脱げたりしなく
て良かったよ」

なるほど、ぬかりない奴だ。

「……で、あなたはここでのんびりコーヒー飲んでたわけ？」

彼は大きく肩をすくめて首を振った。

「まさか。僕だって色々やってたんだよ。言わないけど。……ああ、
一つ分かったことがあるな」

「何？」

「僕ら是指名手配されていないってことさ」

街を歩いてもコーヒーショップで他人と顔を合わせても、誰一人
宝を見て不審な顔をしなかったそうだ。

「ま、指名手配なんかするより、調査部隊で勝手に捕まえてしまった方が楽だろうしね。あの女の好みそうなことだ」

言って宝はコーヒーを飲み干した。

そのうちオリゾンとワローレッドがやってきた。オリゾンがわたしの隣に、ワローレッドが宝の隣に座る。ワローレッドと宝は最初めて直に顔を合わせたらしく、軽い挨拶を交わしていた。ワローレッドもオリゾンと同じで彼をサンと呼び、特に宝に萎縮する様子はなかった。

「ところでワローレッド。任務の成果報告は」

わたしの知る限りでは二杯目のコーヒーに砂糖とミルクを入れながら宝が言った。ブラックで飲めないのかという目を向けると飲めないよという笑顔で返された。大人びているくせに所々子供だな、と水を口に含みながら思う。氷はとうに溶けて、ぬるくなっていた。

ワローレッドは待つてましたと言わんばかりににやりと笑い、テーブルの上に身を乗り出す。

「了解。ってもまあ見ての通りやけどな」

宝とオリゾンは熟知り顔で頷いているが、わたしはその訳を知らなかった。黙って聞いていればそのうち分かるだろう、そんな顔で頬杖をついていると、ワローレッドがわざわざ人差し指を立ててずいっと迫ってきた。

「ええかヒトミちゃん！わいの任務ゆうんはなあ、『世界の予備電源の破壊』や！」

「……はあ、？」

いきなりそんなことを言われても。宝に説明を求めて目を向けると、彼は甘ったるいコーヒーを真顔で飲みながら答えた。

「僕らが今まで使っていた『電力を落とす』『アメリカを壊す』などの表現はつまり、『発電所の機能を完全に停止させ再起不能なまでに稼働に必要なプログラムを消去する』という意味だ」

そつえば具体的なことは今まで聞いていなかったが、大体そん

なことだろうとは思っていた。その「発電所の機能を完全に停止させ再起不能なまでに稼働に必要なプログラムを消去する」ことを、宝や他の協力者達が、自分のパソコンを使ってまんまとやってのけたわけだ。担当する国の発電所なら、大も小も全て。

「もちろんその『稼働に必要なプログラム』の中には、エラーに対応するプログラムも含まれている。根こそぎ破壊してしまえばエラー云々という問題ではなくなるから、発電所は見事に全く動かなくなるわけだ。で、その後は知っての通り。……なんだけど」

しゃべり疲れたのか、宝はオリゾンに視線をやってコーヒークップを置いた。意を介したオリゾンは頷き、話を受け継ぐ。

「国際機関もそう馬鹿ではありませんから、こういった事態に備えて大規模な予備電源を用意していたんです。ご存じでしょう、南極にある……」

「……ああ」

そういえばそんな物があった。南極の、集雲倉庫と並ぶ巨大な建物。——国際蓄電所。

常日頃から世界各国が少しずつ電力を供給し、大規模な停電が起こったときなどに備えるという「画期的」な施設。今までも何度かある国が電力不足に陥ったときなどに利用されてきた。

「あそこは普段頻繁に使わない分、ハッキングで内部から破壊するのに時間がかかるんです。壊している最中に見つかって、修復される可能性も低くはない。もし中途半端なところで気付かれてしまえば、各国の発電所の警戒が強まります。それは避けたい事態です。ですから」

「このわいが直々に赴いて、マスターコンピュータを直接ぶっ壊したっちうわけや！」

「うるさい。……まあそんなところですよ、電腦世界で駄目なら物理世界で。ターゲットが一つなら不可能ではありません。幸い国際蓄電所は無人ですし」

「……。それを実行したのはいつ頃？」

尋ねると、宝もオリゾンも一様にワローレッドの方を向いた。オリゾンにうるさい発言をされた彼は可哀相なくらい落ち込んでいたが、宝に脇腹を小突かれると弾かれたように顔を上げる。その顔は言わずもがな、既に元の明るい表情に戻っていた。

「時間？昨日の……午後四時過ぎくらいやったかな。アメリカが壊れるちーと前や」

そしてアメリカが壊れ、予備電源が作動すべきところで作動せず、世界が蓄電所の異常に気付く。しかしわたしはそのニュースを見た記憶がなかった。宝にその旨を伝えたと、彼は皮肉っぽく笑う。

「以前から蓄電所の無人状態については異論が出ていた。国際機関はそれを無理に抑えて今の状態で運営を開始したんだ。こんな不祥事が起きては、隠したくなるのが心理だね」

なるほど。汚い意地が報道の目を曇らすわけだ。

「でもまあ、未だに作動していないところを見ると……」

宝がちらつとワローレッドを見る。彼は得意満面で、勢いよくVサインをしてみせた。

「もっちゃん。大成功や！」

オリゾンがわたしの隣で、柔らかく微笑むのが見えた。男性に対して冷たい彼女には珍しい、ワローレッドに向けられた優しい微笑。それはわたしに向けられるものとは少し異なっているように思えた。

宝もいつも通りの笑みに少しだけ安堵の色をにじませた。そして残ったコーヒーを飲み干し、カップを受け皿に置く。

「今日はこれまでにしよう。とりあえず休まないといけない。休養は肝心だ。僕も疲れた。……このホテルの五階に部屋を二室取った。男女で分かれて泊まるう」

言って彼は立ち上がった。オリゾン、ワローレッドもガタガタと立ち上がり、各々使ったカップをドリンクバーの隣のカウンターに置いていく。わたしも遅れて立ち上がるが、まだ酔いが醒めきっていないらしく、席を離れぬうちに眩暈がした。

テーブルに手をついて、額を押さえる。前頭葉が鉛に変わったように重い。ナオに嗅がされた薬もまだ完全に切れてはいないのだろう。十時間も気絶していたというのだから、相当強い薬だったのかもしれない。考えてみれば、今日一日、わたしはほとんど寝ていたのだ。先ほどは宝にずっとコーヒーを飲んでいたのかと小言を言ったが、起きていただけ彼の方がましだ。宝だけではない。オリゾンも、ワローレッドも、わたしを助けるためにわざわざ働いた。それは予定外の仕事だっただろう。

「瞳」

不意に名を呼ばれ、重い頭を上げる。宝がカウンターから戻ってきていて、わたしの顔を覗き込んだ。

「大丈夫？」

カウンターから直接自動ドアに向かえば、距離は短くて済んだのに。彼はわざわざ戻ってきた。

わたしのために。

わたしは急激に全身が熱くなるのを感じた。戻ってきてくれた宝にときめいたとか、そんな甘ったるい類のものではない。羞恥心だ。それに――ひどく、悔しかった。何が悔しいものか、他人に労られて――そう思われるかもしれない。けれどわたしは悔しかった。そして、何が悔しいのかもよく分かっていた。

テーブルについた手を目の前まで持ち上げる。手首を見ると、まだ縛られた跡が残っていた。わたしは唇を噛み締め、宝の顔を見る。彼は不思議そうに、「大丈夫？」と再び尋ねてきた。わたしはいたたまれない気持ちになった。

「……宝」

ほとんど聞き取れないような声で言う。それでも彼は首を傾げ、先を促してくれた。

「……話があるの。これから、いい？」

押し殺した声でそれだけ言っと、彼は急に真顔になった。わたしが再びうつむくと、彼は静かに頷いて、低い声で答える。

「……分かった」

その言葉に、特に感情はこもっていなかったように思える。しかし彼はこのとき確かに、わたしの言いたいことを理解していたに違いなかった。

そしてわたしが思った以上に、不安な気持ちに駆られていたのかもしれない。

18：疑問

「わたしのいる意味はあるの？」

開口一番わたしはそう言った。宝は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした。

二対のベッド、狭いテーブル、バスルーム。ごく一般的なビジネスホテルの典型的なツインルームで、わたし達は別々のベッドに腰掛けて向かい合っていた。ワローレッドにはオリゾンと一緒に女部屋に行ってもらい、代わりにわたしが今男部屋にいる。

宝はしばらく目を見開いたまま口も利けないでいたが、やがて眼鏡のブリッジを中指で押し上げて失笑した。

「君のことだ、ろくなことを言わないだろうとは思っていたけど」

わたしは不機嫌に眉を寄せる。彼は気付いていないのか、大袈裟に首を振って続けた。

「ナンセンスだ。なぜ今さらそんなことを訊く？」

「……だって」

頭に来る。彼がわたしの考えていることを知らぬわけがないのだ。彼だけではない、オリゾンだってきつと――。

「わたしは足手まといにしかなくていい」

一日だ。宝の家に行つてこのホテルの一室に至るまでのたったの一日。その間にわたしが、どれほどの手間を彼に掛けさせたことか。地下道でオリゾンに追いかけられたのは結果オーライ、そういう考え方もあるだろう。しかし、もしあれが彼女でなくて本当の敵だったら？ 部屋に入ってきた時点でわたしは殺されただろうし、宝だつてどうなったか分からない。そして何より、ナオにあっさり捕まってしまった失態。あれさえなければ宝はもっとと有意義に一日を使えに違いないし、オリゾンや、任務帰りのワローレッドに苦労させずに済んだはずだ。さらに些細なことではあるが、さっきだって気分が悪くて宝に気を遣わせた。――悪いこと尽くしだ。わたしが宝

の立場なら、こんな女とつくに切り捨てている。

彼は腕を組んで、興味深そうにわたしを見ていた。観察するような目。わたしを責めもしない、怒りもしない。わたしにはその視線が、どんな言葉で責められるよりも苦痛だった。

「あなたはわたしの能力を見込んでパートナーにしたみたいだけど、これじゃ全く無意味じゃない。何の役にも立ちやしないわ。それならオリゾンさんでもパートナーにした方がずっといい。それなのにどうしてあなたは未だにわたしをここに置いているのよ」

早口で一氣にまくし立てると脳が酸素不足になって眩暈がした。どうしてわたしがこんな、怒ったように話さなきゃならない？ 怒るべきなのは宝なのだ、使えないわたしをなじって、なじって、最終的に見捨てればいい。——正直わたしはどうしたらいいのか分からなかった。初めて湧き起こるこの感情、感覚に、戸惑っているのかもしれない。もしわたしがもう少し前にこれを経験したことがあったなら、簡単に「惨め」と形容できただろう。しかしこのときわたしはその術を知らず、自分に向くべき怒りを理不尽に他人に向けるしかなかった。そして彼の怒りをわたしに向けようとしているのだ。

わたしを労る言葉の裏になじる言葉を隠しているなら、直接叩きつけられた方がまだ。そうすればわたしは自分の無力を確信し、破壊の犠牲者の一人に成り変わるだろう。それなのに宝はただしげしげと、わたしの顔を眺めるだけなのだ。

彼は見当違いな読解を答えた生徒を見る現代文教師のような目で、しばらく何も言わなかった。わたしは彼にとつと、君の言うとおりだねと言って欲しかった。しかし彼はやがて、ロボットのようには口元だけ動かしてやけに明瞭にこう言った。

「誰も君にそんなこと期待していない」

わたしは我が耳を疑った。

——何を？

彼の口から出た言葉は確かにわたしを否定するようなものだった

が、否定する部分が違っていた。

期待していない、と？

だって宝はわたしの頭脳と運動能力とあと性格だったか、を買ってわたしをパートナーにしたのだろう？

「確かに僕は君の頭脳と運動能力を考慮して選んだけれど」

彼はやおら脚を組み、目を伏せて淡々と続けた。

「それで手助けをしてもらおうなんてこれっぽっちも思っていない。特に運動面については。……君の体育の成績が人並み以上だったことは認めよう。だけどそれはあくまで数値の上だ。決められた場所で、決められたスタートで、一定の心構えができていたの数値だ。実際の戦闘はわけが違う。オリゾンとは恐らく君より足が遅いけれど、君よりずっと実戦に強い。彼女はこの日に向けて三年前からワローレッドと訓練してきたからね。それに比べたら毎日学校に通うだけの君なんて」

それは仕方ないだろう、戦闘に巻き込まれる予定もないのに毎日訓練する女子中学生がどこにいる。睨むと、彼は肩をすくめて苦笑した。

「だから、せいぜい逃げ回るのが限度だと想定はしていた。オリゾンに追われたとき追いつかれたのは僕が靴を渡し損ねたせいだし、ソレスティアの手先に捕まったのは君を一番後ろに置いた僕の配置ミスだ。気にしないでいい。頭脳面にしても、オリゾンから銃を奪ったときのように、適度な状況判断ができればそれでいいんだ」

「つまり」

不愉快、ではなかった。最初から働きを期待されていないならそれでいい。足を引っ張ったのは宝の責任であるというのならそういうことにしておこう。だが。

「わたしはただ黙ってついでにいい、と？」

「……悪い言い方をするとそうなる」

「それに何の意味があるの？」

やはり理解できなかった。役に立てるつもりもないのに、余計な

気苦労を持ち歩いて何になる？無駄もいいところではないのか？――すると宝はなだめるように両掌を向け、わたしにもう少し身を引くようにとジェスチャーした。気が付くとわたしは、ベッドから落ちんばかりに宝に詰め寄っていた。ばつが悪く床を睨みながら腰掛け直すと、彼は笑いながらこう言った。

「君にはちゃんと役目がある。最後の最期に、重大な役目が」

わたしは胡乱な目で顔を上げる。最後？つまり、日本の電力も落として、世界中から完全に明かりが消えた瞬間か。そういえば、そのときわたし達がどこにいて、何をしている予定なのか聞いていない。そして、その後のことも。

「日本の電力が落ち、混乱状態に陥り、街の破壊が粗方終わった頃、君は死ぬことになる」

なるほど。死ぬのか。それで万事解決というわけだ。

「……」

――死ぬ？

「そして僕も死ぬ。オリゾンも死ぬ。ワローレッドも死ぬ。もちろんソレスティアやその一味にも死んでもらう」

歌うように彼は言う。死にゆく者を指折り数えて、空を眺める子供のように天井を見上げて。

「それで終わりだ。もちろんその後のことは知ったことじゃない。そのまま世界がくたばるかもしれないし、生き残りが作り直すかもしれない。もし後者だとしたら、僕はそれを見たくない。だから死ぬ」

「……それとわたしの役目とどう関係あるのよ」

声が上がると。結局わたしはまた彼に生死を握られていたのだ。――明確な不愉快さが心の中でうずく。妙なことだとは自分でも思う。最初に彼に生死を握られたとき、わたしはむしろ愉快でさえあったのに。

いったい何が変わっている？

彼はふつと視線を下げ、口元にどこか自嘲的な笑みを浮かべた。

「君の役目は、最期に僕を殺すこと」

音声は耳から流れ込み、一度そのまま通り過ぎる。再びその言葉を反芻し、脳が意味を理解したとき、わたしは思わず息を詰めた。間違いない、確かに彼はそう言った。

「最後の最期に、その手で僕を殺す。そのためだけに、君はここにいる」

わたしは死ななければならぬようだった。そしてその前に、人を一人殺さなければならぬらしい。なぜそういうことになったのかはよく分からない。ただ彼の中で、わたしはそういう役所だと決まっているらしかった。

「……訳が」

低い声が自然と漏れる。唇を動かすのも煩わしく、それは床を這うように響いた。

「……分からないんだけど」

殺す。わたしが、人を。百歩譲って、そこはまあいいことにしておこう。この際個人的な感情は抜きにして考えてやろう。それにしたって筋が通らない。死にたいなら勝手に死ねばいい、自殺でも何でもして――。

「僕はね、自殺は好きじゃないんだ」

彼は自分の膝に頬杖をついて、さめざめと言った。

「だって格好悪いだろう、自分で自分の命を絶つなんて。だったら自分の認めた人に殺してもらった方がずっと綺麗だ。そう思わないか」

「ごめんなさい全然解らない」

即答すると彼は残念そうに首を振る。

「まあいいさ。君の役目さえ解ってくれば。要は最期まで、黙って付いてきてくれる人が欲しかった。君の無関心さが本当に必要だったのはそこだよ」

無関心――。

彼は恐らく、自分のことを深く探索されたくないのだろう。最初の地下室で、先生や美術館事件の話をしたときの様子を見れば分かる。それがなぜかは知らない。が、彼は確かに、自分を質問攻めにした人を求めているのだ。

確かに。一日前のわたしなら、最適な人材だっただろう。

——だが今はどうか？

「……先生に会ったわ」

構わず話し続けると、彼の顔は一瞬であからさまなしかめっ面になった。普段の飄々とした笑顔とは違う、感情を露わにした不安定な顔。そして——いつもより鋭い光を帯びた目。

わたしのその目を、強く睨み返した。ここで目を逸らしてはいけない。わたしは彼の言葉を聞かなくてはならないのだ。

わたし達はしばらく睨み合っていたが、やがて宝が、

「そう」

とだけ答えて、さらに

「じゃあ僕は疲れたからそろそろ寝るよ。ワローレッドにこっちに来るよう言っておいて。お休み」

などと言ってベッドに身を横たえてしまった。

わたしはあわてて立ち上がり、宝の襟首をつかんで持ち上げる。

彼の首はかくんと力無く後ろに折れ、眼鏡が上にずれた。宝はその体勢の都合で口を半開きにしていたが、そこから言葉が漏れてくる気配はない。わたしは眉間に深い縦皺を刻み、彼の襟を力の限り絞めて、それでもかと言うほどの大声で怒鳴った。

「生まれって何よ、血筋って何よ!!」

垂れ下がっていた宝の頭が、驚くほどの勢いで持ち上がった。ずれた眼鏡が今度は下に落ち、辛うじて鼻に引っかかっている。わたしは宝の目を、眼鏡を通さず初めて見た。大きく見開かれた、ガラス玉のような目。透明感のある茶色の瞳。ミルク色の白目に、鮮明な血管が浮き出て充血していた。

彼はひるんだわたしの手を乱暴に解き、上半身を跳ね起こす。そ

して眼鏡を直しもせず、その場に立ちすくむわたしを睨み上げた。

「……それはソレスティアが言ったのか？」

「え、ええ……」

「どういう流れで？」

詰問するつもりが逆にされて、わたしは内心狼狽する。宝から逸らした目を宙に泳がせつつ、先生との会話を反芻した。

「……あなたが『世界の破壊』を望む理由、それを話したときに『生まれが生まれだ』って……。それと、あなたの頭脳について話したとき、『血筋的なもの』というようなことを」

「……ふん」

彼は苦虫を噛み潰したような顔をして、またベッドに横たわる。おまけに今度は横向きになって、こちら側に背を向けてしまった。

「……ちよつと、ちゃんと答えてよ！」

わたしは肩を揺すってみたが、彼の身体は素直に揺すられるばかりで、応答する気配は毛ほどもない。上から顔を覗き込むと、彼は既に目を閉じて安らかな寝息を立てていた。眼鏡も掛けたまま。

「……もし、」

床に膝をついて、彼の耳元で呟く。彼の袖を強く握っても、反応は返ってこない。

「……もしわたしが無関心じゃなくなったら、わたしは用無しになるの……？」

返事はなかった。

消え入りそうな呟きは文字通り部屋の空気に消え入った。虚しさを握る手がかすかに震える。宝は深い寝息を立てつつ、肺の動きに合わせて肋骨を上下させるだけだった。

「……」

わたしは立ち上がってベッドを離れる。ドアまで歩いて、出際、もう一度だけ宝の方を振り向いたが、一ミリも動いた様子はなかった。

19：行動

「あら」

廊下に出るとオリゾンに遭遇した。右手の突き当たりの角から曲がってきたらしく、こちらに早足で向かってくる。手には何も持っていないかった。

「今他の部屋の視察に行ってきたところですよ。このフロアと上下のワンフロアに、他にお客はいないようです。お話はもうよろしいんですか？」

「……はい」

顔も見ずに答えると、彼女は苦笑する。

「……怒ってますか？」

「怒ってますよ」

とげとげしく即答。彼女は微笑を保ったまま、宝のいる部屋の向かい、つまり女部屋のドアノブに手を掛けた。

「とりあえずこちらにお入り下さい、ワローレッドもいますけど。残念ながら」

中は男部屋とほとんど同じ作りで、片方のベッドにワローレッドが寝そべってノートでゲームをしていた。「うりゃー」「しゃー！」「あっこんチキシヨ」などと子供じみた独り言で白熱する彼の背を、オリゾンがミニールの踵で踏みつける。彼は尻尾を踏まれた猫のような悲鳴を上げて、次の瞬間画面の中で何かが爆発した。

「どきなさいワローレッド。そこは今からわたしが使います。ああヒトミはそちらの綺麗なベッドをお使いになって結構ですよ」

「綺麗って何や、まるでわいが汚いみたいやん！」

「いいからどきなさい」

「ぎゃーー!!」

ワローレッドの悲鳴をよそに、わたしは遠慮なくもう一方のベッドに腰を下ろす。スプリングがきいて身体が大きく跳ね、それだけ

で額の血管が一、二本切れそうになった。憤然と脚を組むと、やつと起き上がったワローレッドが間拔けな顔で首を傾げる。

「……なんやヒトミちゃん怒つとらへん？サンはどないしたん？」

「知りません」

感情のままに声を出すと、彼は全身をすくめてベッドに座ったオリゾンの背に隠れた。一言言つと口が止まらず、本人に言うべき文句が勝手にこの場で流れ出る。

「知りませんよ何も。宝は何も言ってくれませんか。こっちの質問にはろくすつば答えもしないくせにあんな目で睨んでくるし。おまけに死ねだの殺せだの、何様なんですかあいつは」

最後に大きく舌打ちすると、ワローレッドはいよいよおびえきつてベッドの上で頭を抱え丸まった。オリゾンは鬱陶しそうに背後のそれを一瞥すると、柔らかい微笑で小首を傾げる。

「どうぞ、何があつたのかお話し下さい。そういうのはため込んでいるとよくありませんから」

わたしは少しためらったが、結局事の成り行きを最初から話し始めた。彼に告げられた自分の役目、最後にはわたし達全員が死ぬという予定、先生が言つた「生まれ」「血筋」という言葉、それに対する宝の態度――。オリゾンは始終簡単な相槌を打ちながら聞いてくれて、結局途中からワローレッドも一緒に聞き出して、話していくうちにわたしは自分がだんだん冷静になっていくのを感じた。こういう経験は初めてだ、そもそもわたしは生まれてこの方これほどまでに怒り狂つた試しがない。それというのもわたしの「無関心さ」のせいだろう。しかし現状、「頭を冷やす」という行為ができてしまうほどの激情を抱くということは

わたしは気付いている。自分が宝の求めるような人間ではなくなっていることに。

「はあ、なるほどなあ」

「あのヘタレメガネ、なかなかに許し難い態度を取りますね」

二人は妙に納得した様子で、深く二、三度頷いた。

「……二人とも、最後には死ぬということを知っていたんですか？」

そこを話したとき、彼らは全く平然としていたのである。それまでと変わらぬ相槌を打って、先を促した。

オリゾンが頷き、肩に掛かったブロンドを手で払う。

「聞いていましたよ。一番最初に。君たちは最終的に死ぬことになるけれどそれでもいいかって念を押されましたもの。私達は二人一緒に死ねるなら、と承諾しました」

「二人一緒に？」

「ええ。こんな中でも一応人生で一番長く一緒にいた人間ですから。できれば最後まで一緒にいたいでしょう？」

彼女はちらつと隣に座ったワローレッドを一瞥し、照れくさそうに微笑んだ。ワローレッドは「こんなのは何や」と唇をとがらせ、オリゾンの細い肩を肘で小突く。しかし珍しいことに彼女は笑ったまま、彼を冷たく罵倒することはなかった。

まだこの世界に、二人のような人間がいることに驚いた。ひょっとしたら探せばもつといるのかもしれない。わたしの目の届かないところに、わたしの交わらないところに。

けれど——もう遅い。

「……わたしが宝を殺すことになっている、というのは聞いていましたか？」

二人は顔を見合わせ、そろって首を振る。

「それは聞いていません。貴女に関するのなら貴女だけが聞くべきでしょう」

「……だけど宝はついさっきまで教えてくれなかったんです」

四肢の先の血が再び沸き始める。膝の上でスカートをきつく握り締めた。

「そのことだけじゃない。宝はわたしに何も教えてくれない。彼はわたしのことをたやすく調べてしまうのに、自分のことは隠しているんです。……気持ちが悪いわ」

吐き捨てるように言って、口を閉ざす。自分に嫌気がさした。これではほとんど八つ当たりだ。二人に言ってもどうしようもないことなのに。

案の定、二人はいささか困った顔をした。

「そないなこと言っても、なあ」

「ええ、……実は私達もついさっき、サンの素性を調べようとしたんですよ」

「え？」

わたしは腰を浮かす。オリゾンがワローレッドのノートを勝手に開いて、膝に載せた。

「大体貴女と同じ気持ちで。向こうはこちらのことを熟知しているのに、こちらは知らないとなると不愉快でしょう。……いえ、仕方のないことだと分かっているんですけど。……ああ、このページを見てください」

手招きされて、わたしは彼女の隣に座り、画面を覗き込む。そこには細かい字でびっしり人名が並んでいた。五十音順に並んでおり、家庭単位でまとまっているようだ。

「これ、住所氏名年齢電話番号生年月日家族構成学歴その他諸々の情報がつぶさに書かれたページなんですけどね。あ、もちろん違法ですよ。……で、ここにサンの名前があるでしょう。クリックしてみても……ほら、アクセスできない」

「宝」というひとかたまりの家庭の「優陽」という文字列にカーソルが合わせられるが、何度クリックしてみても、画面の中央に赤い×印とアクセスできないという趣旨の英文が書かれた小ウインドウが現れるだけだった。わたしは思わず舌打ちをする。期待が膨らむ間もなかった。

「他の手も色々試してみましたが、全部駄目でした。周到なことですな、余程自分のことを知られたくないのか……」

事の始めにまだ全く信用できない人間にメールを送ったのだ、そのくらい周到でもおかしくはない。先生などにも知られたくないこ

とはあるだろう。理屈は分かるが、そのお陰で今現在わたしは大変頭に血が上っている。

「もーこいつああれやな、やっぱ本人に訊くしかないんちゃう」

ワローレッドが何も考えてなさそうにそんなことを言った。直接、それがすんなりできたらわたしはこうもあなたを睨みつけはしないのだ！——わたしは乱暴に脚を組み、そこに頬杖をつく。もう一方の手で太腿のスカートをガリガリ引っ掻いていると、ワローレッドはおびえた様子で再びオリゾンの陰に隠れた。オリゾンは甚だあきれた目で彼を見やり、わたしには微笑を向けやんわりとした口調で言う。

「まだ望みが消えたわけではありませんよ。別に本人に訊かなくても、サンと親しかった人間から調べていけばいいのではないでしようか」

「あいつと親しかった人なんて……」

いただろうか。彼は学校で、誰かと親しげに話していただろうか？——いや、話していたところで、わたしの知らない情報を無関係の人間に漏らすはずがない。まして、血筋だの生まれだのという話など。

「……」

スカートを引っ掻く指を止める。

血筋？生まれ？

頬杖をしていた手を離し、額に当てた。——思いつきそうなのだ、何か。

親しかった人？

彼の最も身近にいた。

親しかった。

親、しかった。

「……オリゾンさん」

「はい？」

「ありがとうございます」

「はあ」

わたしは勢いよく脚を解き立ち上がる。そうだ。その手があった。オリゾンの言ったとおり、まだ望みは消えていなかったのだ。問題は、彼らが応じてくれるかどうか。

「オリゾンさん、感謝ついでに二つほど頼まれてくれませんか」

「何でしょう」

「電話を貸して欲しいんです。わたしの鞆、捕まったときに取られてしまつて。ノートも一緒に」

「ああ、それでしたら」

彼女も立ち上がり、少し離れたテーブルに置いてある自分の鞆を開けた。わたし達の通学鞆より二周りも大きいそれは、ジェットに積んであつたらしい。地下道で遭遇したときは持っていなかった。

そして大きなその口から、わたしの鞆の紐が覗いていた。

「助けに行つたとき、ついでに取り返しておきました。どうぞ」

何とも気の利く人だ！自分が男であつたら是非嫁にもraitたい。引つ張り出して差し出されたわたしの鞆は、とられたときと同じ重さをしていた。わたしは礼を言いつつ、今まで隠していたのかと尋ねる。すると彼女は、「すみません忘れていました」と笑顔で答えた。

「もう一つ借りたいものがあるんですが」

「貸せるものなら何でも貸しましょう。どうぞおっしゃってください」

わたしはその物の名を告げた。ワローレッドは口に何も含んでいないのに盛大に吹き出して、「嬢ちゃんが持つようなもんやないでえ」と苦笑する。オリゾンも最初は渋い顔をしていたが、結局は妥協して、わずかに顔を曇らせて頷いた。

「……ま、いいでしょう。二つありますから」

「すみません。……恩に着ます」

オリゾンの鞆から出されたそれは、予想以上の重量感があった。片手で構えてみると手首が曲がつてしまい、果たして自分にこれが

扱えるのだろうかと心配になる。しかしとりあえずは持っているだけで構わない。はったりを噛ませられれば十分だ。できれば使いたくもないのだし。

「どちらへお出かけになるつもりですか」

自分の鞆にそれをしまっていると、オリゾンが平坦な声で尋ねてきた。ワローレッドも留守を言いつけられた子供のような目でわたしを見つめている。わたしはぎこちない笑みを浮かべて、通学鞆を肩に掛けた。

「聞きに行くんです。親しかった人のところに」

二人は悪い予感が当たったときの顔をしてため息をついた。

20：面会

平生、防太陽光人工皮膚の内側は、朝昼夜と一定した気温を保っていた。人が活動するのに最も適した温度。北も南もない。わたし達は太陽の存在を知ってこそいるが、その光を見たことはなかった。もし直接それが地上に降り注げば、わたし達は焼け焦げて死んでしまう。

しかしたった今現在、体感温度は不快なまでに高かった。服に包まれた部位はもちろんのこと、露わになった脚でさえも、まわりつく湿気に汗がにじむ。心なしか呼吸もいつもより辛かった。仕方のないことか——それらは全て、世界各国から供給される電力によって調整されていた。空が暗くなるのと同じ原理だ。

夜の道路に人影はまばらだった。いつもより多いのか少ないのか、わたしには分からない。ただ、人々は皆うつむいて——戦々競々とも言うおうか、凍りついた表情で早足に去っていった。わたしは一階の道路、つまり本当の地上を、一人で歩いていく。目的地はもう目の前だ。

わたしを囲むかのようにそびえる高いビルの群れ。どの階にも、どの窓にも煌々とした明かりが灯り、しかしそれは虚勢に見えた。いつ消されるか分からない、だから今のうちに目一杯光ってみせよう、そんな虚勢。それでもこの地上には、その光の届かない場所が必ずある。

頭の中で地図を描きながらビルとビルの間を早足に進む。次第に六人、五人、三人と路上の人影が消えていき、ほとんど明かりが届かなくなった頃、とうとうわたし一人になった。

これでいい。わたしは携帯ライトを弱めに点けて、自分の足下からその先の道路を少しずつ照らしていった。

そして——見つけた。人知れず地面に取り付けられたドアを。マンホールの蓋によく似せてあるから、一目見ただけではドアと

は分かるまい。しかしわたしは周囲を確認した後迷わず取っ手を握り、力一杯持ち上げた。生ぬるい鉄の感触。案外軽く開いたその奥に、細長い闇が続いている。口にたまった唾液を呑み込み、もう一度周囲を確認し、素早くその穴に足を入れる。内側に付けられた梯子を数段下りて、頭が地上に出なくなったところで、腕を伸ばして蓋を閉めた。外の音が遮断され、自分の呼吸音が筒の中でこだまする。

冷たい金属の梯子を、一段一段慎重に下りていく。三メートルも下がったところだろうか、細い金属の感触が終わり、安定した地面に足がついた。後ろを向くと短い道があり、天井には等間隔に蛍光灯まで設置されている。地面は土だがそこそこなだらかで、人が何度も通った形跡があった。わたしは鞆の紐をきつく握り締め、宝に与えられた靴でその道を歩み出す。奥を睨めば、薄明るい光に照らし出された、厳めしい金属の扉。

——あの中に。

わたしは口を真一文字に引き結んだ。扉の横に、ゼロから九までの数字が並んだ装置が設置されている。人差し指で一つ一つ正確に電話で教えられたとおりの番号を押していく。完全に暗記した、八桁のキー。2、1、4、2、1、2、2、4。確定ボタンを押すと、ブーツと高い電子音が響き扉が左右に分かれて開いた。

「……どうも」

固い声で挨拶しても、中にいる二人の人物はぴくりとも動かない。

中年の男女。二人とも痩身で、男は背が高く、女はわたしより低かった。石像のような顔に細かな皺を刻み、瞬きもせず冷ややかな目でわたしを見据えている。わたしは心持ち背筋を伸ばし、一語一語をはつきりと発音して続ける。

「交渉に応じてくださりありがとうございます。……宝ご夫妻」

二人は黙っていた。

わたしは小さくため息を吐き、そしてそれを隠そうともせず、部

屋に足を踏み入れる。背後で厳かな音を立てて扉が閉まった。重々しく錠の落ちる音がこもり、足下に沈んでいく。

部屋は教室の半分程度の広さで、四方が金属の壁に囲われていた。そのせいか体感温度が地上より大分低い。奥の壁に、わたしの身長より少し低い、直方体のスーパーコンピューターが二台設置されていた。しかし壁に密着してはならず、一人がぎりぎり入るくらいの隙間が空いている。黒いボディとその形が、宝の部屋にあった古いパソコンを思わせた。左手の壁には机が二台並んでおり、ノートが三台とケースに入ったCDが数枚散らばっている。あいた床にはさび付いたパイプ椅子が三脚無造作に置かれ、空間は全体的に雑然としていた。蛍光灯はそこそこの明るさを放っており、その下で夫妻の顔が青白く光っている。

「初めまして。森崎瞳です。ご子息のクラスメートで、今……」

「前置きはいいい」

地を裂くような低い声を、宝氏が響かせた。わたしが口をつぐむと、彼はその場から一步も動かずに細い目を光らせる。

「……本題に入ろう。あの子の居場所を教えてもらおうか」

あの子。——名前も呼ばない、か。

わたしは顎を引いて彼を睨め付ける。皮膚は冷えているというのに、鞆の紐を握る手が、汗で湿っていた。

「……随分と焦ってらっしゃいますね」

彼は忌々しげにわたしを睨み返したが、何も言わなかった。わたしは湿った掌を悟られないよう、わざと挑発的に顎をしゃくる。

「でもまあ仕方ないか。息子が何をしでかしたか知っているからこそ、ですものね」

「……」

二人はひどく顔をしかめる。わたしも彼らも、その場から一步も動かなかった。動くつもりもない。動いたらきつと、わたしは彼らに心境を見抜かれてしまう。

「……電話でもお話ししたとおり、わたしは今まで、彼のパートナ

「——としてともに行動してきました。……でもきつともう戻れない。彼のことを知りたいがために彼の居場所を売ってしまうような人間、もう受け入れてはもらえないでしょう」

「……つまり、君はあの子を裏切った、ということか？」

彼の低い声に、胴体に詰まった臓器という臓器が締め付けられる。

——裏切り、か。

「……。そういうことに、なるのかもしれませんが」

わたしは自嘲気味に笑った。

「だけどわたしは……我慢できなかった。彼はわたしに何も言ってくれない。何も教えてくれない。これ以上謎をため込んだまま、一緒に行動することなんてできなかった。だから」

「あの子の居場所を教える代わりに、あの子のことを教える……と」

「……そういうことです」

深く、視線を逸らさずに頷く。夫妻は瞬き一つせず、眉間に皺を寄せてわたしを見据えていた。

外道、とはこういうことを言うのだろうか？

恐らくわたしの行動は、義理だの人情だの、この国に古くから伝わる心意気に大きく反している。仲間を裏切る、というのは、歴史でも物語でも最も嫌われる行為だ。しかしだからどうというわけでもない。むしろわたしは宝を、正確には彼の力を、信頼しているのだ。居場所を漏らしても、彼なら切り抜けられると信じているからだからこそその行動だ、と——こんな風に言っても言い訳にしかないだろう。だけど嘘ではないのだ。

「だが我々は君のことを信用していない」

彼はあくまで突き放すような口調で言う。平生の宝とは正反対の表情。わたしももう一度頷いて、抑揚のない声で答える。

「当然です。わたしだってあなた方を信用していない」

「ならば何が言いたいか分かるだろう。……先に居場所を吐け。そうすれば大人しくあの子について教えよう」

「それはできません。居場所を言ってしまうばあなた方はきつと話すどころではなくなるでしょうから」

「曲がりなりにも特待生なら分かるだろう。どちらかが譲らない限り、この話は進まないんだ」

「……では、譲って戴くとうしましょう」

鞆の紐から手を離す。そしてその手で素早くファスナーを開け、鞆の中に突っ込んだ。元々取りやすい位置に入れておいたそれ。硬く冷たい感触に鼓動が早くなる。その重さを腕が拒否しかけるが、強く眉根を寄せて無理矢理に持ち上げた。

——できれば使いたくなかった。

夫妻はその険しい顔を初めて驚異の色に染めて、まっすぐ自分達に向けられた銃口を見つめていた。それからわたしの顔を見て、また銃口に目を向けて、口からは何も発さずに、その場に立ちすくむ。わたしの腕は、遂に他人に凶器を向けてしまったことへの畏怖と、黒光りする拳銃の重みに震えていた。それでも厳しい顔をしてみせて、うなるような低い声を漏らす。

「夫妻。時間がないんです。夜が明ければ彼はまた移動を開始してしまう。それはあなた方にとっても避けたい事態でしょう」

「……」

わたしの声で、夫妻はやっと元の険しい顔に戻った。親の仇でも見るような目で痛いほどわたしを凝視し、唇を嚙んだり、歯ぎしりをしたりしているが、唇から漏らすのは苛立ったようなため息ばかり。——銃。正直、こんな物で彼らを脅し通せるとは思っていない。わたしが扱い慣れていないことは、誰の目にも明らかだろう。これは話が膠着状態に陥ったとき、一度考え直させるための道具ではない。これで彼らが応じてくれれば良し、応じなければ——「応じない」で済んだらまだ良い、もし逆上して銃を奪われたりなどしたら——我が身の安全を確保できる自信はない。

とうとう頬を汗が伝う。顎から首筋を通って、制服の襟に染み込んでいった。掌は汗ばんで銃が滑り落ちそうだ。夫妻はじつとわた

しを睨んでいたが、やがて一度だけ顔を見合わせると、宝氏が苦々しいため息を吐いて言った。

「……何から話せばいい」

そして手近にあったパイプ椅子を引き寄せ、どかりと腰を下ろす。夫人もそれに倣って大人しく座った。わたしは銃口をやや下げながら、安堵から思わず微笑を浮かべた。

「ありがとうございます」

予想外に気の抜けたその声は、無機質な地下室に奇妙に響いた。

21：両親

「……では、まずはあなた方の正体について」

話すと言ったにもかかわらず、彼らはわたしの言葉にあからさまに嫌な顔をした。わたしの微笑もすぐに消え、銃を握る手に力がこもる。

「こんなところに怪しげな部屋を持っているなんて、あなた方がただ者でないことはすぐ分かります。子は親の影響を少なからず受ける……宝優陽という人間を知る上で、あなた方を知ることが不可欠なんです」

「……」

二人は硬い顔で、膝の上に握り拳を作っていた。——率直すぎたか？わたしは自分の頭脳が客観的に見てかなり優れたものであることを知っているが、人との駆け引きに長けているかは分からない。——けれど。

「答えてください」

生まれ。血筋。——これらのことを知るには、彼らに答えてもらうしかないのだ。

二人の目線は手元で固まっている。わたしの視線も、まっすぐ向けられた銃口も、彼らには届いていないかのように。

蛍光灯の光が一瞬弱まり、ふっと部屋が薄暗くなる。そのとき宝氏の手がぐつと強く握られ、固く結ばれた唇がようやく言葉を紡ぎ出した。

「……我々は」

銃口を心持ち下げる。宝氏は視線を固定したまま、唇だけ人形のように動かして続けた。

「アメリカの、ある研究施設から日本に送られてきた特派員だ……」

「……アメリカの？」

テレビで見た、壊されたアメリカの映像が頭に浮かぶ。炎に満たされた道路。落ちていく人。そして続いて、ソレスティア先生の顔が浮かんだ。――アメリカ人であり、アメリカの世界立大学を卒業し、アメリカ大統領直属の調査部隊の隊長を担う、ソレスティア「クリスという女性。――彼女のつらのような眼差しが、頭の中でわたしを貫く。くずのように落ちていく人間を思い出すより、背筋がぞつとした。

「……その研究施設というのは？」

宝氏はわずかに視線を上げ、逡巡した。その仕草に宝の姿がオーバーストップする。彼が先生について話したときも、確か、こんな風だった。やはり親子――とでも言うところだろうか？――夫人は相変わらず沈黙を守っている。

「……家畜のクローンを中心とした、バイオテクノロジーに関する研究施設……」

宝氏がおもむろに口を開く。クローン、その言葉にまた先生の顔が思い描かれた。授業中の、生气に満ちた若々しい目。もう懐かしいとさえ思えてくる。

「……ということになっている。表向きはな」

眉をひそめる。――表裏一体、その言葉通り、表があれば裏があるのは当然のことだ。

「……何を隠しているんですか」

「……」

宝氏は再び視線を落としてしまった。わたしは眉間の皺をさらに深める。なぜこうも、男というのはぐずぐずした生き物なのか――わたしの家には男がいなかったし、学校でも男子と関わる機会はほとんどなかった（別に男女交際が禁止されていたわけではない、わたしが興味を持たなかっただけで）から、実質宝が初めて関わった男ということになる。彼がわたしの中の男性観を決定してしまっただけ同然だった。

わたしが苛立って口を開こうとしたとき、急に宝氏が顔を上げた。

決死の覚悟でもしたかのような、青ざめた顔。

「家畜のクローンはカモフラージュだ。実際はそこまで熱を入れて研究していない。その施設の本当の研究対象は……」

「あなた、やめて」

突然夫人が初めて声を上げ、夫の腕にすがりついた。いったいに見開いた目には涙がたまっていて、今にも奇声を上げて卒倒しそうな、死霊のような表情だ。

「それを言うてはいけないわ！だって約束でしょう、博士との……」

——博士？

訝しむわたしをよそに、宝氏は妻の肩をつかんで土気色の顔でまくし立てた。

「もうそんなことを言っている場合じゃないだろう！止めなきゃならないんだ、あの子を……育てたのは我々だ、最後まで責任を持たなければ……！」

「でも……」

夫人は飛び出しそうな目玉をぎよろつと動かして部屋の奥を見やり、しきりと首を振る。宝氏は彼女の肩を揺すって何とか言い聞かせようとするが、夫人はとうとうその大きな目から涙をこぼし始めた。宝氏は狼狽し、さっきから似たり寄ったりな言葉で夫人を諭そうとする。自分をも諭しているように見えた。

何の前進もない——銃を持って伸ばされた腕が、次第に疲労を訴え出す。夫人の金切り声と、変わり映えのない宝氏の言葉が、右耳と左耳を絶えず往来している。

——いらいらする。

頭の中の血管が膨張して、小さな小さな音を立てて破裂した。

「……」

同時に、タイヤの破裂するような音が耳をつんざく。焦げ臭いにおいが鼻を突き、室内に広がっていく。白いもやの向こうに、夫人が頭を抱えてうずくまり、宝氏がそれをかばうように覆い被さって

いるのが見えた。よく見るとそのもやはわたしの手の先から立ち上っているようであった。そして手には拳銃を握っていた。

腕が痺れている。

「……続けて、」

自分の指が引き金を引いたのか――。そう自覚したのはたった今なのに、わたしの口はやけに冷静に言葉を紡いだ。

「続けてください。これ以上延ばすようなら、次は当てます」

弾は部屋の奥のスーパーコンピュータに当たり、金属に穴を開けた。夫人は恐る恐る顔を上げ、しきりとその方向を見やっている。宝氏は青い顔を真っ白にして、一歩踏み出したわたしを呆然と見上げていた。わたしの突きつける銃から恐れが消えている。

「……本当の研究対象は？」

声も震えることはなかった。わたしは完全に状況を理解し、その上で分裂することもなくやけに冷静に、二人の人間を見下ろしていた。腹の底が沸き返るように熱いのには、その水面は静まり返っている。妙な感覚だ。氷のような熱がある。こんなことは今までなかったのに――。

これがわたしの場合の俗に言う「キレた」状態であると分かったのは、もう少し後になってからだだった。

「……ほ、本当の研究対象は……」

震えているのだから動かしめているのだから分からない宝氏の唇から、聞き取りづらい声が漏れる。夫人がまたすぎるような目を向けるが、彼の口は止まらなかった。

彼の目はただ、目の前の恐怖に染まっている。その後にどんな恐怖が訪れようと、今の彼にそれを考える余裕はないのだ。

舌がもつれるのか、彼は何度か「ひ、ひ」と息とも声ともつかぬようなものを歯の隙間から漏らした。わたしが銃口をわずかに逸らしてやると、彼はようやく呼吸を整え始め、そしてかすれる声でこう言った。

「ヒトクローンだ」

わたしのまぶたが、わたしの意志に関係なく最大限に開かれた。

まただ――またわたしの脳が、ソレスティア先生の授業を再生し始める。つい昨日のことなのに、まるで一年以上前の話のように思える。教壇からわたし達を見回す先生の微笑。教卓の上のノートパソコン。生徒との応酬。高らかな声。

――ヒトクローンの問題点は？

――いよいよ世界的に禁止され――。

――実際、ヒトクローンを作りたがっている科学者は多い。

――もう作ってるかもしれんぞ。

「――……だつて」

やっとわたしの声が出る。急に調子が弱まったせいか、夫妻の顔色からわずかに恐怖の色が薄れた。

「ヒトクローンは、禁止されて……」

「だ、だから表向きは家畜なんだ。……実際はヒトクローンの研究はかなり進められていて……ごく一部の研究員しか知らないことだが、十年以上前に成功例も出ている」

「……嘘」

重くなった頭を振る。――頬杖をつきながら聞いていた、先生の話は本当だったのだ。約三十年前に生まれた、アデレード・ライト氏のクローン。あれが最後の成功例ではなかった――。

「その成功例を生み出したのが、我々の上司でもあるアメリカ人の夫婦だ……。夫の名をキーツ・クリス、妻の名をシンシア・クリス

……」

「……クリス？」

とても、聞き覚えのある姓。

わたしの心中を知ってか知らずか、宝氏は頷く。

「ああ……そして彼らが……」

夫人がいたたまれないとばかりに目を覆う。宝氏は血の気の失せた唇を震わせて、一度部屋の奥、スーパーコンピュータを見やる。何かを訴えるような目で――。

しかしそこには何の変化もなく、彼は意を決したように、半ば諦めたように再びわたしに顔を向け、低い声で言った。
「宝優陽の生みの親だ」

22：暴走

ある程度、予想していたことではあった。

だってこの夫婦と宝優陽には、外見に少しも似通った部分がない。夫婦の髪は白髪以外はわたしと同じくらい真っ黒で、瞳の色はつきりとは見えないが、色素が薄いようにも思えない。少し悪い言い方になるが顔立ちだって、この二人からあの端整な顔が生まれてくるとは考えにくかった。大体二人が純日本人という容姿であるのに対し、宝優陽は別の血が混じっているように見えたり。

この夫婦と宝優陽は、血縁上何の関係もない――。

「……アメリカ人だったんですか」

第一声はそんな言葉だった。もっと大変なことを訊かれると思ったのか、夫妻はやや気の抜けたような、肩すかしを食らったような顔をする。

「彼は」

わたしは自嘲気味に口元をゆがめ、笑った。くだらないことだ。もっと他に訊くべきことがあるだろうに、小さな口からこぼれたのはそんな単純で素朴な驚きだった。

「あ、ああ……」

宝氏は頷いて、パイプ椅子に腰掛け直した。夫人も腕を引かれ、弱々しく座り直す。彼女は再び膝の上に拳を作り、それを見つめて沈黙した。

「……だがキーツ博士は日本人の血をかなり色濃く受け継いだ人だったから、あの子もどちらかというと日本人に近いはずだ。だから今まで君も気付かなかったんだろう？」

「……そうですね」

日本人の名で日本人として紹介されてしまえば、どこか別の血が混じった日本人として受け入れられる。彼はそんな容貌だ。

そうなると、彼の母親も日本人の血が濃かったということになる

うか？

——いや。

そもそも彼に母親はいるのだろうか？

「……詳しく、教えてください」

宝優陽の生みの親は、ヒトクローンの研究施設で成功例を生み出した人物。

——ではもしも、もしも宝優陽という存在が、その成功例であるとしたら？

宝氏は既に平静を取り戻し、それでもどこか心苦しそうに顔をゆがめて、膝の上で手を組んだ。わたしの目には見えないフィルムを眺めるかのように、遠い過去を回顧する。

「……宝優陽という存在がこの世に誕生した十五年前、クリスマス博士夫婦には既に十歳になる娘がいた」

娘。つまり宝優陽の姉に当たるか。

「娘は賢い子供で、自分の親が何の研究をしているのかその歳で熟知していた……。そんな子だったからこそ、博士夫婦は新しく生まれたあの子が彼女に悪影響を与えることを恐れ、引き離れた。あの子を自分達の子でないとし、部下の研究員であつた我々夫婦の養子にしたんだ」

「……悪影響？」

賢いからこそ受けてしまう影響。親の研究内容を熟知し、その上で宝優陽から受ける悪影響。

「倫理上の問題」——もしそれを、その娘が理解していたとしたら？

額を押さえる。頭が刃物で滅多刺しにされたように痛んだ。——それじゃまるで、宝が本当にヒトクローンの「成功例」みたいじゃないか！

では——では、ひとまずそれは置いておきましょう。先ほどから一つ気になっていることがあつた。

宝の生みの親であるという博士夫婦。

その、「クリス」という姓。

「……その娘というのは……」

宝優陽が生まれたのは十五年前、その時点で十歳、つまり彼より十年上。現在生きていれば二十五歳になる。

わたしの記憶が正しければ、ソレスティア「クリスは現在二十五歳のはずだ。

「……まさか」

宝氏は暗い視線を床に落とした。夫人は固く唇を引き結んで、開く気もなさそうだ。

生徒の親は担任の顔くらい把握している。二人がソレスティア先生のことを知らないわけがない。

もし、二人と先生が宝の知らないところで繋がっているとしたら、それは――。

「……それは」

宝氏が唇をかすかに動かす。わたしは銃を握る手に力を込める。撃つためじゃない。そうでもしないと滑り落ちてしまいそうだからだ。

しかし宝氏は、また視線を泳がせた。この期に及んで、まだ言うのをためらっているようだ。わたしはわざと銃を動かしてみせるが、泳いだ目はわたしに見向きもせず、部屋の奥まで行って止まった。

腹立たしい沈黙が空気を沈める。

「……」

わたしは顔をしかめて、催促のために口を開こうとした。これ以上時間を無駄にはできない。わたしがホテルを出て既に二時間――宝は確かに眠っていたようだが、いつ目覚めるかも分からないのだ。

しかし、喉まで言葉がでかかったそのとき、沈黙を破ったのは電話の音だった。

ぴぴぴぴぴぴと一定の音程の電子音が延々と鳴る着信音。わたしの最も嫌いな音だ。

「……失礼」

言ったのは宝氏だった。上着の胸ポケットから音源である携帯電話を取り出すと、耳障りな音が一際大きくなる。彼はその音を止めてから携帯を耳に当て、小さく咳払いをして慇懃に応答した。

「私です。……ええ、今………え？」

一言二言会話して、彼の顔面が蒼白になる。夫人が心配そうに彼を見上げるが、彼は彼女に目もくれず声を張った。

「そんな馬鹿な……いくら何でも急すぎます！」

「あなたどうしたの？」

耐えかねた夫人が、不安げに囁く。宝氏はいったん携帯を耳から離し、絶望の色に染まった目を彼女に向けて悲痛な声で呟いた。

「日本各地の刑務所が……開かれ始めた……」

「え……？」

声を上げたのはわたしだ。夫人はすぐみ上がりながら手で顔を覆って、椅子の上に泣き崩れた。

刑務所が開いた——それはつまり、日本の破壊が始まったということ。

顎が痛むほど強く歯がみする。見たことか、だから時間がないと言ったのに——今日破壊するなんて聞いていなかったが、これは間違いなく宝の仕業だ。日本は彼自身が壊すと言っていたし、オリゾン達は恐らく日本の壊し方を知らないだろう。

「……分かりました、とにかくあの子に会いに行きます。ええ、できれば電気を落とされる前に……。では」

宝氏は早急に電話を切った。そして世界の終わりを見たかのような目で手の中の携帯を見つめ、最初とは比べものにならないほど弱々しい声で呟く。

「……ああ、なんてことだ、だから先に居場所を聞くべきだったのに……」

独り言のようでもあったが、わたしに向けたようでもあった。瞬間、わたしは妙に嫌な予感がしてとっさに身構えたが、それとほぼ

同時に、彼は鉄砲玉のような勢いでわたしに飛びかかってきた。大きな骨張った手で制服の襟をつかみ、目玉がこぼれ落ちそうなほど目を見開いて、多量の唾を吐き散らしながら食いかかってくる。

「お前！早く教える、あの子はどこにいる！？」

「っ……離してください」

銃をちらつかせてみても、彼は全くひるむ様子がない。見えていないのだ。顔の青白さと表情が相まって、ゾンビのように見えた。喉が締め付けられて息が詰まる。

「教える！さあ！早く！あの子の居場所を！！」

夫人は頭を抱えてうずくまるだけだ。取り巻く現実には耳を塞ぎ、全てから自分を分離させようとしている。

「教えないと——」
ばん。

生ぬるい液体が頬に飛び散って、呼吸が急に楽になった。

「……あなた？」

蚊の鳴くような夫人の声がある。

崩れ落ちる宝氏の身体を前に、わたしは真つ先に自分の右手を確認した。相変わらず拳銃が握られている。しかしその口から煙は立ち上っていない。腕に痺れもない。

それなのに宝氏は今、後頭部に小さな風穴を開けて床に倒れている。

「……あなた、あなた！」

夫人が椅子を蹴って、彼の身体のおそばに膝をついた。折れそうな指でうつぶせになった彼の頭を持ち上げる。額の中心から血とどろりとした液体が水のように垂れ流れ、わたしの足下に広がっていった。少し考えて、脳漿だと分かった。

夫人のクリーム色のスカートに、赤が染み込んでいく。彼女は落ち窪んだ目を見開いて、その手を血に染めながら、狂ったように繰り返した。

「あなた、あなた、あなた、あなた、あなた、あなた、あなた、あ
なた、あな」

悲痛な叫びはぱたりとやみ、夫人の身体も宝氏に被さるようになつて崩れ落ちた。

確認するまでもない。そう分かつていながらも、呟きをとどめることはできなかった。夫人の頭の宝氏と同じ位置に、同じ大きさの風穴が開いている。血と脳漿の量が二倍になった。

——間違いない、撃つたのはわたしじゃない。
では誰が。

—の、はずだった。

不意に気だるげな声がした。わたしはとっさに、その方向に銃を構える。部屋の奥。壁際の、しかし壁に密着してはいないスーパーコンピューター、その陰から――。

何事もなかったかのように現れた、懐かしい顔。

セロファンを張ったような透明さ。規則的に並ぶ木々に囲われた公園。飛んできた小石。目の前に立った男の子――。

あのときより少しだけ背の伸びたナオが、白い煙の立ち上る銃口をこちらに向けて、そこに立っていた。

23：対峙

わたしは動けなくなった。構えた銃はきつと意味を為さないだろう。彼は六年前と変わらぬ顔で、大きく舌打ちをする。

「これだから嫌だったんだよ。できれば出ないで済ませたかったんだけどな……そのバカ夫婦が、好き放題やった挙げ句暴走し始めやがったから……」

目の前に転がる、二つの身体。的確に急所を撃ち抜かれて、もう二度と動くことはないだろう。

しかしそれらを前にしても、わたしの頭はとても個人的な感情に支配されていた。

「ナオ、やっぱりあなた……」

闇の地下道でわたしを捕らえた男。身長、声、くせつ毛、間違いない。あの男とこの少年は同一人物で――幼き日に出会った男の子とこの少年は同一人物だ。

感慨、とも言えぬ妙な感覚だった。そもそもわたしは、今日という今日まで彼の存在を忘れていたのだ。唐突にわたしの向かう方向を決めつけることを言った男の子。本来なら腹を立てるようなことを言った男の子。わたしの「膜」を最初に破った男の子――。

しかし彼は心底うざったそうに顔をしかめると、吐き捨てるように言った。

「言つとくけど俺はお前のことなんか知らねーからな」

「……え？」

「確かに俺は皆からナオって呼ばれてる。ねーさんもそう呼んでるし、それは間違いない。けど俺はお前のことなんて知らない、これも間違いない。ここへはねーさんに言われて仕事で来ただけだ」

「そんな……」

人違い？いいや、そんなはずはない。一度思い出した以上、わたしの記憶に間違いなど有り得ない。

——ナオが忘れている？

その可能性は高い。彼の頭脳がいかほどのものかは知らないが、一般人レベルなら、六年前に一度だけ通り道で言葉を交わした人間など忘れてしまってもおかしくないだろう。

それならば。

「……、あなた、最初からずっとそこにいたの？」

ここで躍起になって思い出させるのは、得策とは言えない。

刑務所は開かれた。「破壊」は既に始まっている。電気が落とされる前にここから出なければ、自動扉が動かなくなつて閉じ込められてしまう。

彼がわたしに銃を向けた以上、迂闊には動けない。何とかして隙を作らなくては。

彼は唇の端を持ち上げて冷たく笑った。

「そうだ。お前が来る前からずっと、その陰に隠れてた。気付かなかっただろ？」

「……ええ」

宝夫妻がしきりと部屋の奥を気にしていたのは、彼の存在を知っていたからか。

「お前がこいつらに連絡取ってきたつて報告受けたから、ねーさんが俺を潜ませた上で交渉に応じろつて命じたんだ。『いざというときの防衛のため』つてな……本当はこいつらがいらんことしゃべらねーように監視するためだったんだけど」

「……だったら最初から応じさせなければ良かったじゃない」

つくづく訳の分からない人だ。呼び出しておいて「情報は与えない」？——勝手と言えば、勝手だ。

彼は肩をすくめて、銃を構えたままゆっくりとわたしに向かって歩き出した。

「知らねーよ。ねーさんの考えることなんざ部下の俺らでも分かるねー。あの人は肝心なことだけいつも教えてくれねーからな」

「……っそれ以上近づかないで！撃つわよ！」

銃を両手で握り締め、まっすぐ彼に向ける。ぶれる銃口の先、不敵な笑みが少しずつ少しずつ迫ってくる。

「できるのかよ？人を殺したこともないくせに」

足がすくんで後ずさりさえできない。これっぽっちも焦燥感を感じさせぬ、わたしへの同情すら感じさせる笑み。彼の左手が真正面から伸びて、わたしの向けた銃口を握る。

「かわいそーに。手が震えてるぜ」

今引き金を引けば、間違いなく彼の心臓を貫けるのに。わたしの指は震え以外の動作をできなかった。

わたしのその指から銃を奪い取り、彼は床に捨てた。凹凸のある地面に落ちたそれは重々しい音を立て、一回転してゆるりと止まる。彼はゆっくり、至極ゆっくりとさらに歩みを進め、わたしの背後に立った。そしてわたしの首に左腕を回し右肩をつかんで抱きすくめ——こめかみに銃口を押し当てた。

「ねーさんの命令にはなかったけどさ——」

耳元で悪魔の囁きが聞こえる。

「俺個人の意見としては、お前をここで殺しちゃってもいいんだよね」

頭にぶつかる硬く冷たい感触。背筋を氷水が伝ったような気がした。

彼の声には迷いもはったりもない。

わたしは目をむいて、ただ床に転がった自分の拳銃を見つめていた。——無力だ。振り払えばとりあえずこの状況からは逃れられるかもしれない。だが部屋は狭い。足場も悪い。扉はナオの向こう側だし、恐らく近づいただけでは開かない。——ナオからは逃れられない。

「な。どーする？」

嗤っている。彼は嗤っているのだ。

それなのにわたしは、動くこともしゃべることもできない——。全身から冷たい汗が噴き出す。先生が宝の家に来たときより、オ

リゾンに追いかけられたときより、最初にナオにつかまったときより、わたしは死の気配を強く感じていた。そして今、あきれるほどそれにおののいているのだ。

殺されるか。――わたしはあきらめと恐怖に固く目をつぶり、全身をこわばらせた。

しかし耳元で銃声がすることはなく、代わりにナオの舌打ちが耳に入ってきた。わたしは恐る恐る、少しずつまぶたを開く。相変わらず銃を突きつけたままだったが、彼は顔だけ億劫そうに扉の方に向けた。

「ちつ。客かよ」

「……え？」

思わず漏れた声はほとんど息と同じ大きさだっただろう。動くことはできなかつたが、耳を澄ませてみると、扉の向こうで誰かが口ツクナンバーを入力している音がした。――誰が？こんな部屋を知っているなんて、宝夫妻の同業者か――いや、同業者にしてもこんな夜中に訪れるなんて考えにくい。そもそも夫妻（先生か？）がこの場所を選んだのは、邪魔者が入らないようにであろうし――。

ナンバーが認識された電子音が、扉一枚隔てて聞こえてくる。待つ者の気持ちも知らずのんびりと開く扉。もどかしげに駆け込んでくる足音を聴いて、ああ、少しは効果があったのかなと何となく思う。

わたしの履いているスニーカー。

「瞳！」

焦燥のにじんだ聞き慣れた声。姿は見えないけれどはつきりと分かる。

ナオがへつと嫌みつたらしく笑い、わたしの身体を抱えたまま無理矢理方向転換した。

「こいつはどーも。宝優陽くん」

なんの変哲もない長袖のシャツに動きやすそうなズボン。相変わらず似合わぬ眼鏡。閉まる扉を背に、宝が大きく肩を上下させてこ

ちらに銃を向けていた。頬を汗が伝う。

彼は眼鏡の奥できつく光る目をナオに向け、両手で強く拳銃を握り締めていた。

「……手を離せ。でないと」

「でないと撃つ、か？ できねーくせに」

わたしに言ったときと同じ、嘲るような口調。宝が一層険しい顔になるが、ナオは鼻を鳴らして続けた。

「お前ら口ばかりだ。この女は今まで危険な目にも遭わずぬくぬく育ってきた甘ちゃんだし、お前に至っては、本当に殺したい奴を直接殺せねーからこんな回りくどいことやってる腰抜けじゃねーか」

「……！！」

宝の眉間の皺がこれ以上ないほどに深くなる。そしてわたしがそれを認めた矢先、向けられた銃口が火を噴いた。

「やつ」

「うおっと」

弾丸は丁度、ナオの左肩の位置に飛んできた。と言ってもナオとわたしの身長は大差ないので、命中していたらまずわたしの方がやられていただろう。幸いナオがわたしごとかわしてくれたから、弾は奥のスーパーコンピューターに当たって落ちた。冗談抜きで死ぬかと思った——わたしは怒り任せに怒鳴りつける。

「ちよっと宝、いきなり——」

「へえ、腰抜けにしてはなかなか……」

ナオが楽しそうに呟いて、わたしの首から腕をはずした。そして今度は邪魔だと言わんばかりに端へ押しやって、宝に向かって一歩歩み寄る。

「度胸あるじゃねえか。……なあ！」

彼は突然拳銃を振り上げて、宝に殴りかかった。宝は頭を後ろに逸らしてかわし、自身の拳銃で同じように反撃する。ナオは少ない動きでそれをかわすと同時に、右の踵で宝の脇腹に回し蹴りをした。

避けきれないと悟ったのか、宝は腕でそれを防いだが、肘の辺りにまともに食らったようだ。顔をゆがめてそこを押さえつつ、飛び退いてナオから距離をとる。

誰がどう見ても、押されている。

「宝！やめなさい不利よ！」

何から来るものなのか知らないが、今の彼は抑えきれない怒りに支配されている。冷静さを欠いた彼など常人並、いや、それ以下の強さだ。

しかし彼はわたしの声など届いていないかのように、再び反撃を開始した。ナオは彼の拳を軽く受け流し、襟首をつかんで壁に叩きつける。宝は背中をしたたかに打って小さく呻いたが、間髪入れず銃を構えた。

思わず息を呑む。——今度こそ狙う気だ。

「宝、やめてつたら！」

宝もナオもその場から動かない。宝は普段の飄々とした態度を微塵も感じさせぬ切羽詰まった顔で、ナオは余裕たっぷりの侮るような笑みで。

宝の人差し指に、ぐつと力がこもる。

「宝！……宝、」

止めなきやならない。ここでナオが殺されるとは思わない、むしろ危ないのは宝の方だ。弾を放った後、必ず隙ができる。——そこを突かれては一たまりもない！

怒りに昂った宝の目はわたしを見てはいない。引き金がわずかに動く。

わたしは両手をきつく握り締めて、悲鳴のように叫んだ。

「優陽！」

彼の身体がびくつと震え、拳銃が床に落ちた。

銃声の代わりに、重たい塊の落下した鈍い音が室内に響く。銃はくるりと一回転し、やがてゆっくりと死んでいくように止まった。

宝は銃のなくなった両手を静かに降ろし、やけに驚いたような顔

でわたしを見た。

「……瞳？」

わたしは深く頷いてみせる。そして、宝の正面に立ったままのナオに鋭い視線を向けた。彼は心底つまらなそうに頭の後ろで手を組んで、唇をとがらせる。

「ちえつ。つまんねーの。……まあいーや、今回はお前らを殺しに来たわけじゃねーし。……これ」

言って、ズボンのポケットから一枚の紙を取り出した。紙——いや、封筒、か？随分と薄っぺらい。彼はそれを宝に向かって差し出した。

「ねーさんから。もしお前が日本壊ししたら渡せって言われてよ……まだ電気落としてないけど、どーせこれからやるんだろ？」

ねーさん、という言葉に、宝がぴくりと眉を寄せる。手紙を受け取るうとしなかったので、ナオが苛立たしげに彼の胸にそれを押しつけた。宝は反射的に受け取って、すぐに受け取らなきゃよかったという顔をして、それからうつむく。

「これで俺の用事済んだから。手紙ちゃんと読めよ。じゃ」

「……、待てっ！」

宝がとつさに顔を上げて叫ぶが、ナオは叩くように扉の開閉ボタンを押して、わずかに開いた隙間から身軽に出てしまった。去り際一度もこちらを振り返らず、脱兎のごとく走っていく。

宝はドアまで追いかけたが、通路に彼の姿が見えなかったのか、そこで追うのをやめた。

「くそっ……」

閉まっていく扉の前に、力無くしゃがみ込む。か細い指を繊細な髪に突っ込んで、頭皮に爪を食い込ませた。まるで自分を罰するかのよう。

「くそっ……くそっ……」

嗚咽のような呟きが、部屋の底に沈んでいく。床には拳銃が二丁と、死体が二体と、見える範囲で弾丸が二個、転がっていた。

24：告白

蛍光灯の光が一瞬だけ弱まる。部屋の空気は微動だにせず、重く沈んだままだった。血の臭いがその上に充満している。パイプ椅子の転がった、雑然とした部屋。全ての機械類は沈黙している。

わたしは静かに地面を歩き、膝を抱えてうなだれた宝の傍にしゃがんだ。扉は固く閉ざされていて、もう誰も入ってくる気配はない。

「……優陽、怪我は……」

「うるさい」

顔も上げずに一蹴される。何を考えているのかは分からないが、完全にわたしの存在をシャットアウトしているようだ。頭が内側からの熱で熱くなる。

「……あなたがそんなだから、わたし、こんなところにいるんじゃない」

こぼれた呟きに、彼はようやくわずかばかり顔を上げた。眼鏡がずり落ちている。

「あなたがそんなだから、自分で調べるしかなかったんじゃない……」

勘当される覚悟だった。それでもわずかな望みを託して、このスニーカーを履いてきたのだ。

「どうして何も言ってくれないのよ。どうして何でも自己完結しようとするのよ……。パートナーなんて名前ばかりで、わたしはあなたのことも知らないわ」

予想外に悲痛な声が自分の口から吐き出され、自分自身が嫌になる。全くなぜこんなにも必死なのだろうか、馬鹿馬鹿しい——他人は他人であって、決して自分ではないのだ。自分の命に関わるようなこと、それさえ知っていれば、それ以上他人のことを知る必要などないのに。

宝優陽の素性など、恐らくこの先死ぬまで知る必要はないだろう。わたしは最期に彼を殺すただけににいるのだから。

「……君は」

宝が小さな声を漏らす。おもむろにわたしの顔を見上げて、弱々しく、無理矢理に笑みを作った。

「無関心な人間だと、思っていた……」

無関心。——彼はこの言葉を多用する。そのたびに今のわたしが否定されているようで、胸が痛んだ。

「だって誰もわたしに近づこうとしなかったんだもの」

親も、教師も、同級生も、道行く人さえも。皆わたしを敬遠して、自分達との間に線引きして、決して近づこうとはしなかった。ソレスティア先生は付かず離れずの距離を保ち、ナオはいきなり近づいたと思っただけに見えないところまで離れていつてしまった。

宝優陽。初めてまともに言葉を交わしてから、まだ三日ばかりしか経っていないが、彼は——。

「……十五年の人生の中で一番近くまで来た人に、関心を持つのは当然でしょう」

わたしが地のままでしゃべり、思ったことを包み隠さずに言い、感情を真正面からぶつけた、初めての人間なのだ。

彼はわたしの言葉を聞くと、ゆっくりと、少しずつ目を見開いていった。彼の顔を覆っていた仮面が少しずつ剥がれていくように。子供のようにな、至極素直に、その眉が、頬が、目が、純粋な驚きを表している。弱っている今だからこそ見られた顔なのかもしれない。纏うものが何もない、地のままの心。

わたしは伏し目がちに、ドアに背をもたれて宝の隣に座った。彼は丸い目でじっとわたしの横顔を見つめている。わたしはわざと気付かない振りをして、かたくなに目をそらして黙り込んでいた。何も言いたくないのではない。言いたいことは沢山ある。だけどその前に、彼に口を開いて欲しいのだ。

やがて彼は目を戻し、ちょっとだけうつむいた。心細げにぎゅっ

と自分の両腕を握り、それから、ぽつりと呟く。

「ごめん」

もう突き放すような響きはない。いつもみたいに何かを被せたような調子でもない。心の底から思わずあふれたような、素直な声。内心わたしは安堵していた。これで一方向の関係ではなくなっただと感じたのだ。彼がわたしの「膜」を破ったのと同じように、わたしも彼の「膜」を破ることができた。わたしは確実に、彼に近づけたのだ。

「いいの。……ただ忘れないで」

わたしの言葉に、彼はこくりと頷いた。そして改めて顔を上げて、少しか表情を曇らせた。

扉の位置からは部屋が一望できる。つまり、嫌でも宝夫妻の死体が目に入るのだ。血の臭いは既に鼻に馴染んでしまったが、床に広がって固まりだした血液と、土気色に変色した二つの身体が目馴染むことはない。ましてや、宝の目には。

「……どこまで聞いた？」

彼の声が再び沈鬱な色に変わる。当然だ。わたしにとっては赤の他人でも、彼にとっては一応育ての親なのだから。——と、一般的な解釈をしておこう。

わたしは彼らから聞いたことを、一つ一つ思い出しながら話した。そして話しながら、結局彼らは核心を教えはしなかったなと思う。周りからじわじわ狭めていって、最後に言うつもりだったのだろうか。その前にナオに殺されてしまったわけだが。

研究施設のことやヒトクローンのこと、博士夫婦の娘のことなどを聞くと、彼は一層陰鬱な顔色になった。そして憎悪をもって二人の死体を睨むのだ。一般的な解釈は間違っていたのかもしれない。

「……で、その娘に悪影響を与えるのを恐れて引き離したって。…」

…わたしが聞いたのはそこまで」

「そうか……」

聞き終わると、彼は深い深いため息を吐いた。諦めたような、絶望したような、脱力したようなため息。そして二人の死体を冷たく一瞥すると、天井を仰いで静かにまぶたを下ろす。

「……大事なところは聞いていないみたいだけど……君のことだ、それだけ聞けば大方察しは付いているだろう」

わたしは無言で頷いた。大方、とは言っても、わたしが考えたのはたった二つのこと。されどその二つが、何よりも重要なだろう。

宝優陽の正体と。

ソレスティア・クリスとの関係。

彼は何も見ないまま、独り言のように続ける。

「ソレスティア・クリス。彼女は僕の……」

「……姉、なのね」

続く言葉を奪う。彼の口から言わせるのは、あまりにも残酷な気がした。

彼はそれを予想していたかのように微笑し、痛ましい目をわたしに向けた。

「遺伝子的には娘でもある」

息が詰まる。——どうして彼は、こんなに苦しいことを自分で言ってしまうのだろうか。

「……やっぱりあなたは……」

遺伝子的には——つまり彼の遺伝子は、ソレスティア・クリスの父親と同じ形をしている、ということだ。

双子でもない限り、自然には起こりえない事態。二十以上歳の離れた人間と全く同じ作りだなんて、——科学的技術を用いなければ。

彼は自嘲気味に笑う。二つの死体を眺めながら。自分とは全く関わりのない血液を眺めながら。

「そうだ。アメリカの家畜クローン研究施設、その第一人者でありソレスティア・クリスの実父、キーツ・クリス博士。……僕は彼の

ク
ロ
ー
ン
だ
」

25：和解

「知ったのは四年前、小学五年生のときだった……」

彼は立てる膝を替えて、視線を宙に向けた。彼の目には当時の光景がはつきりと見えているのだろう。

「それまでも、両親の目が子供に向けるものじゃないと感じることはあった。……観察、とでも言おうか、そんな目だ。だから、自分と彼らとの間に血の繋がりはないんじゃないかとは思っていた。今時珍しくないだろう、養子と知らずに成長する子供なんて」

わたしは頷く。確かによくある話ではあった、子を手放す親も、子ができず切望する夫婦も掃いて捨てるほどいるから。

「両親は僕に戸籍を見せたがらなかったから、パソコンを使って自分で調べた。知ってると思うけど、戸籍を閲覧するには、大人でも面倒と感じるような手続きをオンラインでしなきゃならない。そしてその手続きをすれば見たという記録が残ってしまう。僕はそれが嫌だった。両親にばれてとやかく言われるのを避けたかったんだ。だから違法に閲覧させてもらった」

「……あの、大きなパソコンで？」

「ん……いや、そのときはまだあれは持っていなかった。学校で支給されたノートでやったんだ」

「独力で？」

「適当にやったらできた」

必要なプログラムなんかは多少作ったりしたけど。彼はそう付け足した。

「……果たして僕の予想は当たっていた。僕の名前の隣にはつきりと『養子』と書かれていたよ。……そうなると今度は実の親が気になった。どういう経緯で今の親に引き取られたのか……。それを知るためには、まず二人のことを知る必要があったんだ」

彼は忌々しげに二人の死体を見た。まだ死後硬直も始まっていな

い冷えた体。

「そもそも僕は、二人の職業さえもとに知らなかったんだよ。物心ついたとき既に二人は働き詰めで、子供の僕は寝るのも早かったから、たまにある休日くらいしかろくに会話もしなかった。……まるで他人だよ。何も話す気が起きないんだ。だから黙って調べた。経歴から職業の詳細、人間関係まで。……するとある研究施設の名が出てきたんだ」

研究施設。宝氏の人形のような顔を思い出す。

「……表向きは家畜クローンの研究、実際はヒトクローンの研究をしている施設ね」

アメリカにあるという、バイオテクノロジーの。彼は深く頷く。
「その通りだ。……僕はすぐさまその施設のコンピューターに侵入し、そのデータをひたすらあさって読み尽くした。……そして知ってしまったんだ」

今まさに痛みを受けたかのように、白い横顔がゆがんだ。わたしは思わず目を逸らし、まぶたを伏せる。膝を寄せて、両手できつく抱えた。

「二一四二年十二月二十四日！」

彼の声が部屋中に響き渡る。行き場のない波は壁に体当たりして体当たりして体当たりして、碎けて消えた。

「……キーツ・クリス、シンシア・クリス博士夫婦が、長年の研究の末遂にヒトクローンの作製に成功する。キーツ博士のクローンである。体外受精後シンシア博士の胎内へ移動、九ヶ月の後無事出産クローン体に異常はなく、至って健康な嬰兒である」

歌うような、妙な抑揚をつけた語り口。彼は当時の文書を残さず暗記してしまっているのだろうか。

「このクローン体の今後の扱いについて……共に研究に取り組んでいた日本人夫婦、宝達良・英子に養子として預ける。日本に帰国しクローン体の観察記録と成長記録をつけ、定期的に送信することを命じる。クリス博士夫婦の娘に悪影響を及ぼさないためである。娘

の名はソレスティア。十歳。世界立国際大学アメリカ支部附属小学校に在学中」

疑いようもなかった。ソレスティア。クリス。十歳。世界立。――偶然の一致があり得るか？

「クローン体を将来施設に連れ戻すかは未定。クリス博士夫婦はクローン体を自分達とは何ら繋がりのないものと位置づけた。名付け親も宝夫婦である。――優陽。二人はそう名付けた」

言い終えて、彼は深い深いため息をついた。わたしはまだ息が詰まっている。

「僕は生まれてはいけない人間だったんだ」

高らかと。彼はそう言い放った。

思わず顔を上げる。彼は笑っていた。口元を狂人めいた笑みにゆがませ、頬を引きつらせ、眼鏡の奥の瞳は一点の光もない暗闇に沈ませて。変に上擦った声で言うのだ。

「分かるかい？僕はあの授業、あのクローンについての授業のとき、質問に答えながら自分の存在を否定していたんだよ。あの女の目の前で――もちろん僕は自分がクローンであることを知らない」と見せかける意図もあった、けどそれはきつと無駄だった。クリス夫婦はあの女に僕の存在を知らせていなかったみたいだけど、あいつは多分ずっと前から知っていただろう。そうでなければ『生まれ』だの『血筋』だのという言葉は出てこないよ。……僕は単純に、あの女の反応を見てみたかったんだ。仮にも弟である人間が自身を否定するところを見て、どんな顔をするか。……結果は知っての通りだ。あの女は教師面を崩さなかった！」

先生は表情を崩さないどころか、宝のことを褒めたのだ。教師としての顔で。

わたしは心臓を細いワイヤーで締め付けられるような苦しさを覚えてた。

彼はきつと、どこかで期待していたのだ。自分を監視するために現れたとはいえ、実際に関わりを持った唯一の肉親。もしかしたら

自分を受け入れてくれるかもしれない、分かってくれるかもしれない、と……。そして恐らく、本人ははっきりそう自覚していない。いや、しようとしなくてもいいかもしれない。

「……僕は自分の正体を知ってこの方、まるで生きた心地がしない。当然だ。元々僕は生きていないはずの人間なのだから。……何もかもが嫌になった。それ以前から世の中のくだらなさにはほとんどうんざりしていたけれど、尚更だ。こんな存在を生み出した人間が！それを許した現代科学が！それを研究してきた祖先が！そんな人類達が巣くう世界が！……憎くなった！！だから、だからこの手で――」

自分の頭を両手で鷲づかみにして、ほとんど錯乱したように彼は叫ぶ。かつて彼の部屋で、わたしは彼の演説を聞いた。世界を破壊しようと言われたそのとき。彼は両手を広げて、似たようなことを叫んだ。――あれも確かに本音ではあっただろう。だが今回は度が違う。もっと深いところまでえぐり出し、吐き出している。

「……分かってる。世界を壊そうとしたんでしょ」

わたしはそつと彼の腕に手を掛けて、代わりに続きを言った。彼の腕は震えていた。わたしが強く握ると、急速に力が抜け、頭をつかんでいた指が緩む。彼は弱々しい光をたたえた目ですがるようにわたしを見て、わずかに頷いた。

「……それで、わたしに殺して欲しいの……？」

今なら明確な理由を教えてくれるかもしれない。飄々とした態度で曖昧に答えられた、わたしの存在意義。――彼は気まずげに目を逸らし、じつと床を見つめる。わたしはもう一方の手も宝の腕に重ねて、できるだけ厳しい表情にならないように顔を覗き込んだ。彼の瞳に困惑の色。黒目がしきりと動き回って、結局、わたしの目に落ち着いた。小指一本も入らないほど小さく唇を開いて、ほとんど口の外に出ないような声を漏らす。

「……死ぬときぐらいは、好きに死にたい」

聞き間違いがなければ、彼はそう言った。

思わず目の前で目を丸めると、彼は少し口をもごもごさせた。それでもなおじつと見つめていると、やがて諦めたように大きく口を開いた。

「生まれるべきじゃないのに、他人の勝手な事情で生まれてしまったんだ。最期くらいは自分で選びたい。けど前にも言ったように、僕は自殺が好きじゃない。それは人生に負けた人間がすることだからだ。だから自分の認めた人に、この人になら殺されても不名誉じゃないと思う人に、綺麗に最期を飾って欲しかった。その人材を捜すために僕は世界立中学に入ったんだ」

「そしてわたしを選んだ……というわけ」

彼はばつ悪げに、親に詰問される子供のように頷いた。

「どうして？」

今度は小さな子供に予想外な質問をされた大人のように目を見開いた。

「だって、わたしなんかよりもっと適当な人がいたんじゃない？ それこそあなたの部下とか……。もう分かっているとと思うけど、わたしちょっと頭がいいだけのただの子供よ。分からないことがあれば混乱するし、思い通りにいかないことがあれば憤るし、チームワークだって自分勝手に乱すわ。……ここにるのが何よりの証拠でしょう」

そしてその結果、そこにある一対の死体を作った。彼にとってわたしの無関心さが失われる（妙な表現だ）ことは予想外だったようだが、そこには少し、彼の自己評価の低さが垣間見られる気がする。能力に対してではない。成長過程で生じたゆがみとも言えるものだ。

誰も自分のことなど見てはいない、と。

わたしの無関心さを過大評価していたと言うよりは、自己に関心を持たれる可能性を極端に低く評価していたのだろう。

そこを除けば、恐らく彼は、至極冷静に客観的にわたしを分析していたに違いないのだ。

「部下は駄目だ。オリゾンとワローレッド以外、実際に会ったこともないんだから。近くでじっくり観察しないと、正確に分析できない」

「それで、近くにいたわたしを仕方なく？」

「……いや、仕方なくっていうか、……いや、うん、ああ、じゃあそれでいいよ」

「……？そう」

彼は頭を掻いて天井を仰いだ。わたしはそんな彼の横顔を眉をひそめて見つめ、しつこくも呟いてみる。

「納得できないんだけど」

すると彼は顔をこちらに向け、薄く、かすかに苦笑した。

「いい。いいよ、分からなくて、いいんだ」

納得できなかった。

しかしわたしはその顔を見て少なからず安心した。目も大分落ち着きを取り戻しているし、細い指がずり落ちた眼鏡を押し上げている。一見いつも通りである。しかし確実に、いつもの仮面はつけていなかった。

わたし達はお互いに歩み寄ることができた。

互いの心情を心ゆくまで吐露し、互いに満足することができたのだ。

26：睡眠

彼は緩く息を吐いて、硬いドアに背を預ける。その目にはまた宝夫妻の死体が映っていたが、穏やかだ。

「……疲れたな」

そして少ない動作で腕時計を見た。つられてわたしも自分の腕時計を見る。日付が替わろうとしていた。

「僕は寝るよ。結局一時間くらいしか寝てないんだ。君も寝てもいいけど、……一つ言っておこう」

「何？」

わたしが首を傾げると、彼は急に硬い顔をしてこう言った。

「あと五分で電気が落ちる。やりたいことがあったら今のうちにやっておくんだ。ネットはもちろん電話やメールも使えなくなるから」

わたしは場違いに驚いてしまった。分かっていたはずのことだ、刑務所が開いてからもう随分経つ。電気を、落とさなければならぬのだ。

「……そういう設定なの？」

「そういう設定なんだ」

話に夢中ですっかり意識の外にあった。恐らく彼はここに来る前そう設定したのだろう。

「ねえ、でもそんなことをしたら」

はたとある重要なことに気が付いて、背後の自動扉に手をつく。

「出られなくなるわよ。これ、電動なんだし」

しかし宝はそれに寄り掛かったまま、平然と首を振った。

「大丈夫。明日の朝オリゾンとワローレッドが迎えに来てくれるから。二人にかかればこんな扉なんて」

まるで犯罪者予備軍だ。いや、犯罪者か。

「その点はぬかりない。……だから瞳」

強い調子で名を呼ばれ、身体をこわばらせる。真正面に彼の顔があり、真剣な目でわたしを見据えていた。静かにその手が伸びて、わたしの肩を強くつかむ。

「今のうちにやりたいことをやっておくんだ。……と言っても、できることなんて限られているけれど。親に電話してもいい。友達にメールしてもいい。ネットで調べごとをしてもいい。……いいかい、繋がるのはこれっきりだ。これっきりなんだよ」

これっきり。——あと五分で地球全土から電気がなくなり、全ての繋がりがなくなる。

わたしは今朝から、たった一度しかノートの電源を入れていなかった。宝夫妻に電話をしたときのみだ。しかもそれも、会話が終わった後すぐに切っている。余計なことは一切しなかった。メールが来ていたかどうか確認していない。もしかしたら母やその他の知り合いから何か連絡が来ていたかもしれない。母。——今頃どうしているだろうか。不安で眠れないとか、そんなたわけたことを考えているだろうか。父からは何か連絡があっただろうか？それともあの男は、今も北海道でわたし達の知らない女と過ごしているのだろうか。

「……本当にこれっきりなのね？」

わたしが確かめると、彼は強く頷く。

「ああ。これっきりだ」

「……じゃあ」

彼の手を肩から下ろし、立ち上がる。部屋の真ん中に相変わらず死体。既に自分の心が凍りついていることにも何も思わない。冷気を保つ金属の壁。わたしは歩き出し、二つの死体に近づいた。宝が何か言いたげな目を向けたが、気付かなかったことにする。

大体わたしの目的は死体ではないのだ。

腰をかがめて、床に落ちていたそれを拾い上げる。ぎりぎり血は付いていなかった。さっきよりも随分と軽く感じる。

死体には目もくれず、踵を返す。もう一つ。扉に程近い壁際。重

く沈黙していたそれに歩み寄り、拾い上げる。そして宝の方を向き直ると、彼は気の抜けたような丸い目をしていた。

「はい」

二丁のうち一丁、壁際に落ちていた銃を彼に差し出す。彼はその顔のままとりあえずそれを受け取り、わたしの顔を上げしげと眺めた。わたしがまた隣に腰を下ろすと、不思議そうに尋ねる。

「……やりたいことつて、まさかこれだけ？」

「これだけよ。だって真っ暗になったら拾えないでしょう。わたしのなんて借り物だし」

「……まあそうだけど」

わたしが親に連絡をするとも思っただろうか。彼は腑に落ちない様子で銃を傍らに置いた。

わたしはもう、親に何の情も湧かなかった。

産んでくれと頼んだ覚えもないし、世界立に入れてくれと頼んだ覚えもない。わたしは気付いたら親、主に母のいいように育てられていた。わたしの知る母はわたしをアクセサリーとしか見ていない、エゴの塊だ。最後に家を出たとき見せたあの表情や言葉だってそうだ。大切な娘を思いやる心優しい母親、あいつはそれを演じたいだけなのだ。

「……寝たら？眠いんでしょう」

「あ、ああ……」

わたしが鞆に銃をしまいながら言うと、彼は思い出したように頷く。それから少し何事か考えて、わたしの鞆を指さした。

「それ、貸してくれないか」

「……？何でよ」

「枕代わりにする。僕の鞆はオリゾン達のところにおいてきてしまった」

彼が自分の鞆を放置するなんて、余程あわてていたのだろう。わたしは了承しそれを渡そうとしたが、そのあまりの硬さに思い止まる。当然だ。ノートやら缶詰やらが隙間なく詰まっているし、たっ

た今拳銃まで入れたのだ。これに頭を置いて寝ようとは、随分無謀なことのように思える。

「……これ、すごく寝心地悪いと思うわ」

「別にいいよ。多少は我慢できる」

だから多少ではないというのだ。これでは身体も休まるまい。中身を抜けばそれなりに使えるのかもしれないが、面倒だった。

わたしは彼の服装を見た。長袖のシャツ一枚。続けて自分のを見る。Yシャツの上に制服のブレザー。

わたしは黙ってそのブレザーを脱いだ。宝はなぜかぎょっとした顔でわずかに後ずさる。わたしは怪訝に思いつつもブレザーを畳み、彼の目の前に差し出した。

「こつちを使うといいわ。鞆よりはましだと思う」

「あ、……ああ、そうだね」

彼はなぜかどぎまぎした顔をして、控えめにそれを受け取った。複雑そうな目にその赤色を映し、沈黙する。流れた血より鮮やかな赤。道行く人の視線を嫌でも集める、自己主張の強い赤。そういえばもう着る必要はなかったのに、どうしてわたしは今まで着っぱなしにしていたのだろう。この先ずつと彼の枕として使ってもらっても全く差し支えない、今ならそう思えた。

やがて彼はぎこちなく笑い、その場に枕を置いて仰向けになった。大きさは丁度よく、彼の頭から少し端が出る程度だ。

「じゃあおやすみ」

言つて、静かにまぶたを下ろす。わたしの真横でその頭がつむじを向けていた。両足は床に放り出されているが、両手は腹の上で組まれている。間もなく胸部が規則的に上下し始めたので、口元に耳を近づけてみると、やはり小さな寝息が聞こえた。ホテルでのかきいいい今いい、天才的に寝付きが良いことだ。わたしはいつもベッドに入ってから一時間以上は眠れないので、かなり羨ましかった。

それにしても。

「……」

この人は寝返りを打たない確固たる自信でもあるのだろうか。眼鏡を掛けたまま寝るなんて。

眼鏡。とうの昔に使用が絶たれたと言ってもいい眼鏡。一緒に過ごすうちにだんだん見慣れてきたかと思っただ、改めて見るとやはり不格好だった。白い頬に黒い縁が妙に映えて、異様な存在感を与えている。取った方が絶対に綺麗な顔をしているのに、何が楽しくてこんな物を使用しているのだろうか。コンタクトを入れられない事情でもあるのだろうか。

そんなことをとりとめもなく考えていくうちに、わたしの思考はある一つのことにと辿り着いていった。そしてそれを考え出すと、柄にもなく指先がうずいて仕方がなかった。

わたしは生まれてこの方眼鏡というものを身に付けたことがなかった。そもそも実物を見たのだって彼の物が初めてだ。以前のわたしならこんな物に興味を示すことはなかっただろう。しかし今、既に両手が彼の顔に向かって伸びているほど、かつてなく好奇心をそられていた。

なるべく震動を与えないよう、両のつるを片手ずつでつまむ。確かこれは耳に掛けて装着する物だから、——ええと、まず上にずらすべきか。わたしは意味もなく唾を吞んで、そうつと、ゆつくりとつるをこめかみまで上げた。彼の柔らかい髪の毛が動くたびに全身の血がひやりとする。別に起きたところで殺されるわけではないだろうが、勝手に取るうとしていることへの後ろめたさがあった。

結局彼は微動だにしなかった。——しかしまだだ。まだ、これを顔から抜き取るという関門がある。

このまま垂直に持ち上げれば、素直に取れてくれるのだろうか。確か歴史の資料にはそう書いてあった。彼の眼鏡がまるつきり昔のままであることを祈りつつ——わたしは息さえも殺し、さつき以上に慎重に、亀の足よりも遅い速さで眼鏡を持ち上げる。つると彼の頬の間で、ほんのわずかな摩擦が起きる。それさえも彼を起こす要

因になりうるのだ。——あまりにもすんなり抜けるものだから、そんなことまで考えてしまった。

かくして黒縁の眼鏡は、わたしの目の前で初めて宝優陽の顔を離れたのであった。

わたしは思わず笑みをこぼし、ほっと息を吐く。なんだかどつと疲れた。しかし今自分の手の中に、初めて本物の眼鏡がある。その事實はわたしにこの上ない満足感を与えてくれた。

両のレンズは、基本的にはコンタクトレンズと同じ作りだと聞く。掛ければたちどころに視力が矯正されるのだ。わたしは眼鏡を斜め上にかざしてみ、上向きにしたり下向きにしたり、あらゆる方向から眺め回した。だがさすがに宝の顔で見慣れているせいもあって、すぐに外見には興味が失せてきた。

やはり掛けてみなくては。

固く目をつぶり、恐る恐るそれを顔に近づけてみる。わたしの視力は至って健全だ。コンタクトもしていない。健全な視力は下手に矯正器具をつけると逆に悪くなると言う。先の短い身ではあるが、できればそれは避けたかった。

つるが頬に触れる。この曲がった部分を耳に掛けるん、だったか？ 髪に引っ掛かってしまつて、これがなかなか大変だ。最終的には半ば無理矢理髪の隙間に差し込んで、少しずつ両手を離してみる——予想外のフィット感だ。頭を左右に振ったり、激しく頷いたりしてみたが、思いの外ずれば少ない。確かにコンタクトよりは面倒だが、生活できないこともないだろう。

わたしは目の周りの筋肉から力を抜いて、うつすらとまぶたを上げた。目に悪いとは言っても、急激に見えなくなるわけではあるまい。多少の眩暈は覚悟しなければならないが、少しくらいなら大丈夫だろう。最初の心配は知らぬ間に薄れ、わたしはこのガラス越しに世界を見渡そうとしていた。部屋の光が眼球に飛び込んでくる。眉間に深い皺を寄せ、少しずつ、少しずつ、睫毛の向こうに室内の景色が見え始めた。固まりかけた血。死体。椅子。スーパーコンビ

コーナー、机、――。

半分ほど開いたところで、不信感を抱いて一気にまぶたを引き上げる。

「……？」

血。死体。椅子。スパコン。机。

何一つゆがんでなどいないのだ。

「……度入ってないじゃない……」

そう、両のレンズは何の仕掛けもないただのガラス板だった。丁度窓から風景が見えるように、少しだけ違和感を持って向こう側が見えるだけだ。眩暈も何もありません。拍子抜けしたわたしは一気に眼鏡への興味を失い、ためらいなくはずして傍らの床に置いた。何の心配もいらなかったのだ、警戒して損をした。

いや、それよりも――。

わたしはちらと宝を見た。何も知らず安らかに眠る端正な顔。

――なぜ彼はこんな無駄なものを身に着けているのだろうか？

こればかりはどうやっても分からない。綺麗な顔を隠して目立たなくするため？――逆効果だ、むしろ目立つ。ソレスティア先生と顔が似ていると他人にばれないようにするため？――あり得る、が、隠すほど似ているというわけでもない。それとも単純に眼鏡が好きなのだ？――分からない、歩み寄れたとは言っても、彼の考えることはやっぱり分からない。

ふっと短く息を吐いて、彼の顔から視線をずらす。するとその真横に、一枚の封筒が無造作に置いてあった。ひどく薄っぺらい、小さな封筒。わたしは眉をひそめた。ナオが届けた、先生からの手紙だ。

腕時計を見る。宝が残り時間を告げてから、既に四分が経過していた。日本崩壊まで、あと一分。

――読める、か？

思い立ったが吉日、わたしは素早くそれを拾い上げ、封を切りにかかっていた。口はセロハンテープで留めてあって、はがすのは容

易である。――が。

三分の二まで開けたところで、ふと手が止まる。

――怒るだろう、か？

ナオは何と言っていた？――ただ「ねーさんから」と言って宝に渡していた。宝宛とは一言も口に出していない。封筒にもそのようなことは書いていない。だがもし、もしこの文書が――宝の出生や研究施設に関わる、秘密の文書だったら？

「……」

一秒考えて、手の動きを再開する。端のテープがぴつとはがれ、口から便箋が頭を出していた。

――構わない、全てを知っているわたしなら。

爪で便箋を引っ張り出し、蛍光灯の下に広げる。やけに丁寧に四つ折りにされた、無駄のない白い便箋だった。

27：手紙

親愛なる宝優陽殿

お元気ですか？こちらは部下共々絶好調なのでご心配なく。

さて、この手紙があなたの手元にあるということは、日本は既に暗闇に落ちたのでしょうか。構いません。それで良いのです。

一段落ついたところで、私から提案があります。

それは、我々秘密調査部隊とあなたの率いるテロ組織との話し合いの機会を設けないかということです。

我々はそもそも貴組織の行為に反対するつもりは毛頭なく、邪魔をするなど論外のことなのです。ただ、このままあなたが我々を殺し、自身も死を選ぶとなると、それは困ります。我々は死ぬ気はないし、あなたに死なれても困る。だから、その前に話し合いをしようと思うのです。

話し合いの日は、この手紙があなたの手に渡ったその瞬間から七十二時間後。場所はそちらに指定して戴いて構いません。我々は話し合いのときまでその場所に足を踏み入れないと誓います。

この提案に応じて戴けるなら、この手紙があなたの手に渡ったその瞬間から二十四時間以内に、指定場所を記入した紙を宝夫妻の地下室の扉に貼り付けておいてください。二十四時間一秒経った時点でそれがない場合は応じなかったものと見なし、この提案はなかったこととなります。

良い返事を期待しています。

あなた以上のあなたの理解者 ソレスティア・クリス

「……というのが、手紙の内容だ」

紙面に当てていた携帯ライトの光を自分に向けて、宝は言った。

暗くて狭い、空気の淀んだ通路。死体と血を室内に閉じ込めて、わたし達は部屋の外に出ていた。一度開けられた扉は再び頑丈に閉ざされ、わたし達がこれを開けることは二度とないだろう。開けるとすれば、それは先生かナオか他の部下か。

ライトをつけているのは宝一人だけで、他の二人の顔は薄暗い。しかしそんな中でも、ワローレッドが露骨に口を曲げるのが分かった。

「罨やろ。ぶっ殺されるでえ」

扉を開ける作業のせいで、彼はいささか疲弊していた。オリゾンが鍵をはずし、ワローレッドが扉をこじ開ける。これがなかなか重かったらしく、彼の筋肉がフルに利用された。その間中オリゾンと宝が絶えず野次を飛ばしていた。

オリゾンも渋い声で彼に続く。

「私もそう思います。もしそうでないにしても、こちらに応じるメリットはこれっぽっちもない。話し合いなどせずとも、このままどこかに潜んでいれば『破壊』は続けられるのですから」

彼女の言うことは正論だ。先生が何を考えてこのような手紙をよこしたのかは知らないが、わたし達にあまりにもリスクが大きすぎる。冷静な人間ならとてもではないが応じないだろう。

ただ。

わたしはちらりと宝を見やる。彼はきわめて無表情に手紙を畳み、封筒の中にしまった。

「僕もそう思う」

「……優陽」

何も言うまいとは思っていたが、思わず口から声がこぼれる。あわててその続きを押しとどめるが、わたしはもの言いたげな目で宝に訴えた。彼の思考の根本を為すものを知ったわたしは、これからはただ彼の判断に全て委ねようと思っていた。それがきつと最善策だから。——ここで先生に会わなくていいのかなんて個人的な意見口に出すべきではないのは分かっているけれど。

彼は冷静にわたしを一瞥してから、淡々と続けた。

「ただど応じる。話し合いの場所を書いて、この扉に貼る」

「……え？」

オリゾンもワローレッドもわたしも、一様に目を剥いた。そしてオリゾンが真つ先に険しい顔になり、とがめ立てるように低い声を漏らす。

「……冷静ですか、サン」

「もちろん。冷静に考え、罠だと分かってても、これが最善と選んでの選択だ」

宝は平然と肩をすくめてみせた。薄ぼんやりとした明かりの中、ワローレッドの馬鹿みたいな顔が浮かび上がる。わたしは黙って、続く言葉に耳を傾けた。

「いいかい？ここにいる全員が知っているように、ソレスティア」クリスと僕の間には並々ならぬ因縁がある。例えば今この話し合いを回避しても、『破壊』の進行を待っているうちに、奴はまた接触を図ってくるだろう。だったら罠と分かっているにしてもこの誘いに応じて逆に罠に掛けるくらいの気持ちで向かった方がいいじゃないか」

「……なるほど」

オリゾンは浅く頷き、周囲に視線を巡らせる。そして心持ち声を潜めて、宝に囁いた。

「では続きは私のジェットで……した方がいいでしょうね」

わたしが怪訝な顔を見ると、彼女は黙って人差し指で自分の耳を指さした。それでもわたしが首を傾げると、唇だけ言葉の形に動きます。「盗聴」。それはそう読み取れた。

宝は最初から分かっていたのだらう、表情を変えずに頷いた。

「ああ。……でも少し待ってくれ。またここへ来るのは面倒だ、今場所を指定した紙を貼っていこう。オリゾン、僕の鞆は」

「ここに」

オリゾンが背後に置いてあった宝の鞆を手渡すと、彼はその中から一枚の白紙とボールペンを取り出した。全く用意の良いことだ。

扉に紙を置くと、ためらいもせず文字を綴り出す。ぽかんと口を開けていたワローレッドが、あわててその背中に呼びかけた。

「ちよお待ちや、場所書くゆーても、肝心のその場所は決まっとなかいな」

宝は振り向きもせず、ペンを走らせ続ける。整った、几帳面な文字。その文字列が示す場所は。

書き終えて、彼はようやく振り返る。眼鏡のガラス板にライトの光を妖しく反射させ、口の端を引き上げた。

「心配ない。おあつらえ向きの場所を知っている。『話し合い』にはもってこいの場所だ」

そうして突きつけられた紙面に、わたし達はぐっと顔を近づける。そして一斉にそれを認識し、一斉に目を見張り、一斉に宝の顔を見上げた。彼は笑う。目は見えない。

「さて、『話し合い』はうまくいくかな？」

東京タワー。

西暦一九五八年に建設された集約電波塔。東京都港区芝公園にあり、高さ三三二・六メートル。二〇一一年に新東京タワーが完成するまで、日本一高い建物だった。それ以降は第二位。現在は放送施設としては働いておらず、専ら観光名所として機能している。通常のマンションやビルと違い空中道路では繋がっておらず、入り口は一階にしかない。そのため、こういった事態のときにわざわざ入ってやろうという気になるようなものではなかった。

だからこそ宝は、ここを「話し合い」の場にしたのだろう。

「それぞれの役割分担を伝えるよ」

後部座席にわたしと並んで座り、彼は改まった口調で言った。助手席のワローレッドは興味津々で振り返り、運転席のオリゾンは前方を見つめたまま「どうぞ」と答える。わたしは窓の外、朝だというのに暗闇に沈んだ街——あちこちの道路で火は上がっているが——を眺めていた視線を彼に移した。

「まずワローレッド」

「へいつ」

「君にはこの人物を、話し合いの日までに東京タワーに連れてきてもらいたい」

言って彼が鞆から出したのは、A4サイズの茶封筒だった。あまり分厚くなく、口はちゃんと閉められていない。ワローレッドはそれを受け取ると、怪訝そうに首を傾げた。

「中見てもええんかいな」

「いいよ。今のうちに目を通しておくといい」

イエッサーなどと軽く答えて、彼は前を向いた。わたしは動かず、黙って彼の背もたれを見つめている。

「次にオリゾン」

「はい」

「君はこれから僕が指定する物を作ってくれ。今は運転中だから後で詳細の書類を渡す」

オリゾンは一瞬たりともよそ見をしようとしないう。空の運転は地上より危ないのだと、昔ソレスティア先生が言っていた。

「分かりました。……その物というのは、簡潔に言うと何でしょうか」

「簡潔に言うと凶器だよ」

さらりと答えた宝に、オリゾンは口角を上げて笑った。

「了解しました」

宝も少し笑う。そして最後にわたしの方を向いて、眼鏡のブリッジを押上げた。

「最後に、瞳」

「……ええ」

言葉少なに頷くと、彼は少しだけ申し訳なさそうに眉を下げて、しかし微笑んだまま続けた。

「……君には僕の手伝いをして欲しい。大変だから、色々」
わたしは目を伏せて、短く息を吐いた。

まあ、そんなところだろうとは思っていたし。

「……分かったわ」

わたしの役目は、宝を殺すこと。それまでは何の役にも立たない、あくまで従順に彼についていけばそれでいい。

——分かつている。わたしは窓辺に頼杖をついて、ずっと下の世界を見下ろした。不規則に揺れる光が点々と、道路の筒を浮かび上がらせる。人々の叫びは聞こえない。

おかしいものだ、わたしは現在進行形で人殺しに荷担しているのに。

たった一人の人間を殺すことに、こんなにも躊躇している。

「こんな感じでいかがでしょう」

二日目の昼、オリゾンは床に並べたそれを宝に示して言った。

わたし達は既に東京タワーに移動していた。地上一五〇メートル、大展望台二階。前述の通り東京タワーには空中道路が連結しておらず、展望台に直接外から入ることはできない。最短でもフットタウンの屋上から階段を上らなければならなかった。わたし達はオリゾンのジェットを屋上に停め、そこから階段を約六百段上った。階段には雨は吹き込んでこず、そこだけ世界から切り取られたかのように穏やかだった。似たような動きを延々十分ほど繰り返し、闇の中を上昇していくと、自分が浮いているような錯覚を覚える。体力的には何ら問題なかったが、脳が頭蓋骨の中で膨張と収縮を繰り返すような気持ち悪さを覚えた。それでも宝とオリゾンは何事もないかのように平然と上る。ワローレッドだけは先に別の場所に下るされて、課された仕事をしに行った。

オリゾンは携帯ライトの明かりだけで、器用にそれを作った。数にして計十二個。材料はそこいらの車や、元々ジェットに乗っていたものだ。大きさはそれぞれ両手に収まる程度で、外見に構っている様子はなかったらしく無骨に中身が見えている。

宝はそれをざっとライトで照らして、満足げに頷いた。

「うん。十分だ。リモコンは？」

「ここに」

オリゾンはずかさず言われたものを差し出す。やつついで作りま
したと言わんばかりのひどく簡素な作りのリモコンで、掌サイズの
黒いボディの真ん中に、丸い赤ボタンが突出している。右上には安
っぽいアンテナ。他には何もない。

宝は一度それを受け取って、じっと見つめた。しかしすぐにまた
オリゾンに返し首を振る。

「これは君が持っていてくれ。最後に僕らを確認して、……それか
ら押すといい」

最後。何気なく言われたその言葉が、わたしの心に陰を落とす。
「……分かりました」

オリゾンはただ薄く微笑んでそれを受け取った。その最後のとき
が、どんな状況であるかは想像できていたのだろうか。

恐らくそのとき既に、わたしと宝は生きていない。

オリゾンはリモコンをポケットに入ると、再び床の上に視線を
巡らせ困ったように眉を寄せた。

「でも、これを一人では運べませんね」

それは四個ずつ、最上階の特別展望台とこの一階下のフロアとフ
ットタウンの一階に設置される予定だ。あまり大きくないとはいえ
結構な重さだろうし、これを一人で持って階段を上り下りするのは
かなりつらそうである。わたしと宝はそもそも人員から除外されて
いた。無駄な体力は使わせられないというオリゾンの配慮だった。

「ワローレッドが帰ってくればいいんですけど」

「ういいーすただいまあ！」

オリゾンが言い終えたとき、何ともタイミングのいいことに間の
抜けた彼の声が階段から響いてきた。

わたし達は一斉に振り返り、フロアの中央の階段を見やる。丁度
階下から人が上ってくると見える位置にわたし達はいた。階段を上
ってきたのは確かにワローレッドだった。全身が雨に濡れ、前髪が
額にへばりついている。服も余すところなく濡れていて、この調子

では明日までに乾かないだろう。彼の声は割合陽気だったが、その顔には少なからず疲労が表れていた。

無理もない。両肩に二人も人間を担いでいては。

「いやーごつつ疲れたわ、さすがに大人二人はつらいでえ」

彼は階段を上りきった瞬間その場に膝を落とし、両肩の人間を無造作に床に下ろした。男女だった。西洋人の、中年の男女。しかしその顔にはどこか日本人のような作りも見えて取れて、髪の毛は焦げ茶色だった。気絶しているのかぴくりとも動かず、目の色は分からない。男女ともに背が高かった。女性はソレスティア先生と同じくらい、男性は一八〇センチはあるように見える。やっぱり全身水浸しで、体の下に水たまりができた。

その二人を見た瞬間、宝の纏う空気が変わる。

明確な殺意と憎しみが、その目に宿っていた。体の横の拳はきつく握り締められ、小刻みに震えている。できれば今すぐ喉をかつ裂いて殺してやりたいくらいなのだろう。しかし今の彼にそんなことはできない。それはわたしも、オリゾンも、ワローレッドも、宝自身も分かっていることだった。

「……瞳」

低く、低く、わたしの名を呼ぶ。わたしが返事をする前に、彼は顔も上げずに続けた。

「こいつらの両手両足を縛って、目隠しをして、猿ぐつわを噛ませで、台車に乗せて売店の中に置いておけ。いいな」

わたしは胸が痛んだ。この男女に哀れみを感じたわけではない。ただ彼らに対してそんな仕打ちをする宝が痛ましかった。彼は迷走しているように思えた。実際に彼らを目の前にして、どうしたらよいか分からないから、とりあえず見えないところに放り込んで明日まで置いておこうというのだろう。そして次に出したときには、多分――。

それが本当に、彼の望むところなのだろうか。

「……分かった」

それでもわたしは頷いた。わたしが口を挟むことではないと分かっていたから。

わたしが命令を実行する間に、オリゾンがワローレッドに命じて作ったものを設置させにいった。帰ってきたばかりのワローレッドは「また行くんかいなあ」と泣き言を言ったが、当然のようにオリゾンはそれを許さなかった。しかし彼を最下階に行かせたのは彼女なりの配慮だろう。二人は階段を逆方向に進んでいった。

わたしは気絶した男女を言われた通りの状態にし、台車の上に載せた。この台車はこのフロアにある売店が使っていたものである。フロアの東側、階段の脇に売店があつて、半閉鎖的に壁に囲われていた。ここなら一目では気付かれまい。哀れな男女はそのうち目覚めるだろうが、明日の話し合いまでには体力も尽きて大人しくなるだろう。

わたしは売店を出て宝の元へ戻った。彼は階段の前にできた水たまりに佇み、うつむいていた。その肩がかすかに震えていた。

「優陽」

わたしが名を呼ぶと、彼は重々しく顔を上げる。薄暗いライトの中でも、青ざめているのがはっきりと見て取れた。

「怖いのか？」

他意はなかった。しかしわたしの言葉は、確かに彼の気を害したようだった。彼はふっとゆがんだ笑みを浮かべ、吐き捨てるように言った。

「まさか。武者震いだよ」

わたしは何だか彼が哀れで仕方がなくなった。もしわたしに別の道を提示する力があつたら、迷わずそうしていただろうに。そんなことさえ思った。

28：再会

宝はこの場で死ぬ気でいた。

この「話し合い」は予定外の出来事であつたが、いずれにせよ、宝は最初から先生をその手で殺すつもりだった。宝夫妻が死んだあの地下室で、ナオは宝に、本当に殺したい奴を直接殺せないからこんな回りくどいことをやっている、と言つた。宝から直接聞いたわけではないが、本当に殺したい奴、それはつまり他ならぬ先生のことだったのだろう。もちろん世界を壊したいという願望も偽物ではあるまい。しかしそれは二の次、本当は彼は、先生が憎くて仕方がなかつたのだ。

日本の電気さえも落ちた今、世界は既に壊れたと言つても過言ではない。となれば、先生を殺した時点で彼の目的は達成されると言えよう。

目的が達成される。それはつまり、彼の生きる目的がなくなることをも意味する。

そこでようやく、わたしは与えられた役目を果たす。わたしが宝を殺し、宝がわたしを殺す。殺し方は至ってシンプルだった。ナイフでお互いを刺す、それだけだ。そしてわたし達の死をオリゾンとワローレッドが確認し、二人は別の方法で共に死ぬ。そんなシナリオだった。

もちろん宝がオリゾンとワローレッドの死を確認できるわけがないので、二人が死ぬかどうかは二人の気持ち次第なのだが。

宝は痕跡を残したがらなかった。自分の存在を完全になき者としていらしかった。そのため最後には死体すらも跡形もなくなる予定だし、自分を深く知っている者にも出来れば死んで欲しいそうだ。わたしにはその気持ちに分からなかったが、彼がそう言うなら反対はしないつもりだった。

わたしには死が分からない。

現象としての理解はしている。思考が止まる。呼吸が止まる。心臓が止まる。血液の流れが止まる。やがて肉体は腐敗していく。どの動物にも等しく訪れる、当然の事象。しかし知りたいのはそんな事ではない。

死んだ後、その人間の精神はどこへ行く？ 肉体の腐敗と同時に、砂山のごとく崩れていくものなのか？ しかし過去の偉人達は死してなおわたし達に語り継がれ、その思想や精神は現代にも生きています。——では、語り継がれなかった者達は？ 語り継がれる人間などほんの一握り、いや、ひとつまみだ。わたし達に存在すら知られぬ大昔の人々、そんな者は砂場の砂の数ほどいるだろう。

死して、彼らの精神はどこへ行く？

宝が先生を殺し、わたしを殺し、わたしが宝を殺しても、わたし達を語り継ぐ人間などどこにもいやしない。宝の憎しみも、先生の思想も、わたしの感情も、誰にも伝えられることなく閉ざされていくのだ。

——わたし達はどこへ行く？

音は地面に吸い込まれる。

私は閉じたまぶたをゆつくりと持ち上げて、眼下に広がる世界を一望した。しかしそれはまぶたの裏の世界と何ら変わらない。ライトで窓の向こうを照らしてみても、雨粒が光を放って落ちていくだけだった。

しかし私はそれで構わないと思っていた。世界を見たいとは思わなかったから。

見てどうする？ 文字通りバケツをひっくり返したようにひっきりなしに降り続く雨、そのお陰で火は消えつつあるが、無惨にも焼け焦げた人や植物の灰、灰色のアスファルトを染め上げる黒い血液、横たわる人体に無情にも降り注いだガラスの破片。地上には足の踏み場もない。それでもまだ生きた人間が暗闇に潜んでいて肩を震わせているかもしれないと思うと、言いようもなく哀れだった。なら

ばわたしは撃ち殺してやろう、そんな気分になんた。

しかしそれは彼の望むところではない。

何も目に映らない、墨で塗りつぶされたような世界に背を向けて、わたしは窓辺から離れた。握り締めた携帯ライトで足下を照らし、暗闇に茫洋と浮かぶもう一つの明かりに歩み寄る。光が自分の足の裏と同じ高さで跳ね返って、辛うじてそこに床があるのだと分かり少しは落ち着けた。この電池はいつまで保つのだろうか。もしこの光がなくなってしまうたら、わたしは自分の身体の在処さえ分からなくなってしまう。

しかし宝優陽はそんな素振りを見せず、階段の前にまっすぐ立っていた。

両足が床に根付いたかのようにその場から一ミリも動かず、両手は身体の横に下ろしている。左手の携帯ライトは彼の身体の直線上を照らし出しているが、右手には何も持っていなかった。そして薄明かりの中、眼鏡の奥、射殺するような目が見つめる先は。

フロアの中央、南東寄りにある、階段の出口。

階段は二つあり、もう一つの出口はエレベーターを挟んだ反対側にあるのだが、そこは事前に封鎖した。どちらから現れるか分からない、というのは好ましくないからだ。気付かぬうちにこのフロアに上がってこられ、背後を突かれてはたまらない。最上階の特別展望台の階段と最下階のフットタウン屋上の階段は、それぞれオリゾン、ワローレッドに見張らせている。エレベーターなど動くはずもないのだから、人が来るとしたらこの階段しかない。今このフロアには明かりが二つ、わたしと宝しかないように見えた。

一見は。

「来た」

宝が切るように呟く。わたしはその場、彼の左斜め後ろ四十五度の位置で浮かせかけていた足を下ろした。無言のフロアに、どこからか、悠然とした足音が響いてきた。どこからか？——考えるまでもない、目の前の階段に決まっている。

わたしは素人なので判断に自信はないが、どうやら一人だけのようだ。随分とまあ、余裕のある足取りである。細い踵がゆつくりとゆつくりと金属を叩く音。わたし達を少しずつ少しずつ地下に落ちる穴へ追い込むように、それはだんだんだん高く大きく響いてくる。

わたしと宝は穴の縁をしつかりと踏みしめ、落ちることのないように足の指を曲げている。

宝は無言でライトを持ち上げ、階段の出口を照らし出した。濁った白の階段が鈍く光り、暗闇に不自然に調和する。まだそこに人の姿はない。

自分は足下を照らしたまま、わたしもそこを注視する。できるだけ感情は押し殺そうと心がけながらも、二秒に一度は視点がぶれるのを止められなかった。

そして一度強く踵を鳴らし、足音は止まった。

同時にぶれていたわたしの目が定まり、先ほどから全くずれのない光に固定された。その中に、わたしは見た。いつも通りの白いスーツをファッションモデルのごとく着こなした彼女が、汗一つ浮かべず口の両端をやおら引き上げ、階段の出口でわたし達を見つめているのを。彼女の手握られたライトは足下を向き、彼女の姿は上下二つの光に茫漠と照らし出されていた。

宝の頬が凍りついたようにこわばる。

宝の向ける光を顔面に浴びた彼女は、少しだけ眩しそうに目を細めた。柔らかく浮かべた微笑は、生き別れの弟と再会を果たした姉のようだった、

——全く、それに近いものではあるのだが。

「やあ。優陽」

ソレスティア・クリスは、地獄に堕ちてきた場違いな天使のように光を帯び、教壇に立つのと変わらぬ調子でそこに立っていた。

「話し合いに応じてくれてありがとう。しかしまあ、東京タワーと

はね。あまり疲れさせないでくれよ。私ももう若くはないんだ」

先生は冗談めかして大袈裟に肩をすくめながら、宝に向かつて歩み寄る。高い踵の音と朗々とした声が、無機質なフロアを行き場なくさまよっていた。

絵的には二対一という状況、なれど、なぜだかわたしは、こちら側が不利だというネガティブな確信を持っていた。

宝と一メートルの間隔を空けて彼女は足を止める。そして石像のように動かない彼に苦笑すると、目の前に手をかざす仕草をして見せた。

「いい加減そのライトを下げてくれないかな。眩しいのだが」

言われてようやく、宝はその腕を下ろした。わたしからは彼の顔は全て見えない。どんな色を浮かべているのか分からないが、先生は敢えて彼を無視するかのように視線を巡らせていた。

「おや。他の部下達は？確かあと二人いると聞いていたのだが」

「……オリゾンとワローレッドなら別の仕事に当たらせている」

宝が初めて彼女に口を利く。予想外に淡々とした声。しかしわたしは感じ取った、その水面下に押し殺された激情を。

先生がどう感じたかは分からない。彼女はただ意外そうな顔をしないで、それから含み笑いをした。

「そうか。それは残念だ。是非お目にかかりたかったのに」

「早く本題に入れ」

鋭く宝が遮る。今度は幾分、感情がにじみ出ていた。横柄な言い草だったが、わたしは何もとがめない。先生に向けられた視線からひたすら目を逸らし、うつむくので精一杯だった。彼女がわたしをどう考えているのか。それはこの関係ないはずで、そうあるべきなのだが、わたしはどうしても彼女の目に居心地の悪さを感じずにはいられなかった。

宝の持つライトの光が揺れる。

「何を焦っているんだ？」

先生は顎をつと上げ、嘲笑するように言った。宝の目尻がびくり

と動く。彼の纏う空気には何かを受け入れるような余裕がなかった。先生はだんまりを決め込んだ悪ガキを前にして諦めたように肩をすくめ、両の掌を上に向けた。

「……まあいいさ。お望みとあらばそうしてやろうじゃないか。私とて早くお前の返事を聞きたい心境ではある」

返事。つまり先生がこれから述べるのは、問いかけか勧誘かはたまたそれ以外か。——いずれにしろ、わたしに答える権限は恐らくない。

ちら、と微動だにしない宝を見やる。薄いシャツに包まれた頼りない肩、腕、背中。床に生えた二本の脚。

わたしは不意に、なぜこんなか細い人間がここに立っていられるのだろうという疑問を抱いた。それは全く妙な疑問であった。この六日間でわたしは、彼が歩いたり走ったり蹴ったり殴ったりするところをさんざん見たはずなのに、たった今彼がここにこうして立っていることが不思議でならないのだ。そしてそれはわたし自身にも言えることのような気がした。

しかしそれは先生について言えることではない。

「宝優陽。……いや、優陽。たった一人の、私の弟……」

彼女の頬から笑みが消え、切なげな、愛おしい言葉がわたし達の耳に届く。透き通った茶色の瞳に炎のような光を揺らめかせ、彼女はまた一歩宝に歩み寄った。きつと大昔、砂漠に照る太陽はこんな風だったのだろ。この地上の一切合切を、目に見えない空気をもゆがめてしまう絶対的な光。

宝の肩がわずかに震える。余程注意深く観察していないと気付かないような微細な動き。

ソレスティア・クリスは一度だけ逡巡するように唇を引き結ぶと、携帯ライトを持った手を強く握り締め、感情の読めない声でこう言った。

「私と新しい世界を作らないか」

29：失敗

闇の中照らし出された彼女の顔に、からかいたや冗談の色はなかった。口元に、あの余裕のある笑みがなかった。その視線の先にわたしの姿はない。彼女が問いかけているのは、ただ一人。

宝優陽は、——ソレスティア・クリスの弟は、硬直した指に携帯ライトを引っかけたまま、ぴくりとも動かなかった。

「……何を、」

こぼれた声に動揺する。

「……言っているんですか？」

先生はそれで、ようやくわたしの方を見た。さぞかし珍妙に映っただろう。一言一言発するたびに、わたしの顔にはいちいち自分への戸惑いが表れていたはずだから。

しかし裏腹に、わたしの目は揺れながらも明確に彼女の姿をとらえ、唇は言葉を紡ぎ続けた。

「……先生あなたは、」

足が勝手に前へ出て、宝の隣に並んだ。

「知っているはずです。彼が、……優陽が、あなたの弟が、あなたをどれだけ憎んでいるのか。妬んでいるのか。今ここでこうして、あなたの目の前に立っているのさえきつとやっとなんです。ここまで来るのに彼がどれだけ、」

「森崎」

先生は短く遮って、口元だけの微笑を向けた。

「いいのか？一端の部下がそんなことを言って」

「……っ」

部下。——ああ、確かに。

感情に流された自分に、痛めつけたくなるほど嫌悪する。——いつからこうなった？それはもう問うだけ無駄だ、答えなら分かり切っている——。問題はそれを理解した上で、どれだけ押し殺せるか

なのに。

ゆるりと腕を組み、彼女は身体の正面をわたしに向けた。握られたライトがあらぬ方向を照らしている。

「お前には前にも言ったがな、森崎。私は世界が崩壊しようとうでもいい。……いや、厳密に言うとそうではないな。むしろ崩壊してくれた方が嬉しいんだ」

不意に頬を擦る床の硬さが蘇る。あるときも丁度こんな暗さだった。揺れる口ウソクの炎。見上げた先生の顔。——強い光。

床に響いた彼女の言葉。

「私には目的がある」？

「……目的」

頭上に稲妻が落ちたかのように、ある考えが瞬間ひらめく。

しかしそれはあまりにも遠大で、か細くて、ささやかで、到底ありそうもない考えだった。先生のような人間がそんな考えに行き着くとは思えなかった。先生のような、底の知れない、深遠な雰囲気をもとった人間が。——それでもわたしは、今までの先生の言動を合わせると、それ以外に考えられなかったのだ。

「鍵を握るのは宝優陽」。

「……優陽に世界を壊させて、」

先生は確実にわたし達を捕らえることができた。それなのにわざと泳がせていたのだ。その「目的」のために、優陽に世界を破壊させるために。

「彼にはまだ消えてもらっては困るのだよ」。

「あなたが世界を再構築する」

そんな。——そんな夢みたいな話が。

「……それがあなたの目的ですか」

彼女が望む世界で、固定された観念、習慣、社会の仕組み、その一切を打ち壊した彼女の求める理想の世界で。

たった一人の弟とともに生きようという、ささやかな望み。

なんて人間くさい結論に到ったのだろっ、わたしは！そしてなぜ

それが最も的確だと信じて疑わないのだろうか？他の可能性は山ほどあるはずなのに、それが何よりも理にかなっていると思えて仕方がないのだ——なんという希望的観測。

先生はじつとわたしを見据えて黙っていた。わたしの言葉を笑いはしなかった。あまりに見当はずれだと、お前はやっぱりその程度かと、わたしを笑いはしなかった。かといって図星をつかれて狼狽したりもしない。ただ深く、じつとわたしを見据えていた。

しかしややあつて先生はふつとその目を伏せ、諦めたように両手を広げた。

「馬鹿げていると思うだろう？その優陽と大して変わらない、誇大妄想みたいな話だ」

自嘲気味な苦笑を、顔面一杯に押し広げて。しかし完全に自己を否定している様子ではなかった。

わたしは額を押さえる。——眩暈のしそうな話だ。

わたしの稲妻のようなひらめきは、果たして当たっていた。同じ生き物だったのだ、彼女も彼も。一様に回る世界に飽き飽きしているのは恐らくほとんどの地球人に共通のこと。問題はその回転に乗るか逆らうか。——大体これすらも定型化している。若い時分に一度は逆らおうと試みて、逆らえきれずに乗せられて、そうして次に逆らおうとする青い人間を笑うのだ。乗るしかない、結局はこれが最も無難な生き方なんだ、そう自分に言い聞かせて。——わたし自身がきつとそうだった。

それでもなお諦めきれずに、最後には回転の方向すら変えてみせた人間。それが宝だった。

宝は子供だ。同い年のわたしが見てもそう思う。子供で、——ひたすら一途であるが故に、偶然持つて生まれた才能でここまでのことをしてかした。その才能がなければただの痛々しい十代だったはずだ。先生もそこに気付いていて、そして、氷のような目で見下ろしているのだと、そう思っていた。

しかし——彼女はその上に行く才能で、彼を利用し悪足掻きを企

んでいたのだ。

「私はな森崎。別にこの世界が嫌いなわけじゃないんだよ」

彼女は足下も照らさずに、ゆっくりと歩き出した。その視線はわたし達の向こう側、黒一色に塗り潰された世界に向けられている。

彼女が脇を通り過ぎたとき、宝は身構えもしなかった。

「……だが別段好きでもない。だからお前達が壊すのに反対はしなかった。ただな、私はまだ死にたくはないんだ」

わたし達のすぐ後ろで立ち止まり、くると外に背を向ける。わたしも向きを変えて彼女を正面に見据え、その目の奥を探った。宝は彼女に背を向けたまま動かない。何も言わない。何を考えているのかも分からない。

彼女は彼の無言の背中をじっと見つめた。背中から入り込んで、体内の隅々までを見回すような視線。彼の背は穴だらけだ。

彼女は空気がこわばるまでそうしていたが、やおら赤い唇を開くと、低い声でこう言った。

「お前ここで私を殺すつもりだろう」

凍った手で心臓を握りつぶされたような気がした。

それが顔に出ていたかは分からない。ただわたしは黙って、眼球だけ動かして宝を横目に見た。彼は握ったライトで無機質な床を照らし続けている。眼鏡がその光と平行に傾いていた。

先生は期待する答えなどないと言わんばかりに、平坦な口調でさらに続ける。

「何の企みもなく話し合いに応じてもらおうなんて虫のいいことは考えていないさ。最初からその覚悟だ。……だが、なあ、そうまでしてでもお前に言いたかったんだよ。世界がつまらないなら一旦壊して面白く建て直せばいい。壊しっぱなしにするのではなくてな。不可能じゃない。私や森崎、それにお前が……」

彼女の目は瞬きもせず、宝優陽の背中を見つめている。

頼りない、狭い、薄い背中。

わたしががりついてきたこの背に、彼女は何を思うのだろう。

ゆっくりと吸い込まれる息。そしてたった一人に、彼女のライトは光を当てた。

「私の弟であるお前がいれば」

宝の肩がはつきりと震えた。

わたしは思わず、八重歯で唇を噛む。――嫌な人だ。彼の動揺を分かっている。新しい世界を作る？なるほど、彼女になら可能かもしれない。いや、きっとそうに違いないのだ。この世に彼女の思い通りにならないものなどない、何の根拠もない話だが、彼女になら賽の目でさえも操れそうな気がしていた。

だからきつと、宝が動揺の末どちらに転ぶかも分かっていたはずなのに。

「……つぎけるな……」

低い声がかすかに空気を震わす。確かにわたしの隣から聞こえてきた。

宝は顔をうつむけたまま、彼女に背を向けたまま、骨の浮かんできた拳を握る。

「ふざけるな……。僕が、お前を、……お前らを、許せるとも思っているのか。……あいつらも！お前も！……僕を捨てたくせに！」

振り絞られた声に、わたしは安堵したような、嘆いてすがって必死に説得したくなるような、矛盾した二つの感情に同時に襲われた。何でだかは分からない。そのくせわたしの目は先生を真正面にとらえた上で、宝が振り返るのを端に映していた。

今の宝は、三日前にあの地下室で見た彼によく似ていた。体中から溢れ出すものに、皮膚の表面の何かが押し剥がされているのだ。白い腕が暗闇に浮かび上がり、筋が見えた。

「お前は僕が生まれたとき、それが何であるかを知っていた。それがどうやってできたのか、知っていたはずなんだ！そしてそれがどうという理由で、クリス家から離されたのかも！——知っていながら見捨てた！自分の身が可愛いから！違うか！？」

ソレスティア「クリスは口を閉ざしていた。ただ世界の闇に背を向けて、自分の目が見えないのを社会のせいにする子供を見るような、痛ましげな目で弟を見つめていた。

クリス博士夫婦は、彼女への悪影響を恐れてクローン体を引き離れた。――悪影響？何がどう悪影響だというのだ。わたしには分からない。わたしの知らない専門的な「悪影響」が、博士夫婦の間では予測されたのかもしれない。きっと素人には分かり得ない悪影響――きっと宝優陽にも分からない悪影響。

分かり得ないもどかしさが憎悪へと変形し、彼らへと向かう。

「……確かに」

先生はまぶたを伏せ、しかしわめて冷静に言った。

「私は知っていた。……お前がどのようにして生まれたか、どうして我々と引き離されたのか」

その声色に罪悪感や陳謝の気持ちは見受けられず、ただ淡々と事実を語っているだけだった。それだけで、宝を突き放すには十分だったのだ。

彼の細い指が、砕けそうなほどに強く握り締められる。

「……はっ。そら、本音が出た」

悲愴な笑いだ。不自然に頬を引きつらせ、彼は弱りかけのライトを彼女の顔面に向けた。

「最初から僕のことを邪魔だったんだろう。当たり前だ。クローンなんて不自然な生まれ方をした弟、気味が悪いし、親の注意だってそっちに向いてしまうかもしれないから！良かったじゃないか、親も僕を邪魔者扱いして！お前のことを一番可愛がっていて！」「彼の言葉の一つ一つが、針のようにわたしに刺さる。泣いているように見えた。彼が大声で、泣きじゃくっているように見えた。――もちろんそんなのはただの錯覚で、彼はただ狂気じみて笑っているだけだったが。

弱い光が先生の顔から下ろされる。代わりに彼の足元がうつすらと明るくなり、動きやすそうなスニーカーだけが皮肉に浮かび上が

った。

「生まれてこなければ良かったのに……」

力無い呟きは、彼女の耳にも入ったはずだ。

——生まれるべきじゃないのに。

以前彼はそう言つて、わたしに殺されることを望んだ。

「……瞳」

「——、何」

実に数時間ぶりに呼ばれた名は、強い意志を含んでいた。彼はゆらりと首をもたげ、度の入っていないレンズ越しにわたしを見据える。

「……二人を連れてこい。ここに」

彼の言葉は真っ先にわたしの息を止めた。

二人、——あの二人だ。

「……優陽それは、」

「早く」

迷いのない鋭い眼光が、彼の取るであろう行動を全て物語っていた。わたしは知っている、彼のズボンのポケットに何が入っているのか——。固い、無骨な黒い塊。彼はきつとそれを使って二人、を、

「……分かった」

——それでもわたしは頷くしかないのだ。

足下を照らしながら、わたしは静かにその場を離れた。暗闇に慣れたことには喜ぶべきなのだろうか？——べきなのだ。わたしはきつともう二度と、光など拝めないのだから。

三人しかいないように見えた、このフロア。呼吸をしていたのはわたし達だけではなかった。

わたしは階段の脇の売店に足を踏み入れた。数枚の壁に囲まれた半閉鎖的な空間。そこには光が届かない。十分な条件だった。その二人の口には猿ぐつわで塞いであるし、今まで大人しくしていたところを見ると、もう暴れる気力もないのだろう。

壁の裏に回り、そこにいた二人にライトを当てる。布越しにも目に光が届いたのだろう、二人は痙攣したように頭を持ち上げ、何も見えていない顔をこちらに向けた。——そんな顔をされても困る。すがられたって、わたしには何もできないのだ。

わたしは二人の乗っている荷台を引いて、売店から出した。こうしているとまるで人間でない、何か別の物体のようだ。移動させられる最中、二人は小さく身じろぎをして何事かうなっていた。残念ながらそれは言語の形を取っていなかった。

宝と先生の間割って入るように荷台を止める。先生は既にその二人が誰か気付いていたようで、悲しみの色をにじませてため息を漏らした。

「……父さんに、母さんか」

——さすがに。目隠しをされ、猿ぐつわを嚙まされていても、両親の顔は判別できるか。

宝は黙ってしゃがみ込み、クリス博士夫婦の目隠しを解いた。衰弱しきった茶色の瞳が、それでも、最後の力を振り絞って宝にすりついている。——宝によく似た、目。夫人の方は、先生によく似ていた。見るのは初めてだ。

宝がワローレッドに命じて連れてこさせたのは、東京の高層ホテルに滞在していたこの二人だった。宝がアメリカの破壊を決行する数日前に来日していたらしい。宝はそれを、知っていた。——そして恐らく、だからこそそのとき、破壊を始めたのだ。

彼らの滞在していた階は一般的なビルよりかなり高い位置にあり、空中道路で他のものと連結していなかった。だからこそ無事だったわけだが——それも虚しく、ジェットで侵入したワローレッドにいとまやすく捕らえられてしまったのだ。

夫婦は美しい人であった。妻のシンシアは先生と同じ柔らかなダークブラウンの髪を持ち、捕まる前はきつく結い上げてあった。今はそれもほつれ、あちこちから力なくはみ出している。また規則正しい生活に戻してやれば張りのある頬に戻るのだろうが、今はやつ

れて細かい皺が刻まれていた。夫のキーツは、なるほど、日本人とも偽れそうな顔立ちである。しかし鼻筋が通っていて、欧米人の血が混じっているのは明らかに見て取れる。――数十年後の宝を見ているようだった。

当たり前だ。彼は、宝優陽の源なのだから。

「僕はお前達を父親とも母親とも呼べない」

しゃがみ込んだまま、宝が囁く。荷台の上に身体を折り曲げた夫婦は、苦しそうに眉根を寄せ、彼を懸命に見上げていた。

「確かに僕はシンシア・クリスの胎内で育った。でもその血は流れていない。確かに僕はキーツ・クリスの血を受け継いでいる。けどそれは不自然な百パーセントだ。――僕はお前そのものだ。親子とは言えない。……じゃあ僕は何だ？」

不毛な自問自答。答えは出ない、そう分かり切っている。

荷台を握る自分の手が冷たい。わたしは黙って三人を見下ろしていた。先生も唇を固く閉ざして三人を見下ろしていた。――何を考えているのか。その猿ぐつわを解いてやることぐらいできただろうに。

夫婦は荷台に頬をこすりつけて、しきりと首を横に振っていた。渴いた喉を無理矢理に震わすが、錆びたドアが閉まっていくような聞き苦しい音しか出ない。二人とも大きな目が濡れて、ライトに光っていた。

彼らが宝に何か訴えようとしているのは明白だ。しかし、宝が――宝が、それを受け入れるわけがあるのか？

否。

彼は微笑んでいた。ゆがんだ微笑だ。レンズの奥が洞穴のように暗い。

「憎んでいるよ。こんな僕を作ったお前らを」

右手がズボンのポケットに伸びる。わたしは目を伏せ、冷たい指で耳を塞ぐ。心の中で、たった一つの言葉を呟きながら。

――ごめんなさい。

「さようなら」

塞いだ耳の隙間から、室の囁きだけがやけに鮮明に届いた。続
ざまに銃声が二発、どこか遠いところからのように聞こえた。

目を開けたとき、夫婦は既にわたしの足下で事切れていた。宝夫妻のときと同じように、額の真ん中に綺麗な風穴が開いている。宝のズニーカーに血が染み込んでいった。わたしはもう一度目を伏せ、もう一度心の中で同じ言葉を繰り返した。

「は、」

小さな笑いが漏れる。もちろんわたしではない。先生でもない。

——宝がぐつと顔をうつむけて、その細い肩を震わしていた。

「は、
は、
は、
は、
は！
は
は
は
は
は
は！」

金切り声のような笑い声を上げて、彼は前触れもなくがばりと立ち上がる。ずれた眼鏡を鼻に掛け、充血した目が落ちんばかりに飛び出してゐた。平生では有り得ないほど口を開けて笑うその様は、いかれたからくり人形のようなだった。先生はどう感じていたのか分からない。彼女は祈るように両親を見つめ、胸の前で十字を切つてゐた。――また大層、古くさい仕草だ。

宝は未だ硝煙の上る銃口を彼女に突きつけ、きつく眉間に皺を寄せた。

「随分と余裕があるんだな。分かってるだろう、次はお前の番だ！」

しかし彼女は静かに目を伏せ、ただただ両親の死を悼むばかりだ。

わたしはそれで、眉をひそめた。悼むくらいなら助ければ良かったのに。彼女になら可能だったはずだ。わたしの手から荷台を奪つて、彼から離れた場所へ運んでいく——。ひとまずはそれで、延命できたはずなのに。

——いや。そこまで考えて頭を振る。——延命したところでどうなる？恐らく彼はなおも執拗に二人を追いかけて、引き金を引き続けるだろう。いくら先生とは言え、荷台に人二人を乗せたまま全てを

守りきるのは難しい。逃げようにも階段は荷台を持つては走れない。結局、クリス夫婦は死ぬことになるのだ。下手をすれば先生自身も——結果的に見殺しにしたことになるとはいえ、彼女らしい冷静な判断といえるだろう。

「……優陽」

再びまぶたを上げたとき、彼女は言った。

「本当に、これで良かったのか……？」

違和感があった。

彼女の目には、同情するような、気の毒そうな色があった。それはいい。死んだ両親への哀れみ、そして彼らを殺した宝への哀れみ。わたしですらも感じた、この場においては当然の感情だ。しかし——

違う。——何か得体の知れない違和感が、今の彼女にはある。

宝もそれを感じ取ったのかどうか、ぴくりと眉をつり上げる。先生は向けられた銃口には目もくれず、曲がりのない目で宝だけを見つめていた。

「確かにこの二人は、お前をクリス家から引き離した。理由はどうあれ、それは事実だ」

「理由はどうか？」

宝は口の端を持ち上げ皮肉に笑う。

「理由なんか分かり切っているさ。お前に悪影響を及ぼすからだ。」

……僕がクローン人間だからだ！」

そうだ。納得できない理由。そのために彼は否定され、憎しみが生まれた。

はずなのだ。

「本当にそうなのか？」

——はずなのだ。

違和感が増し、肌が粟立つ。——何だ、これは？先生の言葉に伴う、つかめぬ違和感。見えない、だが、確実に存在する違和感——。

それはわたし達と彼女との間に生じている。

「……何が言いたい」

宝が心持ち銃口を上げる。先生は一度瞬きをし、くつと顎を引いて彼を強く見据えた。

「お前がクローンであるというその確証。……それがどこにある？」

背筋を百足が這い上がっていくような感覚が襲う。

違う。——違和感の正体がおぼろげに分かってくる。彼女はわたし達と、見えているところが違うのだ。

「どこって、」

宝がやや狼狽気味に眉を寄せた。

「こいつらの研究所のコンピューターだよ。そこに入っていたデータに明記されて、」

「それが偽造でないという証拠は？」

宝が大きく息を呑んだ。

問いただすような強い語気。先生はさらに矢継ぎ早に口を回し、にじり寄るようにぐつと顔を押し出した。

「全て研究所の企みであったと言い切れない根拠は？何らかの理由でクローン人間の存在をでっち上げなければならなかったという可能性は？お前とキーツィクリスのDNAが一致するという確固たるデータは？」

彼女は、わたし達の上から。もつと遠くから。

わたし達がその一部しか見えていないものの、全体像を一望している。

「お前が——クローン人間であるという揺るぎない証拠は？」

こめかみを押さえる。脳がひどく、痺れるように痛んだ。拒否している、その可能性を。彼女の言わんとすることを。

「……馬鹿な」

宝の声が掠れている。銃口が傾いて、どこも向いていなかった。

「嘘だ。僕はちゃんと見た。確かにあの研究所のコンピューターに

侵入して、データを……」

「目先の事実に関われるな、優陽。それは全て、お前が一人で調べて勝手に納得しただけの記録だ」

彼女はちらりと足下の死体を一瞥し、今度はわたしの方を向いた。

「なあ森崎。宝夫妻は優陽がキーツのクローンであると、一度でも明言したか？」

わたしは下唇を内巻きにして嚙んだ。訊かれるまでもない。その前にわたしは自分の記憶をあさっていたのだ。

「……いいえ」

そう——確かに夫妻は、彼がクローンだとは一言も言っていなかった。

ヒトクローンの研究。その成功例。宝の生みの親。——これらのキーワードだけで、わたしは完全に早とちりしてしまっていたのだ。

「続けて訊こう。このクリス夫婦の口からも、そのようなことは聞かされたか？」

「……いいえ……」

ワローレッドが二人を連れてきてから、宝は何も言わず、何も言わず、直ちにあの状態にして閉じ込めさせた。わたしは声すら聞いていないのだ。

「……そういうことだ、優陽」

先生は風いだ目を宝に向ける。今頃になつて事実の輪郭をとらえ始めた、哀れな弟に。

「お前は仮説だけで物事を進めすぎた。私は事実を知っている。……何のことはない、お前はただの人間だったんだ」

宝は白い頬を凍りつかせ、焦げ茶色の瞳で姉の姿を凝視している。

「お前の母はシンシア・クリス、お前の父はキーツ・クリス。……二人分の血が混じった、紛れもなく真つ当な人間なんだよ」

そんな話があるだろうか。

要するに、勘違いだったのだ。彼がクローンであり、生まれるべくして生まれたのではないと言うことは。

少ない情報だけでそうと思い込んでしまった宝、それにわたしの、完全なる失敗だった。

「……嘘だ」

宝は最早、腕を上げてすらいなかった。緩んだ指から黒い銃がこぼれ、血の池に落下する。二人分の血が跳ねて、宝のズボンに模様を作った。

「嘘だ。嘘だ、嘘だ、嘘だ……」

彼の行動の根本を為すものが、ほとんど取り去られたと言っても過言ではないだろう。それは動機だったのだ。彼の全ての行動の動機だったのだ。それがなくなっただけ、彼は一体何を支えにして動けばいい？——分からない、少なくともわたしには。

「信じなくてもいい。ただ、それが私の知る事実なんだ。それだけは分かっている」

先生との間に生じていた違和感がようやくなくなる。しかし代わりに、それよりももっと大きな虚脱感がその場所を占めていた。

——どうして。

「……どうして」

浮かんだ疑問が口を出る。先生はやや距離を置いて、静かな目をわたしに向けた。

「それならどうして、クリス博士夫婦は優陽を捨てたんですか……」

宝が弱々しく顔を上げる。だけどわたしは、宝をかばうためにこんなことを言っているんじゃない。

「宝がクローンだからこそ、あなたに悪影響を及ぼすので、引き離した。わたし達は、……少なくともわたしは、そういうことで納得したんです。じゃなきゃおかしい。あなた方姉弟がただ一緒にいる

だけで、何の問題があるんですか。何が悪いんですか。二人ともただの人間なら、」

「ところが森崎」

唐突に、彼女は妙に声高にわたしの言葉を遮った。彼女らしくない、覇気のない微笑を口元に浮かべ、どこか哀しげな目の色をする。

「クローン人間はいるのだよ」

宝の目が見開かれ、瞳が揺れる。

一瞬、頭の中が漂白された。そしてすぐに嫌な色の仮説が染み出してくる。恐らく宝も同じ気持ちなのだろう。元々白かった頬から、さらに血の気が失せていく。

片方が片方に悪影響を及ぼす。仮に本当にその理由で二人が引き離されたでしょう。彼女の話によると、宝はクローンではない。しかし二人ともただの人間ならば、引き離す必要はない。となると、最後のパターンは。

クローン人間は、いる。

わたしは足下の死体のうち、女性の方を見た。口は猿ぐつわで、目は閉じられているが、それでも大まかな顔の作りは分かる。痩せこけた頬に脳内で肉付けすれば、簡単に想像ができた。輪郭、鼻筋、目の形や色、髪質――。そして目の前に立って微笑する、この若い女性を見た。

――似ている。

彼女は羽を広げるようにその細い両手を広げた。闇と白のコントラスト。何もかもを受け止める長い指。教壇で揺れていた豊かな髪。

真つ赤な唇が惜しみなく発する言葉。

「私がクローンだ」

31：真実

夫婦には子供がなかった。

妻・シンシアが結婚直前に病を患い、その影響で非常に子供がでにくい体質になってしまったのだ。作られる卵という卵に、ほとんど受精機能が備わっていなかった。そのため体外受精もほぼ無理かねてより子供を切望していた二人にとって、そのことは甚大なショックであった。シンシアの病完治後二人は予定通り結婚したが、そこに幸福は見られなかった。

二人は元々、クローン研究施設の同僚だった。結婚したのは、夫・キーツが中心となってヒトクローンの研究を進めている最中のことだ。

どうしても子供が欲しい――。そこで二人は、ある結論を導いた。

ヒトクローンの作製である。

長年研究は続けてきたものの、実際に作製に踏み出したことはただの一度もなかった。アデレード・ライト博士の先例もあり、迂闊には手を出せなかったのだ。ちなみに言うと、アデレード氏は自殺の直前研究資料を知り合いの科学者に託しているが、それはクリス夫婦のことである。

その資料を基に、自分達で作製を開始する。

一種の賭だった。それでもし成功したら、そのクローンを「奇跡的に賜った自分達の子供」として育てる。失敗したら、子供のこと是一切諦めて、金輪際口にしない。――どちらに転んでも納得できるように、夫婦が、長い話し合いの末に出した結論だった。

そして誕生したのがソレスティアだ。

作製は成功も成功、シンシアのクローン体は普通の赤子と何ら変わらぬ健康体で生まれてきた。生後三年間、夫婦はその子を人目に付かぬよう育てるが、何の異変もありはしない。そこで二人はその

子をただの子供として表に出し、アメリカの世界立幼稚園に入園させた。娘は聡明で、毎年の進級テストにも一番の成績で合格していた。夫婦は彼女の成長を素直に喜んだ。彼女を後にも先にもない唯一の子供として大切に育てた。しかし一方、一ヶ月に一度は彼女の身体に異常がないか厳密に検査していた。彼女には「ただの健康診断だ」と偽りながら。

しかし、先に異変が起きたのは夫婦の方だった。

シンシアが妊娠したのだ。人工ではなく、自然に。——実に何億分の一という確率で。作られた卵の中にたまたま受精機能を失っていないものがあり、たまたま受精が成立し、一人の人間が発生した——。そんな奇跡のような連鎖が、実際にシンシアの中で起こってしまった。

十年前なら狂喜したであろうこの状況に、二人は恐れ、戸惑った。世間的には十年前にその奇跡が起こり、ソレスティアが生まれたことになっているのだ。そして奇跡は二度と起こらないから奇跡なのであり、偶然にもまた子供ができた、などと言うのはいくら何でも無理がある。——いいや、本当の問題はそこではない。

夫婦には、この子を愛せる自信がなかった。

二人にとってはソレスティアが唯一無二の存在だったのだ。他の可能性などはなから捨てていた。ましてクローン、いつ変化が起るか分からない。そのこともあって、彼らは愛情の全てをソレスティアに注いでいた。そこに予期せぬ、第二の子の存在。——愛情を分かつことが、彼らにできただろうか？

——否。

夫婦はとりあえず妊娠の事実を娘に隠し、シンシアの腹が目立つようになると病氣と偽って入院させた。——中絶。それも可能だったかもしれない。しかし、いくら愛せないとはいえ——何億分の一の確率で授かった、一つの命なのだ。

シンシアは、その子を産んだ。男児で、キーツによく似ていた。二人はその子を、自分達より少し若い、子のない日本人夫婦に預

けると決めた。同じ研究所の部下で、二人が最も信頼を寄せていた宝夫妻だ。二人は彼らに全ての事情を説明した。そして決して口外しないことを約束させ、日本に返したのだ。

一連のことは、もちろんソレスティアには秘密であった。ソレスティアも両親に何も訊かなかった。しかし恐らく、二人はある程度予想していたのだろう。ソレスティアは既にシンシアの妊娠に勘づいていた。彼女が自力で研究所のコンピューターに侵入し、情報収集する可能性もある、と。もしそこに、新たに生まれた子に関する記録が一切なければ、彼女はきつとまた別の方向から調査を始める。それで真実に辿り着いてしまつてはまずい。彼らは、ソレスティアをあくまで「普通の人間」として育てたかったのだ。そこで――夫婦は偽のデータを作り、わざとコンピューター内に置いておくことにした。二人の間に生まれた子がクローンであるという、偽のデータを。

「実際私は最初、そのデータを信じて疑わなかった」

先生は自嘲気味に笑つて肩をすくめた。

「最初……と言つかな。結構最近までだ。……優陽、お前が世界立美術館から盗みを働いた、そのときまでだよ」

となると、三年前ということになるうか。彼女が日本に来て、彼の調査をしたとき。

「お前のいないところで、私は宝夫妻と会つた。そして、私が優陽に関するデータを見たという旨を伝えたんだ。彼らどう反応したと思う？……おかしいことに、すこぶる冷静だったんだよ。ちよつと驚いた顔をしてみせて、そうですか、だとさ。……偽データの可能性が浮かんだのはそのときだ」

そのデータが本当に隠したいものであれば、そんなに冷静でいられるのは常識的に見ておかしい。宝夫妻は頭の固そうな人だった。きつと演技も下手だったのだろう。

「そこで私は、その場で思いついたはつたりをかましてみた。内容

はこうだ。『本当にクローンなのは優陽ではなく、私でないのか』。すると二人どうしたと思う？目玉が落ちそうなほどひん向いて、唇を震わせて、真っ青になったんだ。分かりやすいにも程がある」
偽造データしか見ていないと思わせておいて、突然ずばり真相を言い当てたら、そりゃあそんな風にもなるだろう。先生の頭の回転の速さには敬服する。

「先生はそのとき、どう……？」

尋ねると、彼女は苦笑する。自分が今学校にいと錯覚してしま
いそうな、あまりにも自然な表情。

「何とも。あー、なるほどな。そういうパターンもありだな、
と。自分がクローンであることについては特に何も。むしろ昔から
さんざん色んな検査されてきた理由が分かってすっきりというか」
彼女がどんな子供時代を過ごしてきたのか、詳しくは分からない。
ただ、弱冠二十二歳で彼女を達観させるようなものだったことは確
かだ。

窓の外にわずかながら光が漏れ、次々と落ちていく雨粒がやけに
美しく光る。ここより遙か下方、犠牲者達の骸に降り注ぐために。
不意に彼女の口元から笑みの形が消え、唇がほんの数ミリ開かれ
た。

「ただ、そのとき私は最も強くこの世界を憎んだよ」
凍てついた、無表情な響き。

わずかな隙間から吹雪のように吹き出してくる。
その冷気にやられたみたいに、背筋に悪寒が走った。無表情なの
だ、彼女は今、ひどく――。それなのに、どんな微笑よりも、どん
な苦笑よりも、わたしはこの無表情に強く彼女の感情を感じ取った。

底知れぬ憎悪。

「……なあ、だから優陽」

かと思えば次の言葉は、羽毛の柔らかさを持って発された。彼女は
ライトの光をやや持ち上げて、宝の顔に向ける。彼は眩しがりも

しなかった。視線と床が直角になっていたから。

「お前は何も悪くないんだ。お前は作られた人間なんかじゃない。純粹に偶然の産物なんだ。……生まれるべきでなかったのは、私の方なんだよ」

自分を貶め、弟を肯定しようというのか――。

恐らく彼女には、自尊心というものがない。いや、正確に言うと、自尊心がないということがそれ単体で存在しているわけではない。要するに彼女は――目的のためなら手段を問わない人だった。それが例え、自己を否定するようなことになっても。

そしてこの場合、その目的は宝を説得することにある。

「……偶然の産物？」

やがて宝がぼそりと呟く。相変わらず、視線は床と直角のまま。

「ああそうだ。私のように人工的ではなく、自然的に生まれた存在なんだ」

「自然的に……？」

「そうだと」

鬱状態の生徒を励ます教師のように、彼女は大きく頷いてみせる。ああ、――いや、実際そうなのだ。二人の関係は、敵と敵であり、姉と弟であり、教師と生徒なのである。

――なんとも。

「……」

唐突に宝の身体が揺れる。顔も上げないまま、彼はその場に腰をかがめた。スニーカーに染みた血は既に乾き始め、茶色く変色している。

彼はその足をわずかにずらし、血だまりに落ちていたものを手に取った。

「！優陽……」

思わず声を上げるも、わたしに彼を止めることはできなかった。血に染まった彼の指が、鈍く黒光りするそれを強く握り締めて、お

もむろに先生に向ける。先生はしかし、その暗く小さな穴を見ても、身を緊張させもしなかった。

銃。

「……安心したよ……」

ようやく上げられた彼の顔には、震える微笑が宿っていた。

「やっぱり僕は、間違っていないかった。お前を、クリス夫婦を、憎んで正解だったんだ」

そう言う彼の口調は苦しげで、弱々しい。

「優陽、どうして」

「自然であれ人工であれ」

わたしの言葉を精一杯の強さで遮る。目元がゆがんで、泣き出す子供のように見えた。

「ソレスティア・クリスという人間は必要とされ、宝優陽という人間は必要とされていなかった。お前は生まれるべき人間で、僕はそうでなかった。……そこには何の変わりもないだろう」

声が詰まって出なくなる。

彼の言うことは正論だ。何一つ間違っていない。——大層哀しい、残念な話ではあるが。

「そんなことない」なんて軽々しく言えるほど、わたしは愚かな人間ではない。そして、今はその愚かさがどうしようもなく羨ましかった。

彼の左手が銃に添えられる。白い指が見る間に赤く汚れていった。口角がほとんど痙攣を起こし、それでも彼は、笑っている。

「だから、殺す。お前を殺して、瞳を殺して、僕は瞳に殺される。」

……それで全てが成り立つんだ。僕の望みは叶えられるんだ」

彼が先生を撃ち。血に染まった手の彼を、わたしはナイフで刺すだろう。そして同時に、彼もわたしをナイフで刺す。——そんな胸糞の悪いシナリオが、わたし達の間ではでき上がっていた。

もし——無事にこれが終わったら。

「……そうか」

吐息に乗せて先生が呟く。その目はまた最初の頃のような、哀れみの色をにじませていた。

「残念だ。とても——残念だよ」

そして彼女はスーツの内ポケットに手を入れると、刹那の速さで何かを取り出した。宝が身をこわばらせ、トリガーに掛けた指に力を込める。しかし彼が撃つよりも早く、先生は取り出したものを宝の目の前に突き出していた。宝の指はすんでの所で固まり、身構えたわたしも中途半端な姿勢で固まる。

わたしはコンマ数秒息を止めた。わたしも、そして当然宝にも、その物に見覚えがあった。

「それは……」

それはリモートコントローラーであった。やつつけで作りましたと言わんばかりのひどく簡素な作りの物で、掌サイズの黒いボディの真ん中に、丸い赤ボタンが突出している。右上には安っぽいアンテナ。他には何もない。

しかしわたし達にとって、それは非常に重大な意味を持つ物であった。

「……なぜお前が持っている。オリゾンが持っていたはずだ……！」

オリゾンが宝に命じられて作った物の一つ。しかし本体はそれではなくて、これはいわば付属品のような物だ。

オリゾンが作った物——時限爆弾。

これはその、作動スイッチである。

先生はその手を引つ込めて、何も言わずに手品師みたいに笑った。わたしの胸に一抹の不安が生じ、それが素直に口が出る。

「まさか殺したんじゃない——」

「おいおい」

彼女はインチキだと因縁をつけられたみたいに肩をすくめてみせた。

「私がそんなことをすると思うか？ 無駄な殺生は好まないよ。……」

これは落ちていたのさ。私は拾っただけだ」

「拾った？」

宝が眉をひそめる。

「どこで」

彼の顔には焦燥が露わになっていた。わたしとしてもこれ以上の混乱は避けたい。けれど先生は、そんなわたし達を挑発するかのようにつつと顎を上げて笑った。

「さあねえ……。近くにその本人がいたことだけは確かだが」

「……オリゾンさんが？」

近くにいながら、リモコンを落とし、先生が拾うのを黙って見過ごした――？

有り得ないことのように思えた。わたしの知る限り彼女は真面目な人物で、その真面目さを遂行するだけの能力を持っている。彼女の体術なら先生と渡り合うことも、――いや、ことによると上回ることもさえも可能かもしれない。――そもそもわたしは、先生の力をよく知らないのだが。

「どういうことだ」

宝が苛々と銃口を上げる。

「オリゾンがそんな大事な物を落とすなんて、間抜けな真似をするわけがない。どうせお前が何かしたんだろう。言え、何を、」
ぱん。

「……え？」

わたし達のすぐ後ろから、鼓膜を貫く破裂音が聞こえた。

32：反逆

火薬のにおい。慣れ始めていた鼻を、再びくすぐり出す。わたしは振り向いた。そこには新しい光があった。わたしのでも、宝のでも、先生でもないライトの光。それは力無く床を照らし、どこを向いてもいない。

そしてそこには確かに、人がいた。つばの広い帽子を目深にかぶった女性が。

——足音に気付かなかった。

「……オリゾン、さん？」

わたしはライトの光をその人物に向ける。階段の出口、そこに立っていたのは、オリゾンその人で間違いなかった。白い帽子に、白いワンピース。ただ、いつもと違うのは——あの踵の高い靴を履いていないことと、こちらに銃口を向けていることと、——その腕と、白いワンピースの胸の辺りが、べったりと汚れていることだ。

赤い。

「……何の真似だ、オリゾン……」

宝が苦しげにゆがんだ顔を彼女に向ける。その右肩を見てわたしは静かに血の気が失せるのを感じた。失せた分が、彼の右肩から流れ出ているのかもしれない。——小さな穴がそこに開通して、赤色が浸食するようにシャツに染み込んでいた。

彼女は暗く口を閉ざしたまま、糸が切れたようにがくと銃を下ろした。帽子のつばが影になり、その表情は読みとれない。

「まさか本当に、君がリモコンを落とし、ソレスティアがそれを拾うのを黙認したっていうのか……？」

オリゾンはうつむいたまま動かない。

痛みのためか怒りのためか、宝は消せないほど深く眉間に皺を刻みつけ、八重歯で唇に血をにじませた。

「……裏切ったのか……！」

悲痛なうなりは、彼女に届いたのか。

不意に、彼女はつと、ほんのわずかに顔を上げた。長い金色の前髪が流れるように揺れて、その隙間からアクアマリンの瞳が覗く。

その石の冷たさ！

「……裏切り……？」

低く、小さな声が、それでも確実にわたし達の耳に潜り込む。

「……裏切ったのはどっちですか……」

重々しく開かれる、乾いた唇。——いつもの穏やかな侯爵令嬢の面影はない。感じられるのは、確かな憎悪。

「……一緒に死なせてくれるって言いたくせに……！」

最も深い悲哀を持つて発せられた言葉は、わたし達にとって全く意味の取れないものだった。

一緒に？——誰と？——決まっている。ワローレッドだ。あのホテルの一室、彼女は珍しく照れくさそうにそう言った。彼女の中に初めて垣間見た人間くささだったから、よく覚えている。

その、ワローレッドが、どうか——？

宝も同じことを考えているらしい。大きな目に当惑がありありとうかがえる。ワローレッドなら、フットタウンの屋上で階段の見張りをしていたはずだ。

オリゾンはやおらこちらに背を向け、奥に手を伸ばして腰をかがめた。床の上に何かあるようで、それを拾い上げたのだ。露わになった細い肩がこわばっている。

そして振り返った彼女が、大事そうに抱えていたものは。

「……っ」

オリゾンの腕の中のそれに、全身の呼吸という呼吸が止まった。頭、だった。どう見ても人間の、頭部だったのだ。本来は身体につながっているべき首から上、それが今独立してオリゾンに抱かれている。切断面からぼたり、ぼたりと血のしずくが地面に落ちていた。皮膚は土気色で乾燥している。まぶたは閉じられているが、わ

たしはその顔を知っていた。

知らないわけがないのだ。わたしも、宝も。

「……ワローレッド？」

ぼつりと漏らした宝の声は、ほとんど声になっていなかった。

その通り、その顔は間違いなくワローレッドのものだった。細い金髪、ややえらの張った彫りの深い造形。——紛うことなく数時間前言葉を交わしたワローレッドその人だと、言うのに。

全身が小刻みに震え、全力で拒否しているのは、認めたくないからか。

三歳の子どもでも分かる。——そこには既に、生命など存在しない。

「……違う」

考えるより先に舌が動く。わたしは恐怖していたのかもしれない。全ての生気を悲嘆と憎悪に変えたオリゾンの表情。その憎悪の方向が、わたし達であることに。

ワローレッドの首を抱えたまま、彼女はブラックホールのような目でわたしを見る。背筋がぞつとした。それを隠せもしない。——それでもわたしは、首を振って弁明せずにはいらなかった。

「——違う。違います。それをやったのは、わたし達じゃない。……優陽じゃない。考えてもみてください、わたし達にはそんなことをする時間は、」

「そんなの分かってる！」

唐突に彼女の言葉が英語になる。わたしを見る目が涙の膜に覆われていた。ひるんで口をつぐんだわたしに、彼女の甲高い母国語が矢継ぎ早に飛ばされる。

「——分かってる、そんなの！きつとやったのは、その女の一味でしょう。……分かってるの。自分で身を守れなかったワローレッドが悪いって、守りに行けなかった私が悪いって、頭では分かっているの！でもサン、あなたは私達と一緒に死なせてくれると言った！」

「――」
一つ一つが鋭い矢となって、宝の不意をつかれた心臓に突き刺さっていく。彼の右腕を細く一筋、赤い血が伝って床に垂れた。しかしその痛みは、肩にはない。

「――でも私、これでも冷静に考えたの。冷静に、あなたの気持ちになって考えてみた。そうしたら、一つの結論に辿り着いた……」

虚ろな目が宙を見つめる。彼女には見えているのだろう。自分なりに考えた、宝の思考が。

「あなたにとって私達は使い捨ての『道具』であり、使い終わった後のことなんか知ったことじゃない。ワローレッドの役目はクリス博士夫婦を連れてきた時点で終わっていた。だからもう、何の注意も払っていなかったんだって。考えてみればこの上なく危険だわ、一人ずつ見張りなんて。あなたはそれを分かかっていて配置したんでしょう？わたし達のことなんかどうでも良かったんだわ。私達の望みなんて、はなから聞いていなかった……」

「オリゾン違うそんな、」

「ワローレッドの首を最上階に運んできたのはその女よ」

投げやりな目がわたし達の後ろに移動する。先生は腕を組んで、蠟人形のように彼女を見据えていた。その手にはしっかりとリモコンを握り締めたまま。

「フットタウンの屋上で見つけたって、私のところに持ってきたの。私はもうただひたすらショックで、持っていたリモコンを取り落とした……。それを彼女が拾い上げたから、放って置いたの。……一緒に死ねないなら、全部同じだって」

拾った――そういう意味だったのか。何もオリゾンの不注意ではなかった。

「そういうことだ」

背後で淡泊な声がある。わたし達は同時に、恐らく事の根源である彼女を睨んだ。宝が狂犬のように牙を剥き、低い声でうなる。

「……お前が何か、そそのかしたんだろう」

わたしに考えさせても、それは明白だ。オリゾンとは賢明な女性である。ただワローレッドの死体を見ただけでは、その恨みが宝に向くことはないだろう。先生がそこに一言を添え、ベクトルの方向を彼に向けた。そう考えるのが妥当な線だ。

先生は冷たく口元を吊り上げて掌を見せる。

「さあ、そのかしたつもりはないな。……私はただ、お前の立場になってみて、お前になったつもりで彼女と話したただけだ」

「――濡れ衣だ！全部お前が勝手に考えた……」

「それを決めるのはお前じゃない、優陽」

つららのような声が彼の言葉を刺し留める。押し黙った宝を冷ややかに一瞥し、彼女はわたし達の向こうに顎をしゃくってみせた。

「……お前の日頃の態度。言って聞かせた思想。仲間の扱い方。……それら全てが、今の彼女に現れているだろう」

返す言葉がなかった、宝もわたしも。――宝とオリゾン達との間に張られた、薄く曇った膜。それが今、確かな障壁となってわたし達の前に立ち塞がっているのだ。

そして、宝の姉であり、本当のクローンである先生だからこそ分かった、自分をクローンと思い込み続けた宝の心境。

先生は長い睫毛を伏せ、深く、深いため息を吐いた。その頬に憂いの色。

「やっぱり……駄目だったか、優陽。粗方予想していたこととはいえ、世界は残酷なものだな」

遺憾の意を強く押し出した言葉は、しかし、もう自分を貶めようなどという気持ちは微塵も含んでいなかった。崖の上から、落ちていく人の手を冷たく突き放すような響き。

右手のリモコンを顔の横に持ち上げ、よく見えるようにわたし達に示す。真っ赤に冴え渡る、カウントダウンのボタン。彼女の左手の人差し指がそれに触れたとき、宝は小さく息を呑んだ。

彼女は笑う。薄暗闇の中で、世界の終わりを見届ける女神のように。

「さよなら、優陽」

細く尖った指に、最後を導く力がこもる。

ここから床を蹴って、彼女に飛びかかって、そのリモコンを奪い取れば、わたし達はまた別の道を選べたのかもしれない。或いはそうでなく、どっちにしる彼女にそのボタンを押されていたのかもしれない。

しかしそのどちらも、今のわたし達には意味を為さなかった。わたし達の足はセメントで固められたみたいにその場から動くことはなかった。

わたしはなぜかそのとき、瞬間横を向いて宝の顔を見た。

彼女の形質を半分受け継いだその顔は、絶望色で塗り潰されていた。

33：階段

無機質な音程の機械音が黒の中を不気味に走り、開始を告げる。一秒もないそれを聞き終えた後、先生はリモコンを床に投げ捨てた。元々ちやちな作りだったそれは、硬い床に触れた途端砕け散った。破片は闇に紛れて見えなくなる。

爆発は起きない。当然だ。これは時限爆弾なのだから。しかしわたしは少なくとも、安心することはできなかった。

——それはあと五分で爆発するのだから。

「——」

瞬間、わたしの手は宝の手首を力任せにつかんでいた。

彼の血まみれの手から、再び黒い銃が落ちる。床に広がった血の固まりかけた膜が破れ、表面に液体の血がじわりと広がった。——というのは単なる後からの憶測で、本当はわたしはそんなものを見てはいなかったのだが。

わたしは戸惑う宝の腕を乱暴に引っ張り、踵を返して走り始めていた。あいた方の手にライト、それで足下を照らすことすらおろそかに、スニーカーの底で叩きつけるように床を蹴る。後ろを引く手は重く、彼の足が対応できていないのが分かった。

「どこに行くんだ！」

この期に及んで彼はそんなことを言う。わたしより速く走れるはずなのに、前のめりになすがままにされながら。

わたしは目指す一点だけを睨みつけて、必要もないのに叫んだ。「逃げるのよ、決まっているでしょう！——わたし、こんなところであなたに死なれてもらっては困るの！」

出なければ、ここから。——ここから、出なければ。

階段の出口に、ワローレッドの首を抱えたオリゾンが佇んでいた。その目はわたし達を見てはおらず、抱き締めた首に顔を埋めるように俯いている。——行ける。わたしは根拠もなく、彼女がわたし達

の前に立ちはだかるという一切の可能性を捨てていた。それが恐ろしく不確かなことだと理解しつつも、彼女はわたし達を逃がすだろうと妙に確信していた。

わたし達を信用しきれなかったオリゾンに対する、わたしの最後の信頼。

「っ——」

わたしは彼女の横をすり抜け、飛び降りるように階段へ駆け出した。白い金属を無我夢中で蹴り、転がるように下へ下へと下りていく。しかしそれはほんの少しの間で、ある地点まで来た時わたしの足は急にそれ以上進むことを拒否した。

底が見えなかった。

この階段は、最初の数十段は建物内に収まっていて、多少無規則な動きを見せる。だがそれ以上行くと外階段になっており、周りは金網に覆われているだけで外界が一望できた。不規則だった階段は規則的に幾重にも折り重なって延々と繰り返す。白は赤に変わり、暗闇の中に不気味に浮かび上がっていた。金網、さらに外側には複雑な鉄骨があって雨は吹き込んでこないが、その鉄骨を叩くマシンガンの銃声のような雨音がひっきりなしに耳に飛び込んできて、鼓膜と頭蓋骨を震わせた。鉄骨に当たらなかった雨はミサイルのように彼方へ落ちていく。

底が見えない。折り重なった階段が、永遠に、轟音と暗闇の中へ続いていくのだ。

奈落へ、わたしを誘いながら。

「瞳、……」

宝の声が掻き消される。それでわたしは、自分の手の中に彼の身体の一部があることを思い出した。

わたしがこのまま止まっていれば、彼もこのまま止まるだろう。わたしがここから駆け下りれば、彼も一緒に駆け下りるだろう。いずれにしても無事ではいられないかもしれない。先生がスイッチを押した瞬間から、望みなど既に絶たれていたのかもしれない。

——それでも。

「……こんなところで死なれてもらっては困るの……」

自分だけに聞こえるように呟いて、わたしは赤い階段へ一步を踏み出した。

手の中の手首が、冷たく細かった。

「いいのか？行かせてしまつて」

ソレスティアは微笑み、オリゾンに向かって言った。そう言う彼女に追う気はないようで、腕を組んだまま悠然と立っていた。

オリゾンはかぶりを振り、小さく答える。

「……いいんです。これ以上は私の知るところではない」

端の见えないフロアに、人二人と死体三体。

「ではこれからどうするんだ」

「……貴女は」

オリゾンがおもむろに顔を上げた。

「ご自分が恨まれていないとでもお思いですか」

その青い瞳は表面上の理性を取り戻しつつ、角膜の奥に確かに炎を燃やしていた。

ソレスティアは佇まいをわずかも変化させない。

「……サンにも確かに恨むところはある。だけど、ワローレッドを殺したのは貴女方です。それは私の中では間違えようのない事実……」

彼女はワローレッドの首を床に置き、飴細工のような指を銃に絡ませて再び立ち上がった。右手でそれを構え、左手でライトを強く握り締める。

金の髪に照り返った光が、漠々たる闇の真ん中を鋭く切っていた。

「貴女を殺します、ソレスティア・クリス。そうしたら私は初めて許される」

何度向けられたか分からない、死を発射する黒い穴。

ソレスティアは取り巻く闇の中で、人知れず猫のような笑みを浮かべた。

恐らく先生は知っていたのだろう。

——宝が彼女の呼びかけに応じないということを。でなければワローレッドを殺したことに意味づけができない。応じる可能性を少しでも見出せたなら、オリゾンもワローレッドも全く関わって来ないのだ。もし関わるとすれば応じた後。——二人は宝に反発するかもしれない。しかしそうしたらそのとき二人を殺せばいい。——何も事前にワローレッドを殺して、オリゾンをけしかけることはなかったはずだ。

「あなた以上のあなたの理解者」。先生はあの手紙にそう書いた。

今ならそれが分かる気がする。彼女は宝を良く理解していた、だからこそ宝の行動が、思考が読めたのだ。——そしてだからこそ、オリゾンを使ってまでその人間性を叩きのめしたいと思った。

「……瞳、……瞳！」

もう何段駆け下りたか分からない。或いはまだ半分も下っていないのかもしれない。その可能性は高い、何せ残された時間はあの時点で五分弱。そして未だ爆発は起きていない。

雨の緞帳の向こうから、宝の張り上げた声が聞こえてくる。

「瞳、もう無理だ、やめよう。君も知っているはずだ、爆弾は上中下と同じ量だけセットされている。どこに行っただって爆発は免れないんだ！」

「だから何だって言うの!？」

跳ぶように一段を蹴り、また一段に着いた足で、その一段を蹴る。片手は未だに宝の手首をつかんだままであった。自分の体温と彼の肌の温度差がわたしの身体をさらに熱くさせる。口を開くと熱く湿った空気が肺に飛び込んできた。

「わたしはあなたを殺さなくちゃいけないの!それにあなたに殺さ

れなくちゃいけないのよ!？——それをこんな、こんなところで、味方の作った爆弾に殺されるなんて……そんな間抜けな死に方、許せるわけないじゃない!」

宝は何も答えなかった。少なくともわたしの耳にはそう聞こえた。

ここで身体を散らせてたまるものか。わたしは刺されないといけないのだ、彼の持つナイフで——。それがわたしがここまで来た意味であり、何より、わたし自身が今いる意味でもあるのだ。

初めて与えられた意味がなくなってしまったら、わたしは一体どこへ行けばいいのだろう？

細い光が進むべき道筋をはっきりと示す。とはいえそれ以外に光などなく、文字通り一寸先は闇の状態だ。階段の外、街がどうなっているのかなんて当然のように見えてこない。雨の中で蠢く人があるのかも分からない。それどころか、今ここから金網を破り身を投げて、地面に着く気すらしなかった。

激しい雨音が圧力となり、わたしの精神を押し潰す。雨がこんなにうるさいものだなんて、わたしは知らなかった。雨の日は外に出なかったから。家の中にいたら、こんな音はほとんど聞こえなかったから。。

例えば百五十年前なら、こんな音を聞くことがよくあったのだろうか？

先生は授業で言っていた、雨宿りでの偶然の出会いから始まる物語。きつとクラスの誰もが、くだらない、危険なことだと思っただろう。わたしだってその一人だ。危険には近づかないのが何よりよろしい。今のご時世、一秒後には世界が滅んでいるのかもしれないのだから。

——わたし達はその危険を回避するあまり、何も見てこなかったのではないか？

わたしが平坦な日常にうんざりしていたのも、街を歩く人が皆こわばった顔をしているのも、毎日が無難に過ごすのに必死だったか

らではないか？

少しでも道を踏み外してみたら――

別の景色が見えたかもしれないのに。

「ストップ」

わたしを現実世界に戻したのは、雨音の中から飛び出してきた間延びた声だった。

光の先を追うわたしの目に、人の足が見えた。滑りにくそうな黒い靴。――男物だ。なんて、そんなことを判断するまでもなく、わたしはそれが誰だか分かっていた。

――この声。

自分の足に残った勢いで、身体が踊り場の柵に激突しそうになる。幸いぶつかったのはブレーキになった足だけで、それでくじくようなこともなかった。とっさに姿勢を立て直したわたしは同時に腕を伸ばし、そこにいた人間をライトで照らし出した。そして、息を詰まらせた。――しかし反面、心の底に沈殿して動かないものもあった。

宝は突然止まったわたしに落ちるようにぶつかってきた。小さく悲鳴を上げた彼は体勢を崩し、怪訝そうな、当惑した目でわたしを見上げる。しかしわたしが彼の方を見ていないのに気付くと、眼鏡を直しながらその視線の先を追い――わたし以上の驚愕に目を見開いた。

そこにいた人。

どこか別の場所で雨に撃たれたのだろう、栗色のくせつ毛は押しつぶされて重く垂れ下がっている。全身海に浸かってきたみたいにならず濡れで、指先や細い顎からは絶えず大粒の雫がしたり落ちていた。痩せた肢体にへばりついた衣服。その衣服には、真っ赤な血がへばりついていた。

薄々予感してはいた。先生が来たのだから、この人もどこかにいるのだろうと。

「……ナオ」

34：過去

自分でも認識できないくらいの芯のない声。しかし彼は、顔に密着した前髪の間隙から目を光らせて笑った。

「よ。三日ぶり」

そして軽い調子で挙げられた手には、刃渡り十五センチほどのナイフが握られていた。宝が身をこわばらせ、わたしをかばうように前に出ようとする。その腕を引いて止めると、彼は振り向いて眉をひそめた。

「瞳」

「いいから」

ナオのことなら、きつとわたしの方がよく知っている。わたしは宝の前に出て、ナオを真正面に見据えた。

元々広くない踊り場だ、彼との間隔はきわめて狭い。ほんの二、三歩歩けば、そのナイフがわたしの身体を貫ける距離に入るだろう。――宝夫妻の部屋で銃を突きつけられたときと同じ、死への恐怖が全身を包んだ。

「……あなたが、」

声の上擦る。彼は小馬鹿にしたように鼻で笑ったが、わたしはそれでも続けた。

「フローレッドを殺したの？」

わたしは彼の服に付いた血を見ていた。バケツに入れた液体を勢い良くぶっつけたように、彼の前身頃を染めた赤。その尋常でない量は、わたしにフローレッドの首を容易に連想させた。

彼は目を細めて冷たく笑う。

「そうだよ。下で見張りしてるところをこのナイフでぐさつとやってさ、斧で首切ったんだ。ねーさんが持っていきやすいように」

フローレッドは普段の態度こそああではあったが、戦闘能力は十分にあったはずだ。先生の元から救い出された時、わたしはその力

を目の当たりにした。不意をつかれただけで簡単にやられるような人間には見えない。恐らくナオとも競り合いくらいはしたのだろう。

ただ、ナオの力が彼を上回っていたただけだ。

そして切られた首を、先生がオリゾンの元へ持っていき――

「……待つて。おかしいわ」

そこでようやく、わたしはある無理に気がついた。

「わたし達はずっと階段を見張っていたのよ？ワローレッドが下に下りた時からずっと。もう一方の階段は念入りに塞いだわ。下の入り口にも、展望台二階の出口にも、そこらから拾ってきたものをありったけ詰めて。それをどかすのも不可能じゃない、だけど音を立てずにどかすのはいくら何でも不可能よ。あれだけ静かなら必ず気付くわ。なのに先生は、そこより上のオリゾンの元へ行った……どういうこと？」

そしてその後、何事もなかったかのように階下からわたし達の前へ上ってきた。あれは恐らく、上から下りてきたら怪しまれるからだろう。しかし、先生はどうやってあそこを通過した？

ナオはなんだそんなことかよと小声で悪態をつき、口の片端を嫌みっぽく持ち上げた。

「ジェット持つてんのはお前らだけじゃねーんだよ。こっちにもあるつての。下で殺して、ジェットに乗って上行つて、お前らのいる階とあの女のいる階を結ぶ外階段の途中でねーさんを降ろしたんだ。知ってるか？あの階段を囲う金網、開くところがあるんだよ。外の鉄骨から入れんの。そこから入って、首渡してきて、また出て、下から上った。そんだけだ」

「でも、ジェットのヘッドライトは……」

「消して乗った。ばれたらめんどいし」

盲点だった。彼の言う通り、ジェットを持っているのは何もわたし達だけとは限らないのだ。特に先生など、持っけていても全く不思議はない。宝はそれを知らなかったのだろうか？――わたしは彼の

表情を窺った。彼の頬は青白く、その可能性を見落としていた自分に驚いているようだった。

「ナオはそんなわたし達を鼻で笑い飛ばす。小馬鹿にしたような、熱のない目。」

「詰めが甘いんだよ、お前らは。なんだかんだ言ってもそこら辺の中学生と大して変わんねー生活送ってたんだ。思い上がんのもいい加減にしろよ。でないと——」

そしてその口が紡ぐのはあの文句。

「『お前、俺に殺されるぜ』」

まぶたの裏が透明な赤色になった。

何のことはない、普通なら不愉快なだけなのに、やけにわたしの耳に染みついて消えない言葉。日常に流されて、一度は忘れかけたけれど。

彼は皮と骨だけで形成されているような肩をすくめて、前髪を掻き上げた。

「……忠告しただろ。最初に捕まえたときにも——」
濡れた頬がゆっくりと笑みをかたどる。

「そのずっと前にも」

耳に、二つの声が同時に蘇る。一つは現在の彼の声。そしてもう一つは、それよりももっと高い、幼い子供の——しかしやけに醒めた声。

今更——。わたしは眉を吊り上げて、ペテン師のような彼を睨む。

「……覚えてたのね。わたしのこと」

何とも思っていないとばかりに彼は首を傾げた。

「話がややこしくなりそうだったからさ。黙つていた」

——それでわたしがどれだけ気を揉んだかも知らないで！

今更覚えていたなんて言われても、わたしには喜ぶだけの余裕がなかった。逆に不安すら覚えていた。過去に面識があるからといって、彼がわたしに情けをかけるわけがない。そのときにさえ、わた

しを殺すと言っていたのだから。

彼の握ったナイフが光る。

「俺んちは貧乏でさあ」

突然、彼は歌うように言った。その声は朗々としていて、雨音の中から真つ直ぐこちらに届いてくる。

彼は張り付けたような笑顔のまま、続ける。

「親父がいなかったわけ。俺が生まれてすぐ離婚したとか何とかでまあありがちな話だよな。……で、母親と二人でやつすいマンションの下の方ーに住んでたのよ」

マンションの下層は、交通の便が悪いやらで上に比べて賃貸料が断然安い。そのため経済格差が目に見えて分かりやすかった。高層マンションだらけになった街の欠点とも言えよう。

「かーさんは一生懸命働いて、俺に飯食わせてくれてた。弁当なんかもさ、忙しいのに作ってくれたんだぜ。俺は何度給食つて奴が残つてたらなあつて思ったか分かんねえ。そうしたらかーさんの苦労は少し減るし、食費ももうちょい安く済むだろうにつてな。……まあ小学校入ってから自分で作り始めたんだけどよ。でもそんなじゃやっぱりかーさんの苦労に根本的な変化はもたらせなかったんだな。……俺が小三のとき、かーさんは倒れた」

不幸の典型みたいな話を、彼は遠い目をして語る。

「四日間昏々と眠り続けて、そのまま死んだよ。ほんと、寝てんだか死んでんだか分かんなかった。医者なんて呼んでも払う金ないし、あいつらが貧乏人相手にするような慈善家じゃないって分かってたから、俺はその四日間誰にも言わなかった。それに……変な話、かーさんはこのまま死んだ方がいいんじゃないかって思ったんだ」

わたしは眉をひそめた。彼はそこで、自嘲の笑みを浮かべた。

「そっちのがかーさんのためなんじゃないかって。死に際のかーさんは、そりゃあもう見るに耐えない有様だったぜ。ガリツガリに痩せ細って……お前も結構細いけどさ、そんなじゃなくて、もつと不健康な細さ。顔なんか常に土気色してたし、実年齢よりずっと年

老いて見えた。……そんなかーさんを、これ以上この世に置いて、奴隷みたいに働かせて、何になるんだって。だったらもういつそ……これ以上苦しめないように、眠ったまま死なせた方がいいって」彼の目には、当時の状況がありありと描かれているのだろう。痩せ細った母親。——わたしはテレビの前でだらしとしている自分の母を思い出すとうんざりした。

「……死んだ後のことはよく分からなかったから。とりあえずそのまま何日か生活してみた。けどさすがに、何つーの、死臭？がひどくてさ、マンシヨンの大家に言ったんだよ。そしたら迅速に死体の処理して——まあ火葬場に持ってつたりだ。その金は全部払ってくれた——で、事が済んだら即行で追い出されちゃった」

雨に濡れたわけでもないのに全身が重い。座り込みたくなるほどのわたしに反し、彼は一本の木のように立っていた。

「それがお前に会う直前のこと」

遠い目の焦点がわたしに合わされる。

わたしは彼を前にしていたたまれなくなった。今なら彼を突き飛ばして、再び階段を下り続けることができるかも知れない。いや、きっとそうすべきなのだ。時間ももうあまりない。

——わたしが毎日あの公園でぼうつとしている間に彼がそんな目に遭っていたなんて、考えるだけで逃げ出したくなった。

「なあ。あのとき俺が言った言葉の意味、分かるか？」

思い返す。あのときわたしが意味を訊いたら、そのままだ、世界立のくせにそんなことも分からないのかと言ったはずだが。

「……わたしみたいな顔した奴は、そのうちあなたみたいなのに殺されるって」

子供の口で彼はそんなことを言ったのだ。そのときは何とも思わなかったが、今思うと末恐ろしい小学生である。

「ああ。……じゃあその意味は？」

わたしは首を振った。それは今考えても分からない。すると彼はまた笑って、こう答えた。

「そのまんまだよ」

また、同じ答えを。

どういうこと——とわたしが口を開きかけた刹那、彼の左手が不意について伸びてくる。獲物を捕らえる鷲の速さでわたしの襟をかなぐり、目の前で怒鳴り散らした。

「お前みたいな不幸面した奴は、俺みたいな本気で生死を懸けてる奴に殺されるってことだよ!!」

その顔には最早笑みのかけらも見られず、瞳孔の開ききつた目は怨憎に光っていた。

強く、首が締め上げられる。左手だけでこんなに力が出るなんて——。彼の細い腕に、血管が浮き彫りになっていた。人間の、熱い血を流す血管。

「頭が良くて、世界立入って、生活にも何の不自由もねえくせに、何であんな顔がでkindだよ!? 自分が世界で一番不幸みたいなさあ!! つまんねーつまんねー、こんなわたしは不幸ですってか!? ——ふざけんなよ!! 自分がどれだけ恵まれた環境にいるか分かんねーのか!? 明日の飯の心配するような奴が世界中にはまだ沢山いるって、学校で教わんなかったのかよ!!」

豪雨。——そんなものを凌駕した感情の嵐が、今真っ向からぶつかってきている。

わたしはそんな顔をしていたのだろうか?

笑いも怒りもしない無表情で生活しているつもりだった。六年前も、つい最近までも。それは実際何も感じていないからであって、そんなわたしが、自分を不幸と思うことなんて有り得ないのに。

——他人からはそう見えていたのか?

「……俺は何日か、宛もなく街をさまよっていた。怖かったぜ。所詮はただの九歳のガキだ。夜は誰にも見つからないようにゴミ箱に隠れたりして、それでも見つかったときは殴られたりもした。腹が減るのには慣れてたけど、さすがに餓死しそうだったぜ。そんなとき俺を助けてくれたのがねーさんだったんだ」

先生の顔が頭をよぎる。背後で宝の身体が緊張するのが分かった。

「ねーさんはそのとき、大学の研修でたまたま日本に来てたんだそう。当時まだ十九歳だったけど、俺のただならぬ様子を察知して住む場所を与えてやるうかと言ってくれた。俺は喜んでアメリカまでついてったね。何も疑わなかった。仮にそれで臓器取られて売られようが、どうでも良かった。どのみちいつ死んでもおかしくない身だったしな。……ねーさんは俺を研究所で育ててくれた。色々教えてくれたし、鍛えてもくれた。そして最後には、秘密調査部隊の一員にまでしてくれたんだ」

宝は一体今どんな顔をしているのだろう。どんな目でナオを見ているのだろう。

先生がナオをそこまで可愛がったのは、恐らく、日本にいた弟への罪滅ぼしだ。

罪？それは分からない。客観的に見れば悪いのはクリス夫婦の工ごだろう。先生にも宝にも何の罪もない、しかし――母親の異変に気付きながらそれを追究しなかった、先生が罪悪感を感じていらした？

「……ねーさんは俺の命の恩人だ……」

ナオが地に響くような低いうなりを漏らす。左手で強くわたしの襟をつかみ、右手には狂気を光らせるナイフ。

「だから、ねーさんの邪魔をする奴は俺が殺す。……お前ら二人とも、今この場で殺してやる！」

35：爆発

そして振り上げられた一閃を、わたしはライトをかざして防いだ。プラスチックを通して、電撃のような衝撃が腕の骨を走る。――強い。その力に耐えきれず、ライトが手から弾き落とされた。

「瞳！」

「……っこの」

宝が叫ぶが、付け入る隙がない。ナオは一度は押し返されたものの、再び強く襟を引っ張った上に今度は足をかけてわたしを床に叩きつけた。後頭部から背骨にかけて鈍い痛みが走る。

「瞳――」

「動くなよ！」

ナオの怒声が宝を制する。彼はわたしに馬乗りになり、肩を押さえつけて動きを封じていた。わたしは頭を動かすことも出来ず、眼球を最大限横に向けて彼の腕の先を見た。そのものは見えなかったが、首筋にひやりとした金属の感触があるのは分かった。

「動いたら即こいつの首を切るぜ。ま、どっちにしろお前ら武器持つてねーみたいだし、勝ち目なんてないけどな」

「くっ……」

宝の足は静止を余儀なくされる。確かに銃は宝が落としてきてしまった、それがあれば少なくともナオを威嚇するくらいはできたのだが――。

わたしは目を戻し、正面を見つめた。ナオの骨張った喉が真上に、視線を下ろせばＴシャツのへばりついた胸、腹が見える。顔は宝の方を向いているようで、わたしに注意を払ってはいない。押さえつけられているのは右肩で、ナイフがあてがわれているのは左の首筋。

わたしはそつと、彼の視界に入らない位置で左手を持ち上げた。

「……俺は世界なんて知ったこっちゃねえ。ねーさんが作り替える

って言やあ作り替えるし、壊すって言やあ壊す。ただその邪魔をする奴は許さねえ。ねーさんを害する奴は許さねえ！」

その手でブレザーのポケットを探る。慎重にするまでもなく、それはすぐに見つかった。確認する。その手触り。——大丈夫、いける。

「……随分先生が好きなのね」

わざと冷静にそう言つと、ナオは顔をわたしの方に向けた。獣のような顔。

「恐いとか何とか、散々言つてたくせに」

「……うるせーよ」

彼は顔をしかめてわたしを睨みつける。クラスの連中ならすぐみ上がってしまうようなすごみ顔に、しかしわたしは敢えて微笑んでやった。

「あなたが先生のためにわたし達を殺していいなら、わたしにも誰かのためにあなたを殺す権利くらいあるわよね」

「……はっ」

彼は口角をゆがめて笑う。爬虫類のような目玉をぎよろりと回し、わたしの右肩をさらに強く押さえつけた。

「できるもんかよ。自分の立場把握してから口利くこつた。……まあもつとも」

首筋から金属の冷たさがなくなる。

「その口ももう二度と開かれることはないだろうけどな!!」

彼が右手を振り上げ、手の中の刃が頂点できらめいたその瞬間。

——この一瞬を待っていた。

「ごめん」

呟きと同時に、左手に確かな感触を覚えた。

「……な」

宙で固まった彼の右手がナイフを取り落とす。わたしは上半身を右に逸らしてそれを避けた。金属の床から直に響く音が鼓膜を震わす。わたしの右肩を押さえる彼の左腕も震えていた。

「お前、持って……」

わななく声を発すると彼の口の端から赤い血がこぼれ、わたしの頬を汚す。しかしそれはさほど問題ではない。――わたしの左手はそれ以上に汚れているのだから。

ぬめる手でしっかりと柄を握り、わたしは彼の胸から自分のナイフを抜き取った。さらに大量の血が傷口から噴き出し、わたしの首から腹部までを鮮やかに染め上げた。

「……ごめんね」

身体を支えていた腕が崩れ、彼がわたしに覆い被さってくる。――温かい。あれだけ冷たい雨に撃たれていたのに、彼の血のなんと温かいことが。

その身体を抱き留めながら自分の身を起こし、彼を床に寝かせた。そこから見る見る赤が染み出していき、階段へと垂れ流れていく。

「急いでいるの。……本当にごめんなさい」

彼の両目はしっかりと閉ざされていた。もう二度と開くこともないだろう。その顔はどこか不満げで、しかし穏やかだった。

わたしが使ったのは宝を殺すためのナイフだ。

折り畳み式のもので、丁度ポケットに入るサイズだった。東京タワーに着いてあのフロアに上ったとき、宝がわたしによこしたのだ。最後にこれで殺してくれ、と。――彼も同じものを持っているはずだ。

「なんで……」

亡霊のような生気のない声が背後から降ってくる。振り返って見上げると、宝が呆然とそこに立ち尽くしていた。

「なんでこんなことになるんだ？」

わたしは立ち上がり、口を結んで彼を見据える。度の入っていない無意味な眼鏡を未だ掛けたまま、彼は真っ黒い目でナオを見てい

た。わたしの身体に降り注いだ血は洗い流されることなくへばりついている。

彼の唇は乾いていて、声には芯がなかった。

「僕は僕の正しいと思うことをしただけなのに。……こんな狂った世界を壊してやろうと思ったただけなのに。……どうして君の手を、そんなに汚させる羽目になったんだ……？」

不毛な自問。きつと答えは一生出ない。——いや、彼はきつと出ることを望んでいない。出たとき、彼は全てを否定されると分かっているから。

わたしは自分の両手を開いて見る。肌色の部分が見えないほど、温かな赤でコーティングされた手。

——どうでもいいのだ、こんな手など。汚れるなら汚れればいい。——自分で選んだ汚濁ならば。

「……あなたが正しいと思うなら、それは正しいことになるわ」

彼の虚ろな目がわたしを映す。わたしは彼の両肩を強くつかんで引き寄せ、顔と顔を突き合わせた。

わたしの声が、届くように。

「あなたはあなたの正しいと思うことをすればいい。わたしもそうする。……だからあなたをこんなところで死なせない」

——だから早く、ここから逃げないと。

彼の茶色い目が、静かに見開かれていった。わたしは返事を待たずに彼の手をひったくる。明かりは彼のライト一本。——十分だ、きつといける。行かなきゃいけないんだ、わたしの意義を守るために。——彼の存在を守るために。

行かなきゃ——

「——」

そのとき、光が。

上と下、両側から挟み込むようにわたし達を照らし、

世界から音が消えた。

「優陽、」

反射的に叫んだ声が引き金となったかのように、静寂は一気に轟音へ変わる。叫びはそれにかき消され、宝の耳には届かなかっただろう。同時に上下から熱と風が襲いかかってきて、わたしは彼の手を離してしまった。

流される。身体が浮いている。

——息ができない。

「優陽——」

それでも叫んだ声は、光の中に取り残されてしまった。

36：落下

あつい。

「……」

音が聞こえる。耳の中で空気の塊が絶えず回転しているような、そしてその上から太い針金が大量に降ってくるような、そんな音だ。目覚めたときからわたしの耳を支配してやまない。

そしてその針金は、どうもわたしの身体を打っているらしかった。不愉快な痛みが四肢の存在を認識させる。感触から判断して、どうも袖があつたはずの左腕が剥き出しになっているようだった。

まぶたの裏が眩しい橙色。——色？どうして。目に映るのはただ闇ばかり、そんな世界にしたはずなのに。

「……」

眉根を寄せ、おびえるように目を開いていく。頬を叩きつける針金——いや、大きな雨粒。

その向こうに見えた空は赤く、燃えていた。

「……ゆうひ？」

痛む腕で上半身を支え起こす。背中全面を鉄板で打ち付けられたような激痛が走った。服の所々が破れたり、焦げて穴があいたりしている。両脚、特に左脚に多く擦り傷・切り傷・火傷があり、皮膚がぼろ雑巾みたいになっていた。そこに雨水が染み込み、痛みとも痺れともつかぬ苦しさが一ひっきりなしに襲う。

そしてそんな様子がはっきりと目に見えるのは、空を焦がす炎のせいで。

身をよじり、それを見上げる。数十メートル離れたその場所で。

——豪雨の中だというのに、東京タワーは激しく炎を揺らめかせて燃えていた。

いや——元、東京タワーと言すべきか？——その特徴とも言える尖った先端部は跡形もなく、高さは元の三分の二もなくなっていた。

全く——こんな雨の中でもここまでの威力を発揮するなんて、一体どんな爆弾を作らせたのだ、彼は。

そう自分で考えたとき、一人の人間の姿が鈍った脳を揺さぶった。

「……優陽」

宝、優陽。

彼を探さなければ。

膝を曲げると骨に激痛が走る。皮膚と皮膚が触れ合うだけで不愉快だ。それでもわたしは立ち上がった。立ち上がって、辺りを見回しながら叫んだ。

「優陽！——優陽！」

どうやらわたしは一階の地面に吹き飛ばされたようだ。東京タワーの周辺には高い建物が存在しないため、それなりに広いスペースがある。わたしはそこに落ちていた。

返事はなく、わたしの足はどこへともなく歩き出す。左脚の負傷が思ったより激しく、引きずらないと歩けなかった。そのせいで、少し歩いたところで何かにつまずいた。わたしはとっさに濡れたアスファルトに両手をつく。たったそれだけで肩の骨まで痛みが響いた。顔をゆがめながらも首を巡らし、つまずいたものを見やる。何か棒のようなものであった。よく見るとそれは人間の腕で、茶色く変色してはいたが、根本まで目で追えば確かに体がついている。見知らぬ男のものだった。

わたしはそのとき初めて、この地上が人の死体と血と瓦礫で覆われていることに気づいたのだ。

吹き飛んだタワーの瓦礫の他に、恐らく別の建物からのガラスなども混じっているのだろう。裸足で歩けば一歩ごとに血が流れそうな広い道。その上に投げ出されたるは老若男女様々の死体。相当な時間雨を浴びていたのだろう、どれもこれも皮が水を吸ってたるんでいる。建物から落下して頭の潰れたのもあれば、暴動の中で殺されたのだろう、背中から包丁の生えているものや、体中に穴のあい

ているものもある。死屍累々、文字通りそんな光景だ。そしてそれらを見たとき、わたしはようやく自分の鼻が狂っていることを認めた。——これだけの屍を前に、何の異臭も感じないなんて。

わたしが助かったのは恐らく、これらの死体がクッション代わりになってくれたからだろう。

しかしわたしは、自分が殺したこの人達に何の罪悪感も感謝の気持ちも湧いてこなかった。それどころではないのだ、今は——。

彼が、宝が、もしこの屍の一つになっていたら。

「優陽、優陽！——お願い、いたら返事をして！」

立ち上がりながらまた叫ぶ。どうやら地面に落ちたのは左半身かららしく、左腕と左足が思うように動かなかった。杖が欲しい。——寄りかけられる何かが欲しい。今切実にそう思った。

額に脂汗が浮かんでくる。体は確実に痛みを感じているらしい。

「優陽……！」

声は叫びにもならなかった。燃えるタワーの光が目を刺して、雨だというのに瞳が乾いている。一体いつまで燃えるのか。——何を燃やしているのだろうか。

できれば思いつきになかった可能性が頭をよぎる。——まさか。いや、わたしが飛ばされたのなら彼だって飛ばされたはずだ。生死はともかく、わたしと同じくらいの距離まで飛んでいったはずだ。

まさかあの炎の中に取り残されたなんてことは——。

「……瞳？」

かすかだが。

確実な声が、雨の下をくぐってわたしの耳に届いた。

「優陽？」

声を張り上げ、周囲三六〇度を見回す。茶色い肉片、黒く乾かぬ血、無機質な瓦礫、その中に。

肌色の皮膚が見えた。

「優陽！」

わたしは走り出したい衝動に駆られるが、足がそれを許さない。

とはいえそう遠くはない位置だ、走らずともすぐに辿り着けた。――彼はアスファルトの上に仰向けに倒れていた。近くに複数の屍が固まっている、恐らくそこに落ちたのだろう。とにかく、生きていた。――胸を撫で下ろし、わたしは彼のそばに膝をついた。

「優陽、よかった、生きてたのね」

「瞳……？」

彼はわずかに首を動かし、そして、右手を弱々しく宙にさまよわせた。

「そこにいるのか？」

その声は炎のせいかな乾ききっていて、ひどく掠れている。わたしは違和感を覚え、眉をひそめた。その声にはない、言葉、そして行動にだ。彼の手は見えないものを探し回るかのようにふらふらとさまよって、おまけに彼の目は明らかにわたしを見ておらず――。

――目？

思わず彼の顔に自分のそれを近づける。髪は乱れ、頬は汚れていて、耳から血が出ていた。眼鏡はない。そして――その目は固く閉ざされていて、開く気配もなかった。

開けたくもないのだろう。開けたとして、無駄だから。

「あなた、目が――」

わたしが言うと、彼は口角を変にゆがめて笑った。

「気づいたときには見えなくなっていた。多分ガラス片が何かで傷ついたんだ」

ガラス片――眼鏡だろうか。

言葉遣いこそ平常通りだが、呼吸は荒く、息を吐くことに隙間風のような妙な音がした。身体を見ると、わたしと同じように服が破れたり焦げたりしていて、おまけに右足から結構な量の血が出ている。お互い満身創痍だが、彼にはわたしの姿が見えていない。――わたしはさまよう彼の手をそっと握った。それで少しは安堵したのか、彼は今度は自然に頬を緩めて笑った。

「他に誰かいるかい？……ソレスティアは？」

わたしは膝をついたまままた周囲を見渡す。相変わらずの死肉、瓦礫。見ているだけで腐臭が漂ってきそうな光景――。

その中にあるものを見つけて、わたしは目を見張った。何とか声を上げるのだけは抑えた。――しかし言わねばなるまい。声のトーンを落とし、わたしは彼に囁く。

「……死体が見えるわ。先生の……」

宝の口元から笑みが消えていく。

何を考えているのだろうか。自分の手で殺せなかったことを悔いているのだろうか、それとも――。

少しの間沈黙して、彼は「そうか」とだけ呟いた。

「瞳」

「……何？」

見えていないくせに、彼はわたしの方に顔を向ける。瞳の見えない彼というのは、随分分かりにくかった。

それでも今言う言葉の真偽は分かる。彼はもう、わたしに嘘などつかないだろうから。

「……すまなかった。巻き込んで」

何とも情けない声で、彼はそんなことを言った。

見えないのをいいことに、わたしは思い切り顔をしかめた。いや、たとえ見えていてもわたしはそうしたに違いない。負の感情を押し殺すのは苦手らしかった。そもそもこれまで、わたしは感情を押し殺す必要がなかったのだから。

「謝るくらいなら最初から巻き込まないで。強引だったくせに」

どうも声色にも心境がにじみ出たらしい。彼は困ったように笑って、また「ごめん」と謝った。

「自分勝手よ、あなた」

「ごめん」

「果断に富んでるんだか優柔不断なんだかはつきりしないし」

「ごめん」

「そんなだからオリゾンにも信用されないのよ」

「……ごめん」

「わたしは後悔してないけど」

宝は口を少し開いて、驚いたような顔をした。

「わたし、今までこんなに考えたことなんてなかった」

わたしは彼の手を両手で包み込むように強く握る。わたしより大きな、細くて薄い手。

「今まであんなに必死で走ったことなんてなかった。今まで薬吸って気絶したことなんてなかった。自家用ジェットに乗ったことなんてなかった。銃を握ったことなんてなかった。東京タワーの階段を駆け下りたことなんてなかった。こんな雨に打たれたことなんてなかった。——こんな暗闇の中に立ったことなんてなかった」

宝は口を開きっぱなしにして黙ってわたしの言葉を聞いていた。その表情はとても世界を壊した人間のものとは思えない。わたしは奇妙におかしくなって、思わず笑みをこぼす。できれば、それを彼に見せたかった。

「全部あなたに関わらなきゃ有り得なかったことよ」

もし。——彼がわたしを選ばなければ、わたしは何も経験しないうちに死んでいただろう。

「それについてわたしは後悔していない。——ねえ、感謝させてくれないの？」

混じり気なく「ありがとう」と、わたしは言いたいだけなのに。

彼があんまりにも謝るから。

「折角お礼を言いたいの、そんなに謝られたんじゃ不愉快なのよ」

「あ、あ。ごめん」

「……また」

「あ、ええと……」

彼は完全にまごついた様子で眉を下げた。頬に自然と微笑が宿る。同時に、彼の目が潰れてしまったことを大層惜しく思った。目が見たかった。彼の透明な茶色の瞳が、もう一度見たかった。

やがて彼は大きなため息を吐き、それから妙に晴れやかに笑った。

「……やっぱり僕に間違いはなかった」

どつという意味か。わたしが問う前に、彼が強くわたしの手を握り返した。

その手に、わたしは否定したい未来を見た。——さっきまでなかった震えが、確実にそこにあつたのだ。

雨が熱を奪っているのか、彼の顔は青を通り越して色をなくしている。それでも頬に微笑を浮かべたまま、彼はわたしの名を呼んだ。

「瞳」

「……何？」

思いがけず声の上擦る。掠れていたはずの彼の声はわたしの声より余程朗々としていて、ひどく穏やかだった。——世界の最期の前に、静かに祈りを捧げる神父を思わせた。

彼は笑う。母に抱かれた無垢な子供のようにな。

「——ありがとう」

そして最後の息を吐いた瞬間、手の中の震えは止まった。

代わりにわたしの手を握る指の力が緩やかに抜けていき、さっきまではなかった重量がずしりと両手に沈んでいた。

37：決別

「……優陽？」

呼びかけても、手を強く握ってみても、返事はない。わたしに向
けられていた顔はくたりと横を向いて、その頬にはまだ微笑が残っ
たままだった。ただ手ばかりが重く、冷たくなっていくような気が
した。

わたしは彼の手を地面に置き、彼の胸に右耳を押し当てた。

音はなく、血液を送る動きも感じられなかった。

「……」

彼の口の前に手をかざす。吹きかかる吐息はない。頬を撫でれば
冷たく、それは雨のせいではないように思えた。

わたしは静かに目を閉じて、少しだけ先に旅立った彼に祈りを捧
げた。

——打ち所が悪かったのかもしれない。わたしは彼があのだの死体の
山の上に落ちたものだと思っていたけれど、実際は直接アスファ
ルトの上に落ちたのかもしれない。話しているのもやっとだった可
能性もある。或いは右足から血が流れすぎたのかもしれない。分か
らない、わたしには死の知識がないから。

どちらでもいい。彼がもう目を開かないことに変わりはないのだ。

再び目を開くと、わたしは彼のズボンのポケットを探った。ある
はずなのだ、わたしと同じ——あった。左のポケットに、それは入
っていた。

折り畳まれていたそれを開くと、銀の刃に炎が映って橙色に光る。

わたしが、ナオを刺したのと同じナイフ。

申し訳ないことに、わたしのナイフは爆発時どこかへ行ってしまう
った。ただでさえ宝以外の人を刺してしまったのにおまけになくす

なんて、どう申し開きたらいいのか分からない。でもせめて、――
――せめて形だけでも約束を果たそうと、わたしは彼のナイフを彼の
心臓に突き立てた。

刺された胸から血がにじみ出て、シャツを薄く染める。抜き取る
と、やっぱりそれよりは多い血が溢れ出したが、ナオのときよりは
ずっと少ないように思えた。水浸しの衣服に血の浸透は速く、見る
間に彼の前身頃が水彩絵の具のような赤色に染まっていく。

腕を伸ばし、ナイフを天にかざす。雨が血を洗い流してわたしの
腕を伝っていった。刃は再び銀色を取り戻し、橙色を映す。

わたしはそれを宝の右手に握らせた。

そして静かに振り返り、そこにいるはずの人を見た。

長いダークブラウンの髪は水を含んで重々しく垂れ下がり、全身
ブルーに飛び込んだみたいに濡れてはいるが、白いスーツには汚れ
一つない。その頬は今凍り付いたように無表情で、青白かった。

その中で赤い唇と透き通る茶色の瞳だけがやけに目立ち、死屍累々
の世界で唯一生きているもののように思われた。――彼女は、少し
離れたところから、わたし達の様子をずっと眺めていたのだ。

「先生」

彼女を呼んだわたしの声は、どんな響きを持っていただろう。

――わたしは嘔吐した。最期の最期、わたしを選んでくれた人
に。

ソレスティア「クリスは無言でそこに佇んでいた。手には何も持
っておらず、しかし目それ自体が凶器のように鋭くわたし達を見据
えていた。何を考えているのかは分からない。ただわたし達を罵っ
ているのかもしれないし、哀れんでいるのかもしれないし、或いは
今からわたしを殺そうとしているのかもしれない。

それでは困る。――それでは困るんです、先生。

わたしはナイフを握らせた宝の手を持ち上げた。重い。――それ
でもわたしは、彼の手を使わなくてはならないのだ。

先生――今までお世話になりました。

わたしは母親より、父親より、他のどの教師より、世界中のどんな大人よりも、あなたに敬服しています。

雨の向こうから痛いほどの視線が届く。タワーの炎は弱まりつつあつて、背後で何かの崩れる音がした。

その音を聞いた瞬間、わたしの心の全ての凹凸が一瞬にして消えた。

気づくとわたしは破顔していた。何も考えず、至極当たり前のように浮かんできた笑み。先生は少しも驚いた様子を見せず、そんな彼女にわたしは言う。

「さようなら」

そして宝の手に握られたナイフで、わたしの心臓を貫いた。

全身が芯から石化していく。世界は赤かった。脳が睡眠不足のときみたいに重い。どこかでまた何かが崩れる音がした。それがまた眠気を増長させて、呼吸も細くなっていく。

わたしの身体の下には確かに宝の身体がある。それでもう、寝てもいいかなという気分になった。

ふと視界に足が入った。赤いハイヒールの、女の足だ。上を辿ると顔が見えた。真下を向いたその顔は、口を開くと吐き捨てるようにこう言った。

「馬鹿どもめが……」

そのとき彼女の目元が濡れていたのは、雨のせいかと思う。

だってこの人が泣くなんて有り得ないだろう？

かすむ視界の中で赤い靴が踵を返し、わたし達から遠ざかっていく。

死体と、血と、瓦礫の世界へ、彼女は引き返していった。

わたしは眠かったので目を閉じた。家のベッドに横たわるより、ずっと心地よい眠気だった。

00：夢

夢を見た。

地面も空も灰色で前後左右にも際限なく灰色が広がっており、腕を伸ばせば何もつかまず、下を蹴っても感触がない。それでもわたしは確実にそこに立っているのだ。落ちもしなければ浮きもしない。足はあるのに不安定だ。

前を向くと彼の姿が見えた。白いＴシャツに白いズボン、靴も靴下もなく裸足であり、黙ってうつむき灰色を見つめている。わたしは思わず地面を蹴って、彼の元へ駆け寄った。よくよく見ると自分も裸足であり、白いワンピースを身に着けている。おまけに髪は縛っておらず、走るたびにふわりと浮いた。

近づいても彼はうつむいたままだった。わたしを見ようとしなくてその目に眼鏡を掛けているのに気づいたので、わたしはそれを取って地面に叩き付けて割ってやった。

するとようやく彼は顔を上げて、わたしを見るとちよつとだけ笑った。透き通る目に映ったわたしの顔は自分でも不思議なくらい風いでした。

00：夢（後書き）

以上で終了です。

お読み頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9253g/>

天才たちの反乱

2010年10月8日11時54分発行